

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九七二号



日川協加盟

No. 972

同人特集 花百句
五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口1/6頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月23日

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル 201号室

TEL 06-6777-3490

川柳塔社

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

ユーモアは何処へ行つた

河内 天笑

平成二十年度全日本柳人写真名鑑が四月一日に目出度く発行された。日川協が五年に一度刊行しているこの名鑑は現時点で活躍する柳人を写真と共に記録する貴重な出版物だ。私を含め九人の編集メンバーが再校・再々校を日川協事務所に集い責とした珠玉の作品だ。

この名鑑の製作に関わる一員として率直に感じた事は極端にユーモア作品が稀少であった事だ。ユーモア作品がそう容易く作れる代物でない事は皆さんご承知の通りですが、こゝも少ないと侘しさを通り越して悲しくなつて来る。愚痴をこぼすだけでなくほんとに何とかしなければと痛感した。

ユーモア句にはその作品のどこかに「人間であるが故の哀しさ」つまりペーソスの裏打ちが必要なのだ。

「せんど見たあと天ぶらになるもみじ」(天笑)と、「肚の虫治まる頃は酔いつぶれ」(天笑)とでは笑いの質が違う。「糞虫のなんぼ這うても壁だった」(豆秋)とこの三句を引いて、二句目三句目は共に虚しさや遣り切れなさを追求した結果生まれたユーモア句であり一句目はおかしみ、つまり軽妙な滑稽さを求めた作品である。質は異なってもどれもユーモア句だ。名鑑の校正に携わって私が接した約一五〇〇句の内ユーモア作品と感じたのは下記の九句にとどまった。

ひとり住み憚ることのないヌード
ゴミほどのダイヤで妻にありがとう

伴奏を物ともせずには節はずれ

馬の骨扱いされた初対面

離れるとさびし一緒はうつとし

ロボットの手伝いに行く通勤車

金で済む話と聞いてなお困り

生きてますピサの斜塔の形して

通院も買物も出来はつとかれ

男はつらい年金も妻差しおさ

尚、ユーモア作品が極端に少なくなっている原因の一つに

選者がユーモア句を上位に抜かない傾向がある事と、上位に

真面目な作品ばかりを取り過ぎるからであらう。それを如実

に示しているのがこの名鑑の最初に掲載されている「全日本

川柳大会授賞句」及び「国民文化祭授賞句」にユーモア作品

が殆んど見当たらない事だ。選者の勉強会を定期的に実行し

てレベルの向上を望みたいものだ。

自選句

悩みみな喋らせてから欠伸され

天笑

満月をバックにジャンボ無地着地

ク

神様が意地張り合っている戦

ク

しがらみを行ったり来たりするお金

ク

あの世から見る筈でした地球の出

ク

高杉 千歩

穴吹 尚士

池上 清治

村上 玄也

浅難美智子

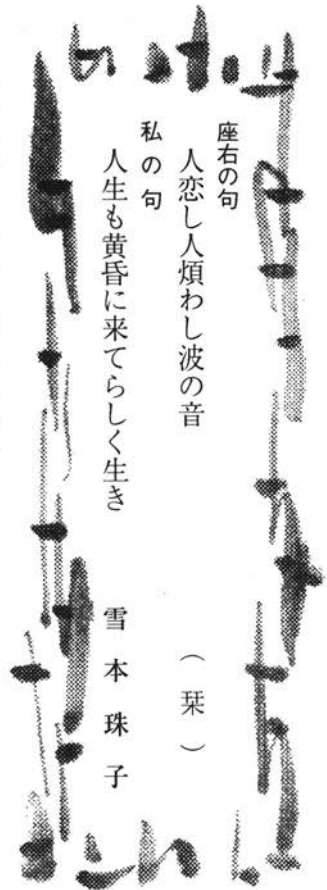
北野 哲男

堀 正和

田口 麦彦

羽津川公乃

撫尾 清明



座右の句

人恋し人煩わし波の音

(葉)

私の句

人生も黄昏に来てらしく生き

雪本珠子

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「アンネのバラの教会」

■巻頭言

ユ一モアは何処へ行つた

河内 天笑 (1)

川柳塔(同人吟)

八木千代 (2)

温故知新

河内天笑選 (4)

川柳塔の川柳讃歌 (41)

木津川 計 (47)

自選集

(48)

水煙抄

西出楓楽選 (52)

路郎句抄

(77)

同人特集 花 百句

(78)

愛染帖

新家完司選 (82)

誹風柳多留 一篇研究 34

(86)

まるで玉手箱みたい

八木千代

かれこれ八年くらいになるでしようか。ところは立川市のカラオケ喫茶、N・H・K全国大会が終わって二次会のそのあと減多に逢えぬからと、大木俊秀さんの後をぞろぞろ知らぬ街とて信号を渡り左に右に、顔触れは竹本瓢太郎・森中恵美子・佐藤信子・それに五十嵐修・木野由紀子さんというメンバー。顔見知り同士とはいえ、カラオケなどの縁の全くない私には眼の眩むような世界でした。何回も順番に首を振って、とうとう促されて度胸を決めて立ち上がりました。

ワタシハアルトキ恵美子サンニキキマシタ川柳ガ上手ニナレルデショウカケセラセラナルヨウニナル他人ノコトハワカラナイ続いて2番も替え歌です。今度は俊秀さんに向けてです。

……俊秀サンニキキマシタ川柳ガ上手ニ・デショウカ・ケセラセラナルヨウニナル・自分ノコトモワカラナイ・ケ・セラセラ・マイク握る手がガチガチ音を出すのを感じながらも私としては震え声ながらの熱演でした。思い出せば川柳さんと長い長い月日に、こんなこと、あんなことも困った日も辛い時もあったに違いありません

檸檬抄「沖」……………鈴木公弘・西口いわゑ共選……………(88)

一路集「織る」……………安藤寿美子選……………(90)

「種」……………穴吹尚士選……………(90)

「こっそり」……………最上和枝選……………(91)

初歩教室「化粧」……………三宅保州……………(92)

秀句鑑賞「同人吟」……………牛尾緑良……………(94)

水煙抄……………小川注湖……………(96)

■エッセー 川柳は現代詩を超えた……………早川清生……………(98)

四月本社句会……………各地柳壇(佳句地十選／松本知恵子)……………(100)

柳界展望……………五月各地句会案内……………(104)

■編集後記(ひとこと／吉岡修)……………希久子・恵子……………(109)

座右の句

一輪の菊は気合で咲くことし
私の句

(薫風)

奥行のまして間口も無い私

亀井円女

けれど、今となつては醜な絵のように浮かび心をほのぼの暖めてくれます。塔を住みかたさだめてからは、栗先生には大所からの愛を学びました。薫風先生からは志の高さを教えられ続けてきました。大八先生には熱く博学を説いて頂きました。鬼遊さんと智子さんとはい通い合つて、何でも解り合える間でした。そういえば智子さんには「川柳は水よ」と言われたことがあります。「私は道のり」と未熟に答えた長電話をやりとりした覚えも。智子さんは炯眼です。すでに川柳の本質を悟つていられたのでした。風の会の討論では雨学さんに「僕にとつて川柳は血だ」と聞かされた記憶。今でも鮮烈です。句会のたびに出会うたびに、冬二さん一咲さん夢草さんも美巳代さんも「川柳は己れ川柳はわたくし」思い出の小箱は泉みたい。いつでも、何処でも次から次へ、若かった頃の私を。会場の雰囲気も、先生の笑顔や口調、まわりの人の会話も。しかも音声、カラーつきなんです。けれど私にはいったい人々の心に残すどんな言葉があるでしょうか。きやはくの何人かには、多分伝わっている感触があります。天国も近くなりましたので、近頃死という大仕事と向き合う時間も増えてきました。でも川柳さんの玉手箱を持つ限り、最期の平安は大丈夫。向う岸には心つながりの凄いがずらり待っていて下さいますから。



河内 天 笑 選

米子市 政 岡 日枝子

春は曙 急にジヨギングふえてきた
片道切符見栄張ることはないんだよ

再会へ明るく今を飾ってる

勝つほどに空しさつのる喧嘩独楽

風評の間をうまく泳いでる

幻を追って荷物も出ていった

西宮市 西 口 いわゑ

お月さん今日はいいいことありました

ほんのりと紅さすように梅が咲く

あれも毒これも毒では生きられぬ

古時計語り出したら止まらない

水割りとひととき浮世の外にいる

ドライブを散歩に変えてから元氣

豊中市 吉 田 あずき

春の楽譜神がみんなにくばってる

木の芽どきつい返事してしまふ

体力に勝てなくなつた好奇心

味方からまさかの弾が飛んでくる

ノーヒント一人で生きるむつかしさ

この道で拾いしものは数知れず

弘前市 高 橋 岳 水

雪国に生きる掟の雪を掻く

俎に妻の感情線がある

肩書が消えると潮が引いてゆく

冷静に読める他人の不仕合わせ

幸せの尺度を変えた病み上り

人恋し人うとましき手酌酒

河内長野市 山 岡 富美子

思い込み辞書に頭を叩かれる

春炬燵蹴つてウインドウショッピング

昭和から見れば奇抜なニューモード

姥盛りお洒落心は失くさない

この世には勝つてはならぬ人がいる

バーチャルの沖で溺れる好奇心

和歌山市 古久保 和子

人間を乗せて地球が熱をだす
免許証の写真に前科ありません
湯通しをされた男が多くなり
私が悩み続ける送り仮名
バーゲンの服と服とが春うらら
あなたの背輪ゴム飛ばしの的にする

三田市 北野 哲男

大吉は神社のお世辞初詣で
汗をかく男に惚れた山の神
懷も癖も承知で悪友で
子を叱るDNAのこと忘れ
空手形残して逝った人を恋う
年金と生徒だけ乗せ走るバス

八尾市 生嶋 ますみ

口にした言葉悔いつつ歯を磨く
文句ひとつ言わずに桜散っていく
よろしくと古巣尋ねて鳴く燕
遅しく花を咲かせたこぼれ種
鈍感になって治った胃の痛み
何しても面白くない花粉症

吹田市 穴吹 尚士

それなりの男目指してなり損ね
生き様に花丸ついたことがない
自分史に嘘ちりばめて私小説

棄権したくせに政治の愚痴を言う
葬儀屋のビジネススライクな請求書
言い勝って晩酌抜きに刑に遭う

大阪府 澤田 和重

少しならいいです自慢なさいませ
妻に背な押されて散歩春うらら
遠回りばかりさせてる万歩計
余裕ある笑顔を見せて火の車
時価というお鮓を食べたことがない
無視されているのか返事まだ来ない

鳥取市 岸本 宏章

百回忌田舎の寺は通知くれ
窓際に空気を読める席がある
せつかちのプレーキ休む暇がない
練り上げた嘘もどこかでほろが出る
口出したばかりに役を背負わされ
機械化が首から下を弱らせる

高槻市 指宿 千枝子

誘われて一曲歌う鳥育ち
百円で済まぬ百円シヨップなり
留守番の土産に好きなメロンパン
時代遅れになった地球儀買い替える
むずむずと羽根が生え出す古稀の春
お雛さま一対買って古稀祝う

大洲市 中居善信

人が逝き人が生まれて花が咲く
野球帽口マンは限りなく無垢で
もしものときに何時でも切れるのが尻尾
腹ん中晒す男で単純で

古本屋覗いた頃が青春期
妻でない人に本音を晒して

岸和田市 雪本珠子

愛猫に無償の愛をもらつて
少しづつ肩の荷下ろし黄昏れる
野の花を活けて自然を慈しむ
生き下手で時代の波に乗り切れず
曲り角ハードル少し下げて見る
腹八分口も八分で止めて置く

大阪市 榎本日出

出かける日一ぱいあつて今楽し
ゆつくりと出てきた知恵は間に合わず
泣きごとを言わぬ長男気にかかり
ふたり共毒舌なのに毒はなし
怒つて顔自分では見られない
図太さは誰に似たのかマイペース

大阪市 平嶋美智子

朝顔の芽が出た丸い背なをして
草も木も芽吹けば私焦ります
思いきつて私も脱皮しなければ

お誘いはみんなOK春だもの
おだやかな顔で理屈をこねる人
七十年懸念に生き財も無く

大阪市 升成好

満ち足りてどんな顔にもこんにちは
甘い点つけようこれからの自分
欲少し削れば見えて来るヒント
目隠しをすると見えないものが見え
白黒を決める無情なあみだくじ
してみたことの一つに愉快犯

東大阪市 北村賢子

雷が春だ春だと駆けめぐる
とりたてていい事ないが恙無し
加齢して反比例する脳の皺
受け入れ先あるのかビーポーが走る
天寿までどんだけ曾孫抱けるかな
同期会変わらないねは思いやり

松江市 三島淞丘

逃げ道はいらぬ真つ向勝負する
煮え切らぬ妥協の酒が胸に沁む
ほろ酔いへ寄り添う妻の護衛艦
裏町の風も噂も温かい
今ここが切り札使うタイミンデ
子を叱る娘だんだん妻に似る

黒石市 佐藤 古拙

弘前市 相馬 銀波

里の川護岸工事という鎖

指定席なのに小走る苦労性

杉花粉のせいだとマスク離さない

咳払いしても周りに無視される

サプリメント主食のように食べている

黒石市 相馬 一花

毎日のエクササイズでつく馬力

堅物に美女が差し出す奉賀帳

髪型で判るあなたの虚栄心

友人に言う忠告のタイミン

デートする胸が高鳴る高齢者

平川市 小寺 花峯

温もりを素手で確認春の土

銚子からあふれ出るのは愚痴の数

片道をう回路ばかり僕の過去

亡父の真似してもやっぱり錆が浮く

年金の旅でやっぱり吹くヤマセ

弘前市 須郷 井蛙

賞味切れ熱を加えてみな食べる

パソコンに弱く沖へと追いやられ

空腹の青森県に核のゴミ

清貧をしつかり守る母の舟

一合は許されました処方箋

義理欠いて顔に不安と書いてある

度忘れを繰り返して後日談

淋しさを忘れさせるは一行詩

失言の始末は酒に切り変える

湯豆腐の箸のペースにする手酌

弘前市 高瀬 霜石

反省は毎日 今日眼鏡拭く

ひとり旅五臓六腑を空に干す

年金を手にするまでのすきま風

鷹の眼を授かり友の二三人

仲悪いはずの夫婦が歩いてる

弘前市 今 愁女

個人情報を守るシールを役所から

洩れぬよう覆面ハガキ投函す

雪溶けの雨に春眠心地よし

津軽野に大風ブンブ春の風

風ブンブおとこ郷愁とりもどす

弘前市 岡本 花匠

つがい鳥寄り添え耐える風当り

目交ぜした妻も納得手付打つ

解体の我が家に泪エコライフ

隣り家のさくらを出しに花見酒

メタボリック聞き捨てならず身構える

弘前市 福士慕情

冬中は閉じたまんまのガラス窓
傷ついた白鳥一羽だけ残る
温暖化調子の狂う花芽たち
遠回りした甲斐がある広い視野
胸張って言える故郷の岩木山

弘前市 櫻庭順風

クラス会無名が司会するゆとり
クラス会墓参に託し都落ち
クラス会お盆楽しくなる津軽
クラス会江戸も浪速も駆けつける
他の組に負けてたまるか組ねぶた

さいたま市 星野育子

知らなくて幸せだった過去がある
反省の仕方をサルがやって見せ
ああそうですよと天下り止まらない
歯科の椅子器具の触れ音まで怖い
空巢犯三分の道理振り翳す

さいたま市 八田 敏

亡き妻の遠き日の難また並べ
妻逝きて娘の気遣いが身にしみる
八十路坂歳相応の夢求め
懲りもせず株に手を出しまたばやく
血圧で決めるその日のスケジュール

柏市 河野桃葉

憧れが沢山並ぶ姉の部屋
飾らない妻で時折寝坊する
秒針が遅刻ちこくと急がせる
老木の幹に命の音を聴く
恙無い暮らし入日に感謝する

国分寺市 野崎 勝

孫と二人十まで数え湯につかり
だんまりの妻にはちり角が見え
飛び出す日満を持してスギ花粉
冗談に仕立てて本音吐いている
母見舞う母の育てた花を持ち

東京都 清原悦子

葱坊主今年も咲いた庭の隅
飛行機雲見て押し入れの布団干す
新緑を鮮やかにして雨が降る
泣き顔を笑顔に変えて諦める
孫と見るいちばんばーしみいつけた

東京都 岸野 あやめ

み仏も手のつけようのない世界
合わぬもの無理に合わせてボロが出た
鈍感力強くて値札読み違え
業深き男が嵌る勝負ごと
年金に畏れ多くも生かされる

東京都 小川 賀世子

静岡県 蘭田 猿 杏

ひといろで足りる私の明快さ

要介護四友は赤子にかえつてる

いずれ我が道という気でゆく見舞

美智子さまの御ぐし銀色慈悲のいろ

楽天家の私に心配性の娘

武蔵野市 亀井 円 女

愛を知り恋も覚えて泣きました

赤い糸亡夫と仲良く握りしめ

孫十人一人は医者にしたかった

悲し気なアラモの歌は「雪が降る」

ボサノバのリズムはモダンうつも飛ぶ

横浜市 小野 句多留

水滴が早いつららに春を聞く

ぬるいお湯幻想だった雪見酒（塩原野天風呂）

なんだかだいうからやはり一人旅

朝青龍悪役ならば道はある

用なくもけじめで起きる朝六時

横浜市 菊地 政勝

貧乏に馴れ断りも如才なく

天国へ行ける切符がまだ来ない

興奮へ押さえが効かぬべらんめえ

役得にとっぷり漬かり鈍くなる

戯れの愛を掴むと火傷する

探梅の徒勞ねぎらう一分咲き

好きな人できたか娘落ちつかず

絵手紙に言葉は要らぬ梅便り

箸で食うマナーもあつてフルコース

清冽な山に漂う杉花粉

富山市 島 ひかる

母の釘老いて益ます利いてくる

神さまに貰った道にある試練

真実を言つてま白い目でみられ

強がりの裏に寂しさ見てしまい

年金の歩幅ではずむ時刻表

可見市 板山 まみ子

ストレスが無くて独りも良いらしい

五十歳若くなつたらどう生きる

ふさぐ日の口紅少し濃く塗つて

久し振リスカートを穿く女です

同じ道ばかりはあきる万歩計

可見市 鶴留 百合

スーパリーのオープン道路遅々として

週刊誌ふんだんに読む美容院

おしゃれして出掛けたくなる春の風

もうひとつ仕事しようか日の長さ

地域の輪奉仕作業の手を休め

犬山市 吉田幸子

愛知県 早川遯行

ストレスの発散母子の口喧嘩
旅誘う便りひと足早い春

春うらら眉間の皺もほころびる

キッチンに母丹精の無農薬

ひもじさが昔の意欲かりたてる

犬山市 関本かつ子

春うらら妻に合せて若作り

合併はしても田舎の縁続き

イヤリング揺らして夢を捨て切れず

エンゼルはきつとこの顔新生児

増税に肉のランクを一つ下げ

犬山市 金子美千代

なんぼでもあるぞと膿の出る政治

戦慄が走る私のボケ始め

次年度へシャンシャンと継ぐ拍手

なんとなく夫に言えぬ人と逢い

ケイタイの携帯忘れ叱られる

尾張旭市 三浦きぬ

親の寿命越えて生かされ首すくみ

もう充分生かされたのに迎えまだ

国会は今日ももめてる民あくび

有る所には有るものですね札の山

国会は私語居眠りが自由です

日本語で一番好きなのがとう

刃毀れの包丁研いでまだ遣る気

幾つまで生きるかはまだ決めてない

限界を潜って鳴らす海女の笛

言い足りぬことをハガキの表まで

京都市 西村益子

値上げラッシュ年金だけは下げてくる

記念写真いつも後ろに立つお人

気がつけば女忘れて爪も伸び

座る場所まだ定まらぬ夫婦仲

頼られる親にはなれずすみません

京都市 榊本宏子

ブランドの靴に噛まれた座り肝臓

お年頃恋のサインはダイエット

あやかりたい元気で長寿森光子

キッチンを通してからの料理好き

説教も雑音にする反抗期

京都市 高島啓子

こだらぬように心を心がけている

川幅を測ってるうち恋終わる

しなやかに泳いでストレスは流す

そう言えば持つてなかったころざし

説教はそこまでうぐいすが来てる

京都市 三宅満子

宇宙よりあの世へ一度旅したい
春風の誘いに乗って踊る靴

やるだけはやった残るは神頼み

気まずさがビールの泡で消えていく

値上げラッシュ卵メインの日が続く

亀岡市 井上森生

ボクだって春の足音ホイホイホイ

バランスは図書館までのウォーキング

感動が老いたくはない脳に効く

吐く息の気持の良さを神は見る

天からの火の粉を浴びるお蔭様(お水取り)

長岡京市 山田葉子

押し切られたままで眩くまあいいか

来る筈のない人待った無人駅

近すぎて絡んだ糸がほどけない

歳月がひびを撫でたりさすったり

喧嘩しても外で庇ってくれた姉

大阪市 神夏磯典子

はやはやの眼鏡で心まで見える

封を切るまでの鼓動をひとり占め

旗色へ寄って来るのは好奇心

丁度いい甘さ小粒の冬いちご

ぴんぴんの体で来はる介護さん

大阪市 谷口義

葛根湯のお手を拝借して治す

身の程を弁えている味の素

座り直して津軽海峡冬景色

だんだんと無口になっていく勝ち気

勝ち気にも磨きがかかる姥ざかり

大阪市 古今堂蕉子

地下鉄も掘れぬ遺跡の街よ奈良

梅干しの試食嬉しい南部梅林

白髪でもはげても自然のままが良い

手紙の封はさみで切る派 手で切る派

完全に攻めて最後にするボカリ

大阪市 板東倫子

おにぎりが何より好きな孫達者

ただやから家族ケータイ持たされる

国産の白酒に酔い難まつり

聴く人になろうお喋り多過ぎる

ヒラリーかオバマか所詮よその国

大阪市 川端一步

忍の字がだんだん僕をうつにする

脚色をしないで欲しい話

深呼吸したら大嘘つけそうだ

石仏たまには酒を掛けてくれ

頬杖は何も考えないしぐさ

大阪市 岩崎公誠

大阪市 小泉ひさ乃

もつれたりほどこたりして生きている

流行語使い得意なおばあちゃん

終電車反省の顔知らん顔

鬼からの招待状は破り捨て

友人はいるが親友いない僕

大阪市 井丸昌紀

薬だと信じて酒を飲んでいる

裏の裏読んだつもりが空回り

とりあえずうちの前だけ掃除する

禁煙の誓い毎年立てている

さん付けで誘いきつちり奢らせる

大阪市 小谷集一

少し無理承知で派手な服を着る

悪役もいてメリハリがつくこの世

妻の檄サブリメントにして生きる

物忘れするが呆けては無いつもり

切り札は古いノートに書いてある

大阪市 小糸昭子

お手並は若き知事いる伏魔殿

横文字に取り残された八十路坂

瘡蓋に押し込めている傷がある

愚直さに負けて己の非を悟る

病む夫の側で読んでる推理物

引返すことなく生きた長い道

預かって規則規則で出し渋り

労わられてから淋しさ増してくる

怒ること笑う事ない日が続く

お試しセットだけで治った吹出物

大阪市 津村志華子

スランブへあと一押しの風を待つ

味噌汁の冷めない距離でよくもめる

明日生きる気力しつかり食べている

編物の根気は蜘蛛に負けている

お人好しその半面は自虐して

大阪市 松尾柳右子

ストープの前で新聞見る二人

退屈をまぎらしている猫が来る

菜の花が光る陽気を散歩する

昼食の蕎麦思い出の旅土産

昼食は抽選で得た冷し蕎麦

大阪市 津守なぎさ

デイズニーへ若さむんむん夜行バス

雨にぬれ若葉の映える天守閣

大阪城でんとかまえて鶴梯

早春へ堂島川の観光船

新緑を求めおにぎりたからもの

大阪市 中村 れんげ

ライバルの勝ちを祝つてうまい酒

雨の中犬にも犬の事情あり

医者いらすのアロエを植えている医院

留守電の今亡き友の声消せぬ

好青年弁舌もまた爽やかに

大阪市 熊代 菜月

手綱とるつもりの馬にひきずられ

灯り消し広さしみじみ妻のるす

義理チョコは義理チョコなりの義理はたす

花火はめお国訛が通じ合い

名調子気分いいのは自分だけ

大阪市 榎本 舞夢

ビリの子へ負けるが勝ちとなくさめる

雨の日は少し派手目の服でゆく

土砂降りも病院予約とつてある

誘われてないけど化粧春だもの

前ぶれもなく天災はやつてくる

大阪市 西川 更紗

巣立つ子を励まし母も励まされ

ストレスに気付けば窓を開け放つ

あるとこにあるダンボールに詰めた金

路地裏に人情話たんとある

背かれて心が萎える今日のうつ

大阪市 伏見 雅明

銭湯に絶滅危惧がささやかれ

コンビニのお握り妻の味がする

○×のテストに自己を見失う

ご自愛を祈るお方の不摂生

雨上がりおとぎの国へ架ける橋

大阪市 鶴田 遠野

週一日自分罰する休肝日

目鼻立ち自慢させない花粉症

ホワイトデー食べた妻にも負担させ

去る人の涙と思う春の雨

娘の病みに祈るほかない男親

大阪市 奥村 五月

酒好きも偶には欲しい甘い物

お隣の旦那と比べ愚痴こぼす

酒タバコ止めると生きる価値がない

人間とカラス尽きない知恵くらべ

賽銭の額伝わらず凶のクジ

大阪市 渡部 さと美

すっきりと日本せんたくしてほしい

花の下いつか一人になる夫婦

金婚が来てもつないだことない手

旅かばんもしやもしやと荷をふやし

悲しみを越えて来た順腹すわり

大阪市 池上清治

後ろから一番でよいパスなれば
褒められてまた買いい物を頼まれる
ちらし見て買物の店朝選び

手作りは日本製かと思いい
艦長以下イージス艦はみなたるみ

大阪市 森田明子

下り坂視野がぐうんと広くなる

親譲りまっすぐ歩く他は無し

友の友まるで旧知のようになる

今日の荷は今日で下ろして陽が沈む

耕しています私のテリトリ

大阪市 岩崎玲子

忍び寄る検査結果の挑戦状

再検にたじろぎ心縮みだす

何見てもハードルがみな高く見え

痛くない怪しい影に悩まされ

人生の岐路で信号点滅す

大阪市 大川桃花

テント裏素顔でサンマ焼くピエロ

われ先に乗ってわれ先にと降りる

欲出した君に同情などしない

言いそびれ引き摺るばかり自己嫌悪

うきうきとする話ならお裾分け

大阪市 福岡末吉

嗜みと言いい張る妻のお洒落振り
覇氣溢る妻の仕草に立ち竦む
ごま揺りも時に世過ぎの武器とする
娘の意見妻が一枚囁んでいる
近未来人気ツアーに土星の輪

大阪市 近藤正

大阪に希望が湧いた彬の碑

闇の海漁船沈めた自衛艦

九条が国際世論惹きつける

ちっぽけな土くれですが歴史解く

若者が暮らしていける報酬を

大阪市 川原章久

妻の留守空き腹かかえ見る角力

定年後任せた妻が認知症

頑張って老いを偽装の若作り

お袋の味が恋しい雛祭

飽食の猫とネズミは仲が良い

大阪市 中村叡子

よかったね餃子は母の十八番

春一番日本列島かけ回り

知事となり頭さげたり怒ったり

公金をへそくりのよう裏金に

土井隆雄日本男子よここにあり

大阪市 岡本久峰

學歷欄嘘偽りのない無学

生涯に卑下したことのない無学

額入りの勲記を飾るわび住まい

葬式はせんでもええと念を押す

健康の自信過剰にある怖さ

泉佐野市 山本蛙城

美しい国だ黄砂も季語で詠む

花前線動き詩囊を喜ばす

まあいいかそれもよからで日々好い日

石油でも掘ろうよ海の国日本

宇宙にも日本の部屋ができました

池田市 栗田久子

重油禍にくじけぬいかなごのくぎ煮

鯉のぼり少子化の空泳ぎきる

つかのまの逢う瀬鼓動を確かめる

透ける陽にミモザに染まる風が吹く

パンジーのうすむらさは身の守り

茨木市 藤井正雄

一回戦一番強そうな相手

王手飛車攻め勝った手で茶をすす

よう出来た話やなあと笑う酒

突然に來たのを叱る子の下宿

鉛筆を持つと無口が嘘のよう

和泉市 西岡洛醉

古い二人寸劇楽しく陽が落ちる

語り合う仏間の背なに温い影

黒い影善と悪との競い合い

孫からの便り傘寿を褒めてくれ

欲ひとつ増やして生きる八十路坂

大阪狭山市 矢野梓

やさしさをベースに老いを生きて行く

教わった母のレシビのちらし寿司

コーヒーとモーツアルトに癒されて

アバウトな人に遅れて付いて行き

血圧を上げてしまった怒りん坊

和泉市 横山捷也

肩書きがとれて冗談うまくなる

定年の無い畑仕事にたどりつく

長電話今度の恋はみのりそう

果実酒に酔った十九にからまれる

一坪に故郷の味を植えてみる

交野市 森本弘風

啓蟄や今日は私の誕生日

今日からは私も後期高齢者

CTが七十五年を切り刻む

なあ黄砂誕生祝に來んでよい

お祝は孫が合格した知らせ

交野市 山川 日出子

河内長野市 植村 喜代

声枯れた老鳩時計うたってる

山彦が初恋の名を呼んでいる

青い目のカタコト祝辞場が和む

五線譜に思い伝える恋ごころ

三人乗りストッパされてママ思案

河内長野市 井上 喜 醉

朝露に光る苺の肌の艶

その時の気分で変る浮動票

確めて玄関出たが忘れ物

病名を沢山持つて喜寿の春

信じてる妻にへそくり疑われ

河内長野市 村 上 直 樹

家計簿を手に飲みすぎを絞られる

攻めてくる物価にエコの自衛策

狙い撃ちハートにずばり舌下錠

三択で当てた妻です料理好き

米寿には二十歳の孫と飲みくらべ

河内長野市 坂 上 淳 司

七十五歳何で後期の年寄りや

七十五歳酒も飲めるし恋もする

七十五歳青春切符で旅をする

七十五歳仕事があれば働ける

七十五歳チャンスがあれば子もつくる

合掌造りもすっぱり雪の中(テレビ)

私まで思わぬことに寝込むなり

どうしようと思っている間に昼が来る

そんなこんなでいつの間にやら八十路前

病院へ通うあれこれ注文あり

河内長野市 水谷 正 子

ピカピカの一年生に陽が遊ぶ

ランドセル一人走れば皆走る

ランドセルに色々吊つて一年生

何遍も同じニュースで聞き厭きる

タレントの知事はテレビに映りすぎ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

しっかりと食べる母さんいてくれる

摩るたび母さんの背が薄くなる

ありがとうラストに五文字添えている

許そうと決めたら心澄んでくる

失敗を重ねるたびに人になる

岸和田市 原 さよ子

口実の風邪がほんとにこじれ出す

古い二人日々の流れに無為無策

石油高どこかで笑う福の神

老妻のくしゃみ色気も何もない

誘われてよかった梅のみなべの里

岸和田市 森 元 ふみよ

メールより新鮮味ある手紙好き
弛んでる日本の国を叱りたい
手作りのギョーザで家族睦まじく
これ以上趣味に年金控えねば
ライバルと互いに意識二〇年

岸和田市 井 伊 東 吉

聞こえくる桜の芽吹く息遣い
中大孫進学の揃い踏み
友逝きて考え直すわが余命
立派だね北京へ行かぬアスリート
投手陣不安のよぎるタイガース

岸和田市 堤 梢 代

笑い皺これも大事にしておこう
八十も若い若いと思いたい
陽だまりが少し春めきほつとする
喜びを拾いストレス捨ててゆこ
やめられぬ特売好きの貧乏性

岸和田市 土 橋 房 枝

三日分カレーを炊いて妻は旅
三代目シングルライフでケセラセラ
ロボットの成長ばかり期待する
子が自立部屋は客間にリフォームす
新しい家族誕生息子の結婚

岸和田市 小 島 笑 司

吉本が大笑いする決算期
老人は早く逝けよと健保変え
イジメなど見習いなさんなランドセル
啓蟄に顔出し潜る寒戻り
孫に碁を教えて二年黒を持ち

堺市 村 上 玄 也

恐妻家その分会社では威張り
一日の始まり先ずは探し物
チャンネルを変えても腹の立つニュース
転勤を機会につけるアデランス
妖怪も魔女も鬼神も棲む地球

堺市 柿 花 和 夫

胸底で早く出たがる妥協案
マンションの谷間で意地の鉄振う
無愛想な板前客を離さない
落丁の日を温泉に置いてきた
蒲公英と芝の攻防雪の下

堺市 石 堂 潤 子

私ってこんな外股雪の道
二人居の夫へバレンタインチョコ
再検査神さま思し召す儘に
しっかりと用意して出て忘れ物
日溜りの雀にちゃんとボスが居る

堺市河内月子

堺市奥時雄

気の早いキウイむくむく芽吹き出し
菫みつば青葱春をうたい出す

学童の見守り隊も無事終る

体力は低下してゐるがよく食べる

先ず脚を鍛え歩きに出るつもり

堺市加島由一

難壇にダブる娘の晴れ姿

大学を出て夢のないアルバイト

美しく老いる火種を消しながら

金持ちの家にお日様よく当たる

愛妻も息荒くなる夫婦坂

堺市山本半銭

束の間のときめき春の雪は消え

ほどほどにお誘いがある予定表

あと幾度思い巡らす花の宴

折角の誘いのがした風のおと

夜が更けてかけたくなっている電話

堺市矢倉五月

口惜しいがだんだんお酒弱くなる

空元氣でも出るうちはまだ元氣

悪くない話黙って聞いておく

蒲団干しちよっと手助け欲しくなる

艶のある心でいようまだましだ

幻となった戦禍と飢餓のころ

千の風吹いてどの墓も抜け殻

子の受験無神論者も宮詣で

祈られる神にもおわす得手不得手

訴状見ずコメントできぬものらしい

堺市志田千代

銀婚のころの喧嘩は四つに組み

おっとりの娘育てたこま鼠

先生が黙れば私語もおさまった

自分史に賞罰なしもさびしけれ

マグカップ離婚した子の引出物

堺市西村りつえ

春に似合わぬこだわりを捨てました

削ぎに削ぎセンス溢れる一行詩

引き際をためらい萎えた力瘤

叱るのも煽ても下手ですぐに切れ

ほどほどの車間距離もち庇い合い

堺市宮本かりん

真つすぐな背中しつかり意志を持ち

軽い靴に誘い出される万歩計

情のない顔も行き交う繁華街

指先の怪我で口先よく動き

思ひ出のその先の方虫が食い

堺市源田八千代

怪我癒えて幹事の仕事を急かされる

退職者増えて名簿に収まらず

リハビリの杖もおしゃれな花模様

リフォームの切っ掛けとなる足の怪我

久々のカルチャー復帰新年度

四條畷市吉岡修

会話をしテールだけの距離なのに

善人になったか勘が狂いだす

もう少し磨き続けてみよう夢

玄関で仏頂面を取り換える

雲行きを見てたら隅を動けない

吹田市山本希久子

おおかたは自分に腹を立てている

春の空気自転車に入れ出かけよう

鳥老いて安短のテリトリ

初ものを食べる長生き望まぬが

期待した翼は方向音痴なり

吹田市太田昭

運命と悟ってるから争わぬ

につぼんに茶漬けと母の墓がある

呆ける前に一度逢いたいひとが居る

悔いのない人生なんて味気ない

痩せこけた五感に油注してやり

吹田市瀬戸まさよ

新緑も眩し黄砂もやつと逃げ

五月雨につゆの名句を口ずさむ

ご最良の米屋酒屋もついに消え

ちよつとした土産必ず呉れる母

音信の途絶え施設か天国か

吹田市大谷篤子

ときめいて心に老いを作らない

クイズから生きるヒントをもらつて

お茶一杯誘われ何でもない話

嘘少し混ぜてその場をガードする

叱られて愛されてると知り始め

吹田市野下之男

恨みだけまだ浮いてます太平洋

ときめきをまだ期待する同窓会

大志には届かぬ内に日が暮れた

飼犬も聞いてる振りの立ち話

日溜まりの猫の平和を乱さない

吹田市木下敏子

極楽はこれだと風呂の湯につかり

ありがたい今年も梅の香に酔うて

金婚へ七坂越えてたどりつき

桃の花生けて女の部屋になる

芽は伸びる私は少しちぢんで

吹田市 須磨活恵

高槻市 左右田 泰雄

人間の中に仏も鬼もいる

あの世より地獄極楽ある浮世

極楽を貰う我が家の仕舞風呂

自画像に目鼻が描けずのつべらばー

6Bと消しゴム戦ばかりする

高石市 浅野 房子

身に覚えのない裏金に頭下げ

無造作に愛した若き日の誤算

悔いたとてそれが自分の運命だ

ハードルをだんだん下げて生きのびる

心にも体にもある傷の跡

高槻市 西谷 治三郎

マンガから学ぶ算数地理歴史

メールより声聞きたいとメール来る

肩書きをひとつ残して八十路行く

大器晩成できそうにない傘寿来た

ギヤル騒ぎ老人小さく乗る電車

高槻市 乙倉 武史

あちこちで簞が弛んだ記事ばかり

日本国どげんかせにゃあかんぞなー

毒餃子政治決着有耶無耶か

定年後生き甲斐川柳ありがとう

薬にも毒にもならず卒寿来た

あさつての方を向いてる意地っ張り

不しつけない質問軽く受け流す

メタボのサンブルみたいなこのお腹

ふむふむと頷くだけでうわの空

クロスワードクイズでボケを防いでる

高槻市 傍島 克治

神前の誓いも徴びて五十年

納得をしたはずなのに怖い顔

子も蛙孫も蛙でつづがなし

決断の遅れで掴む残り福

お互いに残り火ぶつける老いの春

高槻市 杉本 義昭

引き際を決心させる通り雨

毒舌のあいつが妙におとなしい

わだかまり溶けてあなたが近くなる

雑草の可憐な中に意地を見る

個性ある仲間わたしもその一人

高槻市 井上 照子

福寿草めでたく咲いてやはり散る

亡き夫に家の処分を託びている

掌のみかん郷愁そそる色

風花の舞う朝雀ひもじかる

国会のテレビ血圧あがりそう

高槻市 執行 稲子

試行錯誤応じるまでの生返事

泣かせたくなくて相槌打って置く

借衣裳新調晴着より似合い

せがまれて雪補った大だるま

全快の日来ると信じて粘る腰

高槻市 大崎 侑子

ここ一番気合入れたが空回り

夫には半額なのと言つてある

お人柄買つてた方に嵌められる

褒められて買ったスーツの出番なし

ダイエット間食の癖抜けぬまま

高槻市 生田 義一

ランドセル駆けっこしてる午後三時

原っぱが消えて子供のいじめ増え

同期会軍歌は徐々に遠くなり

清水の舞台もびっくり大書の「偽」

新風を求めタレント知事誕生

高槻市 佐甲 昭二

わたくしを迂回されては困ります

雑学にはまり耕す古書の街

遠回りすると喜ぶ万歩計

近過ぎて気付かなかつた青い鳥

温泉に忘れて帰る鬼の面

高槻市 峯村 勲弘

子に託す夢は幸せ色に塗り

それぞれに役割のある指五本

次々と王子生れるスポーツ界

パソコンの囲碁は手加減してくれぬ

嬉しがらせ泣かせて消えた株投資

高槻市 富田 美義

沖縄の戦禍は遠く人あふれ

顔の皺すべてを脳へ移したい

今の恋古い秤で測れない

児を褒めて未来の種を予約させ

介護する腕に重さを感じない

豊中市 安藤 寿美子

メイドインチャイナの黄砂呼吸難

冷凍やないよ自家製ギョーザだよ

ばあちゃんを後期高齢者とは何だ

ころろざししっかり持って独り居る

駅から5分わが家の取柄それ一つ

豊中市 坂上 高栄

新年度改革物価皆値上げ

行財政改革国も火の車

オバマ氏の高い理想に期待する

雪吊りの金沢人の粋と自負

子午線に時間を合わすうれしがり

豊中市 江見見清

豊中市 水野黒兔

何事もマメでトップの次にいる

アメリカの豆で日本の鬼は外

任されて買うたらなんやかや言われ

三浪の子の挨拶に救われる

二番目の美人の横が座り良い

豊中市 山門タミ

三月だ黄砂に花粉花便り

目白二羽戯れている梅の花

野山ではワラビ土筆が笑う頃

お父ちゃん家族で呼んだ懐かしい

有難う菩薩に見えた我が娘

豊中市 藤井則彦

好きなのに嫌いと偶に言える仲

新郎を涙ぐませた鬼部長

大阪のおばちゃんやつと値切り終え

先生が一番に來たクラス会

馬拉ソンのよろめくビリに大拍手

豊中市 岸田知香子

日差し延び春遠からじ待つ八十路

大正の袴姿に学舎出る

路地裏の町家にひかれ灯がゆれる

路地裏に熊さん八さん顔揃え

休みぐせついた句会も遠くなり

敬具から追伸までにある吐息

オペラ見たあと十三でおでん食う

人のため神が選んだ星に住む

ぼろぼろと五体をほどく熱い風呂

百円の利子に忘れず税が付く

富田林市 中井アキ

だんだんと亡母に似て來たけちんぼう

欲ひとつ捨てれば見える青い空

庇うのは愛のあかしと言うけれど

絶妙な苦さだったね初恋は

私の前世天平美人かも

富田林市 片岡智恵子

心の傷深すぎ少女貝になる

喜寿からの余白ころに灯をともし

失敗を重ねてついてきた度胸

一言が胸の想いをふくらませ

逢わないで思い出だけを温める

富田林市 大橋鐘造

夢抱いて走り続ける走馬灯

肘をつきマナーの講義聞いている

乗り換えの出来ぬ地球で何騒ぐ

遠慮せず言った言葉が仇になり

指切りの指が重荷になる夜更け

富田林市 稲川 惠 勇

落日が祈る野良着を染め上げる
座禪草に遇うとお祈りしたくなる
機嫌よく火花がはしゃぐお水取り
潮時を見計って出す助け舟
泣き落しの無心に負けたお人好し

寝屋川市 籠島 恵 子

しあわせの尺度がかわる定年後
こぶしもう咲いているかも遠回り
タンポポをさがしに孫の手を引いて
気負わない人にあこがれもっている
おどり場に落とす吐息が深くなる

寝屋川市 富山 ルイ子

だし醤油ボン酢故郷の味食す
満開の梅の花びら散らす鳥
春闘に派遣社員は外される
男性が介護時代の流れかも
豌豆の花咲き出したうれしいな

寝屋川市 森 茜

春一番ビル街ひっくり返し抜け
攻めたててどんでん返しされてくる
一言の物足りなさも余韻だろう
なにしてるの覗いていったぼたん雪
ひと握りの土買ってくる植木鉢

寝屋川市 平松 かすみ

人生の節目節目に父母の恩
よい知らせ待ちくたびれている桜
饒舌もほどほどがよい老いの会
おばちゃんを無口にさせる聴診器
ドラマよりテーマソングを覚えてる (第三の男)

寝屋川市 太田 とし子

雪ダルマ幸せそうに溶けてゆく
裏金も表の顔も諭吉さん
五年後の予算に入れた葬儀料
ダンボール古着を詰めて置く遺産
花粉症犬の散歩に連れ出され

羽曳野市 吉川 寿 美

父の背を越えた息子が他人めき
裏の裏読んで火中の栗拾う
フツフツと愛を煮つめる苺ジャム
蟹食べる顔恋人に見せられぬ
時効にはならぬ科白で妻が責め

羽曳野市 徳山 みつこ

黙祷ではじまる古希の同期会
遺憾とはごめんというてはるらしい
国民の目と今更いう勿れ
九条を守る大統領がいい
ちよつとずつずれて一つの輪にならぬ

羽曳野市 安芸田 泰子

羽曳野市 永田 章司

お願いは聞かぬつもりを生返事

控え目に見えた女の主義主張

もういいかな赤福を買う旅土産

粕汁に頬赤らめて妻優し

沈丁花人が動けば香も動く

羽曳野市 三好 専平

庶民から冷凍餃子うばいとり

はみだした隣の花に水をやり

田辺聖子光源氏をカモカにし

湯たんぽが見直されてる石油高

生かすより殺さぬようにする医療

羽曳野市 酒井 一壺

風船を放す幸せありがとう

要領は良くないけれど真面目です

幸せが続くと上の空になる

平凡に育ってくれてありがとう

口上手だけど分からぬ腹の中

羽曳野市 吉村 久仁雄

爪切って真つ向勝負する明日

夫婦喧嘩いさめる母の握り飯

耳鳴りはきつと明日の覇氣の音

因数分解できて参謀役を出す

春の野で花粉黄砂をたと浴び

平服の案内状を信じ過ぎ

ご機嫌が絵になつてゐる千鳥足

食事して親の躰が見えまして

天下りわたりで稼ぐキャリア組

裏金は税金ですに怒り倍

枚方市 海老池 洋

やつと春そんなリズムになるいのち

耕せば大地も春の息づかい

六甲おろし歌いストレス空にする

てにをはに最後の最後まで迷う

柔らかな舌で鋭くつく急所

枚方市 寺川 弘一

春には春の秋には秋のメニューを食べる

他人が笑う時にはいつも背中を向ける

吊り橋は一度飛び込みしたい橋

隣の犬に尻尾振られたことがない

四六時中ノック無用の自動ドア

枚方市 森本 節子

暮れたのか曇つてきたのか時計見る

衝突が相次ぐ広い海原で

休薬日週に一日きめてある

今日も無事お不動さんに手を合わす

万華鏡色さまざまに癒される

枚方市 伊達郁夫

飼い猫が帰つて来ない春の宵
美人打つ太鼓美人の音がする
遠花火この隔たりにある安堵
抵抗のしるし斜めに貼る切手
二番手が頭を下けている野心

枚方市 二宮山久

退院を待つてたように桜咲き
金よりも銀で良かった雪景色
雪だるまちよつぱり悲しい顔にみえ
降る雪に退院遠き指を折る
添い寝する看病疲れの妻の顔

枚方市 丹後屋肇

ライバルが二つ返事でノート貸す
もの忘れつづく不安が走り出す
君が代に奮起しているチャンピオン
天守閣黄砂の雨にすすり泣く
三冠の種牡馬として草を食む

藤井寺市 高田美代子

空腹で行くとやっぱり買い過ぎる
イヤリング新調しよう春だもの
残月やすこし未練なことがあり
何てこった乗り替えたのは泥の舟
家中がクスクス笑う父のウソ

藤井寺市 太田扶美代

逃げ道を生年月日に塞がれる
値上りにじっと耐えてるパンの耳
巾着の中身は長生きのグッツ
きれいすぎる話が少し耳障り
冷蔵庫渡しそびれたチョコレート

藤井寺市 中島志洋

すんなりと来た訳でない共白髪
先の事解らないから夢がある
金魚すくい元氣な奴が売れ残り
身内にも言えぬ話の出来る友
責任の重さを感じている無口

藤井寺市 鴨谷瑠美子

タンポポを探す道から春になる
ため息が入り風船飛ばぬなり
春風に衝動買いをしてしま
臘月時を惜しんで恋のみち
握手しただけで交際諦める

藤井寺市 若松雅枝

善意でも嘘をついたら気が重い
一人でもつい口に出るドッコイショ
脳天気直ぐ諦める探し物
たまの会食メタボ懲りずにみんな食べ
有頂天になって小石にけつまずく

藤井寺市 鈴木 いさお

飯を炊く男やモメの丸い背な
座禅組むしばし煩惱との別れ
プライドをまだ残しての認知症
旨い酒呑める体に感謝する
散り際の花が一番美しい

東大阪市 笠井 欣子

何時からか飛べなくなった水溜まり
不整脈氣にして昇る二三段
冷凍品買わないようにメール来る
酔えばまた国の話をする夫
相撲見る時だけ二人意氣が合い

東大阪市 安永 春

大手術三途の川から生き返る
撫子に花言葉そえ誕生日
リハビリにエンピツを持つうれしい手
叩いても回らぬ時計ほかせない
カラオケに行くぞと腰の軽いこと

東大阪市 佐々木 満作

待ちわびた孫の巣立ちを待つ桜
花まつり野点の傘も花模様
ぼたもちを食べて先祖に手を合わす
年金の目減り補填の術もなく
与野党が歩み寄れない点と線

東大阪市 米田 水昇

誘われて語らい楽し繩のれん
ビデオ撮りダンスで燃える赤い服
羽化をして人生蝶になつてとぶ
繋がれた糸が切られて千の風
刻まれた皺と向き合う三面鏡

東大阪市 久米 奈良子

雀チユン朝の挨拶してくれる
ヘルパーの笑顔を添えた朝の膳
利尿剤トイレわたしを呼んでいる
共白髪祝う友情あたためる
八十路来て恋のいくつか振りかえり

箕面市 広島 巴子

こいのぼり子等を迎えてはしゃいでる
菖蒲湯で日本男子に磨きかけ
ちまき食べ母さん元氣僕元氣
孫にみる反骨心は亡父ゆずり
春めいて賑わい戻る街ぶらり

守口市 井上 桂作

公教育規範意識を厳格に
公務員改革提言わざとにげ
杖ついてリハビリ通うもどかしさ
膝痛はお歳のせいと医師笑う
さりげない妻の言葉に癒される

八尾市 宮崎 シマ子

大阪府 米澤 俣子

輕拳妄動妻に尻つぽを掴まれる
凜とすれば影堂々と従いてくる
甘かっただから夫に乗せられた
汚れ仕事の父を昔は嫌ったが
そつとしとこう今妹は泣いている

八尾市 高杉 千歩

アイデアが浮んでは消え老い多忙
残り時間軽いリズムで春がくる
夢の欠片抱いて孤独と対峙する
認知症米がないのに気がつかず
無邪気装うて老いるとは哀し

八尾市 吉村 一風

だらだらとすると蟻に恥ずかしい
たわいない事で揉めてる酒の友
捨てきれぬあれこれ抱いて八十路坂
どこもかしこも妻に似てくる娘の仕ぐさ
年金の暮らしもやはり仮面要る

八尾市 村上 ミツ子

閏年ちよつと余分にいる食費
イージス艦のお通りひれふしでもするか
入院の姑に顔だけ見せにいく
啓蟄へ這い出した虫風邪をひく
一人二役ただいまとおかえりと

足元のしあわせいつも忘れ勝ち
脳みそに雑学クイズ活入れる
虫食いの野菜に安堵しています
同じとこ何度引くのと嗤う辞書
元氣じるし取れば何にも残らない

大阪府 桑田 ゆきの

一陣の風が火種をかき立てた
花粉症マスク美人と指差され
暖流に父の散骨暫し乗る
花束を沖へ向けてる鎮魂歌
黄砂降る洗濯物は家に吊る

大阪府 野田 栄呼

目の手術して更新へ弾んでる
長電話タイミングよくこんにちは
好天を恨めしくなる花粉症
婆ちゃんの介護はすると孫娘
暖房の温度一家で定まらず

大阪府 初山 隆盛

お松明寒燃やし切るお水取り
風の香がそこはかとなく春の彩
開花予想天と蕾の睨めっこ
お宝と思ひ合つて共白髪
夢売りの欲はでっかい落とし穴

神戸市 山田 婦美子

よく見れば微妙に動く雲の峰
適当に忘れてるから生きられる
携帯に束縛されている身柄
親指はメールのためにある如く
謄本を取って初めて知る秘密

神戸市 伊勢田 毅

花粉と黄砂外出禁の日が続く
流し雛達者であれと手を合わせ
要点は役所言葉ではぐらかす
年金の暮しに重い春慶事
脇役にまわりからくり見えてくる

神戸市 田中 章子

恥をかきそれから進む道が見え
物覚えいいから困る聞き上手
ワンランクアップの肉で子ら待つ
人助け助けられてるのは自分
沈黙を共有できる人と居る

神戸市 山口 光久

一枚のメモが頼りの台所
法廷でメモの一行物を言う
雲百態ばくの人生丸写し
一粒の種に未来は無量大
犬掻きでのんびり泳ぐ小宇宙

神戸市 両川 無限

笑ったり泣いたり愛は忙がしい
温室で出番を待っているつばみ
分身が泣くと母乳が張ってくる
髪束ね泣いた昨日と縁を切る
日本のこころ忘れていた正座

神戸市 山口 美穂

自給率休耕田へお詫びする
マニユアル通りで心は外を向いている
友の一言あの日以前へ戻れない
口だけが達者で達者としておこう
国民の方むいて下さい総理さま

芦屋市 黒田 能子

逃げ道を考えながら叱られる
積んできた重さ軽さの二人旅
大福とお酒の好きな鬼二匹
声援が途切れないから休めない
困らせて育った方が親孝行

尼崎市 春城 武庫坊

お互いに杖になり合う夫婦なり
寒さに耐えてじつと呼吸してる薔
草花が気まぐれ天が少し変
何もかもすぐ返事ない白髪首
ポリ容器に色々つまり楽しみだ

尼崎市 春城年代

夫の耳に愚痴も願ひも届かない
ひとり喋って夫は微笑返すだけ
確かなる日はそう永くないこの世
忙しくひとり舞台の日も暮れて
無為の日を重ねていても夫婦とは

尼崎市 林昭三

観梅の頬に優しい東風
過疎の里余所ゆき顔の雪化粧
ご用心定年離婚準備中
生真面目がいつも重荷を背負つて
プログラム国旗君が代てんこ盛

尼崎市 長浜美籠

梅の香が鼻孔にやさし野辺の道
貧乏性らしくて暇を持て余す
一匹と見たメダカにも群がいた
ああもしてこうもしたいと予定表
BGM流し現実から逃避

尼崎市 山田耕治

背中搔いてもヘタと叱られ
腰掛欲しい長い信号
人がよすぎて愚痴の聞き役
あした会うなら電話短く
カレーの匂妻の鼻唄

尼崎市 軸丸勝巳

お水取り火の粉が春を呼んでくる
ワッハ上方捨丸見とこ今の内
甲子園も政界もいま改造中
生きたとは痛い痒いも受けて立つ
少子化が三人乗りの肩を持つ

伊丹市 山崎君子

やっと春語りはじめたアマリリス
庭の梅やつとはころぶ小さい春
長電話彼女のころろ充たしてる
黄砂に花粉帽子かぶってマスクして
エンデバーきぼうにのせる新時代

川西市 西内朋月

焼酎のコップの底に梅が咲き
湯豆腐の湯気にストレス解けていき
断わりは絶対しない基の敵
シャッターの店舗が続く元銀座
真夜中に電話をくれる友がいる

三田市 堀正和

きつちりと風邪を貰ったドック入り
ウインドーに映る猫背に叱られる
満員の電車で匂うサロンパス
雑学をひとつ仕入れた立ち話
マンネリの特効薬に好奇心

三田市 石原 歳子

春になり忙しくなった万歩計
歩くこと好きなおしゃれの春帽子
遠い日の泳いだ海も埋立地
説明書読まずに使う家電器具
終点まで私ひとりがバスの客

三田市 久保田 千代

てのひらを返すと夢が遠くなる
ワクチンを打ったからとて風邪はひく
前向きに生きて挫折を閉じ込める
吠えてみたところで何も変らぬ世
年金は寿命を伸ばす命綱

姫路市 中塚 礎石

世界一気持ちよい美の日章旗
砂の城反旗振られて崩壊す
相棒のリズムにつられ酔いつぶれ
額裏で埃かぶった内緒金
百歳を追いかけている散歩道

姫路市 古川 奮水

磯笛が波にビューと春告げる
学期末話題華咲く餡蜜屋
ドライブに豚饅二コで昼にする
ネオン見て眩しい男地下歩く
盃を交わし笑顔の前夜祭

西宮市 緒方 美津子

お顔よりゼロが気になるひな飾り
幹事してはる首席ではないらしい
これからも笑いなはれと皺がいう
物価高ねずみ小僧がふとよぎる
孫知らぬ猫がネズミをとる話

西宮市 亀岡 哲子

バージンロード白い裾引き飛び立った
お月さま女の過去を知り尽す
春の虹目指し峠を越えて行く
産声から続く道ですまだ助走
雪の富士過ぎて駅弁蓋開ける

西宮市 秋元 てる

少子高齢女子供が天下取る
コンビニのおにぎり旨し雀卓に
売るほどは無いがと分ける花菜花
逃げ口上とつてもうまい卒寿なり
泡のよに消えるのがいい終り方

西宮市 菊池 トミエ

音信の絶えた友達ふと思う
咲かすため捨てねばならぬ枝がある
六十年経つても捨てられぬ手紙
治まらぬ怒りに蛇口全開す
遠い日の味に似ている露のとう

西宮市 坪井孝一

ライバルの本音を聞いて好きになり
おビールとおの字ひとつで値がはねる
小遣いの時だけ妻に笑いかけ
灰皿が肩を窄めて軒の下
商才にはうといが父は鍋奉行

西宮市 山本義子

喜寿を過ぎいまのところは恙なし
歳月のところどころにある羞恥
しなやかなお面もひとつ隠し持つ
仁王さまお歳召しても男ぶり
歳相応楽しんでます おてもやん

西宮市 牧 渕 富喜子

距離おいて羽搏く音を聞いている
国民の視点到底判らない
トイレだけホテル並みだと孫が言う
母さんに代る者ないほそつと言う
買い出しに行かねばならぬ時がくる

西宮市 井上松煙

いかなごの列先頭に気恥ずかし
なだらかなバイオリズムで日脚のび
株安に手を上げている招き猫
嘘ばれて失笑を買う御偉方
一言の言わずもがなで不興買い

西宮市 片山 忠

民主主義夫の役は風呂掃除
先に食べ妻を怒らす晩ごはん
洗車する役は車に乗る頻度
家の前だけを掃くのは気が引ける
自然体格好いとは限らない

西脇市 七反田 順子

誘うのも誘われるのもお付合
安全な自給野菜の鍋を食べ
淀屋橋天満宮へ梅を追
オーイ雲ひとり乗ってる観覧車
生命線好きなどこまで伸びている

奈良市 天正 千 梢

やっかいなもやもやこれも人生か
口づくむあれもこれもと愚痴になる
目をとじて昭和を反芻いくたびか
長生きのコツのひとつにタガゆるめ
駒を打つその手さばきに見る美学

奈良市 米田 恭 昌

そのけそのけイージス艦が通る
丸眼鏡絹のハンカチ似合わない
住所きかれすらすら言えてホツとする
賞味期限切れたビデオのお蔵入り
掬われる稚魚の中にも策略家

生駒市 飛 永 ぶりこ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

さらさらと春の海からいい予感
自己顕示ほどが読めずに底が見え

添乗員ムームー姿いと映えて

まさかまさか友の情にて吉招く

ペアルック仮面夫婦の偽装かも

香芝市 大 内 朝 子

臍の緒へ母さん偲ぶ誕生日

新緑のシャワーを浴びている命

わくわくと躍る心のある若さ

花道もやがて枯野にさしかかる

ひと様に入れてもらった茶がうまい

橿原市 安 土 理 恵

喪失の身へほのぼのと夜が明ける

金平糖まるくなるまで舌のさき

ブルートレインここが終着駅ですか

三日目の肉じゃががほどよく煮くずれる

おもしろくずれてこれもわたしです

橿原市 居 谷 真理子

気づかないくらい大きな愛だった

逃避行雪舞い上がり舞い上がり

母さんが眠る匂いの六畳間

一合も飲めば機嫌の直る虫

焼酎の芋よ口惜しくはないか

菜種梅雨四季の節目の暦繰る

外孫に笑顔添えて武者人形

懸命に生きるメガネを友として

み仏に身を委ねたる日の座禅

花の宴片付け上手な紙コップ

奈良県 渡 辺 富 子

夜桜へ溺れてみたい人という

夜桜にそそのかされてプロポーズ

言い合って夕方までの逃避行

背信の男と続く無言劇

灰汁掬い男の覇気を消していく

和歌山市 玉 置 当 代

食の安全緑提灯客を呼ぶ

同居する猫が拗ねたり甘えたり

片えくぼ消えてしまった顔の腫れ

国防を信用できぬ国に住み

サクラサク一息ついた家族の輪

和歌山市 福 本 英 子

まだ命あると焼野に出た新芽

偉いから諭すとかぎらない母子

手をやいた子に諭されてホーム行き

気が合うが趣味は別々姉いもと

啓蟄の朝完熟のトマト買う

和歌山市 堀 畑 靖 子

山かすむ春だ春です黄砂です
学び知る喜び年をかさねても
京野菜それもいいけど自家野菜
年金にくいこむ犬の手術代
万歩計子犬に元気づけられて

和歌山市 宮 本 三喜夫

久し振り一面雪に覆われる
談合で漏洩された公務員
魔の季節本格化する花粉です
時代ですブルートレイン姿消す
裏金記録無断で破棄はやり過ぎね

和歌山市 喜 田 准 一

いいヒントあるから切れぬ無駄話
阿呆らしさ加減にひとり笑ろてます
自尊心傷つけぬようアドバイス
何しても自由と思う勘違い
格好をつけずにありのまま生きる

和歌山市 武 本 碧

琴線に触れると騒ぎ出す五感
結び目にしっかり母の知恵を置く
義理チョコが本命になる赤い糸
虹が出ていますと左遷地へメール
金婚を出発にするエネルギー

和歌山市 松 尾 和 香

脱皮する命いとおし春の風
ひと雫溶けて心に春の音
御先祖を偲ぶ灯火に揺らぐ顔
ちらちらと命火燃えて生きている
夢覚めて朝の光に福寿草

和歌山市 田 中 み ね

遊んでいても肩凝る者は凝るのです
天国も地獄もあってこの世なり
偉い人になればなったで有る苦勞
うれしいなあもうすぐ保険満期なの
ニンマリの訳は教えてあげんない

海南市 堂 上 泰 女

桃咲いて桃の里から友が呼ぶ
瑠璃鳥のエール嬉しい峠越え
手作りの母のギョウザで進む箸
メタミドホス耳の底へと染みついた
わらべ歌で誘い灯油を売りにくる

海南市 三 宅 保 州

どの面を付けて行こうか初対面
除籍簿を入手している閻魔様
土下座してもズボン汚れるだけなのに
富士山が見えて納得する車中
無人島にヒト科出没日曜日

鳥取市 武田 帆雀

支持率の満潮がよい総選挙
泣き面に蜂が居座る温暖化
妖艶な乳房が踊る花の宴
ウィルスに感染妻のヒステリー
勝てば上高見盛が下向く日

鳥取市 有沢 せつ子

さり気なく隣の庭を覗き見る
朝三時もう新聞が配られる
ストーブの灯油切れそう寝るとする
ローマ字の表札お年寄だった
厚着してテレビ体操まねている

鳥取市 倉益 一瑠

おもちや箱何が始まる静けさよ
てのひらの小鳥に油断してならぬ
わたしの留守にきれいな花が活けてある
八人目の敵は小姑かも知れぬ
でんぐり返ししてもひとりじゃ生きれない

鳥取市 平尾 菜美

無駄のない流れやつぱりシヨパンよね
おさんどん日毎飛躍の夢を見る
這い上がるために雑菌つけている
拭えない悲しみジャンプして払う
枯れ芒群れてカラカラ春を待つ

鳥取市 西川 和子

初対面ちよつと気遣う身嗜み
託されて託してころ通わせる
痛くても医者にも行けぬ高齢者
なんだかんだと年金削られる
また一つ齢を重ねるのが怖い

鳥取市 近藤 佳子

ご機嫌な古巣の風に迎えられ
ままごとの友と雪夜の長でんわ
お互いの婆あを笑いあえる歳
ある時は厳しい母へ恨み節
海越えてくるお呼びではない黄砂

鳥取市 池原 天馬

春雷に高い灯油は驚いた
桜予想今年も無事で聞きました
雪の中野菜の新芽鳥が食べ
すすめられた杉の植林花粉泣く
黄砂来る偉大な国の贈りもの

鳥取市 宮脇 道子

老いて今恋の歌書く用意する
足軽く診察室を出る笑顔
少年に愛の春風寄ってくれ
少年の暗いトンネル抜ける風
春風に乗って黄砂が遠出する

鳥取市 土橋睦子

竹島が見え隠れする日本海
聴間に命やすらぐ共白髪

聞き流す事にも慣れた三世代

幸せを選ぶ権利を主張する

羽毛より重い布団が好きな夫

鳥取市 夏目一粹

ボーイ捨ての人はゴミ以下だと思ふ

もう除雪やめるようにせ溶けるから

羨まし隣の家の笑い声

チャンス掴むとにんげん熱くなる

飲びはこころの中に仕舞うもの

鳥取市 太田幸枝

春風に背中おされて一人旅

兄弟もお金からめば敵になる

老々介護どちらが先にたおれるか

淋しくてあちこち電話かけて見る

卒業をしたが孫には職が無い

鳥取市 福西茶子

泣くよりも笑って生きる方が好き

嬉しさをひとり占めして口チャツク

愛犬の病癒えたと嬉し泣き

良い人になれず悪態またひとつ

泥棒と闘うために鉄アレー

鳥取市 山本益子

試練かな冷や汗流す面接日

春うらら心の扉開いたまま

タイムバーゲンへ女は息を弾ませる

春が来たわたくし七十路 変身だ

雑魚たちもやがて大海泳ぐ日が

鳥取市 中村金祥

毒入りのニュース横目に食う餃子

イージス艦ねきの敵には弱いのが

弓なりになって親父を支えている

ねじれ国会次々出ます副作用

甲子園来ればここのけ景気いい

鳥取市 永原昌鼓

貫禄と昔は言ったメタボ腹

美辞麗句心の底に響かない

老醜へ追い打ちかけて歯が抜ける

プロポーズたった一度の大仕事

よろよろと登る階段喜寿傘寿

鳥取市 奥谷彩子

うぐいすは初音を山の風に乗せ

梅桃桜わたしの春も今見ごろ

いい塩梅なごむ嫁との車間距離

和紙ランプ民話の里の薄明かり

てるてる坊主本降りになり下ろされる

鳥取市 田村 邦 昭

いい客と世辭が余分に買わされる
骨董になつてもランプの意地をみる
指切りの小指だんだん遠くなる
一式を揃えた趣味が三日もち

桜前線あちらこちらで千鳥足

鳥取市 録 沢 風 花

波の音連れてきそうな貝のチヨコ
スキップをしながら春がやってきた
ひとり居の客間に弾む声がない
生體系までも狂わすごみの山
飾つたらわたしらしさがなくなつた

鳥取市 加 藤 茶 人

人生にパノラマがある万華鏡
あげ足を後ろ正面から取られ
新聞のコラム見せたい子がひとり
肩書きが黒を白にもする世相
半額のシールが俺をダメにする

鳥取市 中 宇 地 秀 四

欲と欲ぶつかり合つて殺し合い
兄ちゃんも特攻隊で花と散る
さつま芋弱い庶民の命綱
団塊を生んだひたすら働いた
生き抜いて性善説を疑わず

鳥取市 春 木 圭 一 郎

こだわらぬ生き方夢を連れてくる
ここにいるそれだけでいい今のまま
着こなせば個性恰好よく見える
いつまでも自分のことは分からない
駄目なとき無理に笑顔を作らない

鳥取市 植 田 一 京

古里はいい自然がたんとあり
生きて来た証し古傷あちこちに
単調な日々うろろとして埋める
私でもお洒落をすれば若く見え
リズムよく歩き百歳まで生きる

鳥取市 岸 本 孝 子

物置にもつたいないを眠らせる
顔役が座り空氣が重くなる
広告が春の匂いを連れてくる
神仏へ健康だけの頼みごと
マネキンが春の服着て呼び止める

鳥取市 土 橋 はるお

結論が出そうな空氣にはならぬ
金溜めることは仲々むずかしい
過疎地にもやっぱり見栄っ張りもいる
山家にもみやびな橋が架けてある
ホワイトデー何も言わずについて来い

鳥取市 福島 庸二

辛口のひと言が出て引き締まる
目を奪う料理を前に迷い箸

一人でも地球の危機を救う手に

生き方の視点を変えるエコライフ

エコヒント先ずは身近な衣食住

鳥取市 吉田 弘子

雑魚なりのプライド持つて地味に生き

清貧に生きて静かな余生だな

にくまれっこどんな往生するのかな

はるばると宇宙遊泳して黄砂

それなりの幸せ口に出すでない

倉吉市 松本 よしえ

出して見るレシビ胡瓜のビール漬け

考えている間にチャンス逃げて行く

歳とると歩き方まで下手になる

医者者の居る町までバスで一時間

客で来た息子大型ゴミの処理

倉吉市 山中 康子

窓開けりや挨拶かわすホーホケキョ

ひきこもりいつかきつとの夢かなう

ひい孫に仏頂面もあやつられ

風前の灯がちよろちよろと燃えている

線太く細く人生いろいろよ

倉吉市 山本 玲子

余裕だね終点ですと起こされる

軒並み値上げ一喜一憂する財布

考える時間のばしに蜜柑剥く

日本にハンゲル文字が流れつく

そわそわと美容院でるまだ女

倉吉市 猪川 由美子

大相撲ヒールが戻り盛り上がる

カッコつけても品格無さはすぐにバレ

皇室もお悩み多く危機迎え

毒を消すはずの薬が毒になり

ケータイ普及恋のときめき小さくなる

倉吉市 牧野 芳光

貧乏だけれど家名を磨いている

髪の毛まで飛ばされそんな風が吹く

み教えの通りに生きてまだ独り

いじめっ子どこかで母を待っている

一生が終ってしまふ草取りで

倉吉市 野口 節子

響き合う鈴一つ欠け二つ欠け

蒼天に響けと喜寿のラブソング

誰も彼も炎えるものあり始発駅

絵の中に洗いざらしの母が居る

居心地が良いのか娘腰上げぬ

倉吉市 最上和枝

米子市 門脇晶子

短足のズボン股下長過ぎる

海峡は高波町は物価高

長かった冬將軍も帰路につく

竹藪に山うばわれて森が無い

日本の子どもどしどし鍛えよう

米子市 白根ふみ

黄砂の街で我が身のかげら眼鏡ふく

喜寿の雛しわ伸ばしてもものばしても

蠟梅を順に啄む掟あり

わたくしも多少の毒で生きている

親ごころこつそり渡しても通じ

米子市 青戸田鶴

卒業のない川柳と向き合つて

高峰秀子も岸田今日子ももういない

弱くなった足踏みしめて買物へ

手料理で家族を守るおばあさん

ストレスがたまると友とコーヒーを

米子市 中井ゆき

悪者に化けてもパパの目が笑う

線をひき脳の調子をたしかめる

悪あがきせずにゆつくり歩き出す

天気図の線ゆるやかに春が来る

はなれても太郎は強いささえて

遊んだ川が街の地図から消えている

ふるさとが終の住家で有難い

晩学に辞書をはなさぬかたつむり

鳥たちは胎内地図でとんで行く

手の鳴る方へ倒れかかつて行くからだ

米子市 野坂なみ

不言実行老父のふところ深かった

一つの灯で団欒をした貧乏時代

老人の手術に医者も気が重い

みんな知っている温暖化の悪循環

メディアの悪に次第に慣れてゆく怖さ

鳥取県 細田裕花

正論がぼつかり折れた負け戦

迷走の果てわだかまりだけ残る

残業の疲れがどっと靴を脱ぐ

仲直り空気が甘く流れだす

自画像に心模様を塗り重ね

鳥取県 岩崎みさ江

辛い日を噛みしめた歯が缺けてくる

豆撒いて心に鬼を棲まわせぬ

いざ今日も生きんと思う厨ごと

唇を真一文字に向かい風

逢いたくてタイムトンネル潜り抜け

鳥取県 山下節子

ひっそりと迷彩色の中で生き
寒牡丹薬のおうちで凜と咲く
異色だねようやく出来た青いバラ
山水画墨のメリハリすばらしい
ののしっている自分です顔見たい

鳥取県 石谷美恵子

ようこそと寒さを包むいい笑顔
チョコレート売場で浮いている私
悪質商法ファジーだらけの契約書
因習の中で異色が的にされ
惜しい人偲んで雪の中に立つ

鳥取県 盛田夢路

会話などないけど傍に居て温い
勿体ない民の税金埋めたとは
脳味噌が干からびて来た物忘れ
とび切りの声でトンビがパトロール
強情な虫を棲ませて腹の底

鳥取県 佐伯やえ

花は命毎朝あたままでてやる
ゆがんだわけ話す子の瞳がすばらしい
余生肅々歩幅はゆるく狭くして
余裕はないが孤児に貸す手はもっている
柿剪定百まで生きてやるつもり

鳥取県 下田茂登子

競売にかかった家は過疎だった
副作用承知で飲んで病んでいる
読めぬ字を忘れた振りもするカラス
凡人になろうなろうと石磨く
悪人は何故こんなにも元氣かね

鳥取県 深田俱久

三・一〇帝都火の海忘れない
国会は捻れた俣で年度越え
品格を論じる方の品如何
同窓の太い絆が宝物
人の振り笑い吾がふり直せない

鳥取県 竹信照彦

農業に命をかけた友が逝く
突然の訃報に春が凍りつく
葬式で意外な人に会うも縁
主亡き梨は廃園田は放棄
風よりも命キラキラ星になれ

鳥取県 松川行男

ダンボール僕も詰めたい諭吉さん
難聴でないけど腹をたてている
雑穀を食つてもくじを買っている
ニンマリと一人合格見て帰る
向い風背なを押して仲間達

松江市 小川 注湖

始めたものの続かないのは多情かな
そわそわと開ける封書に笑みもらう
破ったら過去に消え去り楽になる
初夏の風タンクトップの娘が急ぐ
万歩計買ったまんまで寝てござる

松江市 松本 知恵子

春の菓子持っていそいそ逢いに行く
癒されて見てる歯のない池の鯉
写メールで香りも届け梅見頃
文人と会社員との差はなあに
真実を知っているのはお天道さん

松江市 銭山 昌枝

大切な人だったんだ今気づく
老春へ羽搏く翼ピンク色
追いつけぬ歩幅ときどき待ってくれ
ハーモニカ飽きて次からお三味線
痛い目に何度も遭って来た性根

松江市 安食 友子

独り居もハハ呑気だねまめならば
春めいて腕捲ってるピンク系
日記って悲喜交々の夢語り
猫柳膨らんでいるわくわくだ
執念の素因で遂げるゴールイン

松江市 川本 畔

知るまではとてもドキドキ梅の花
西陽さす壁のあたりが温かい
水の色きらきらと始動する
下萌えを探して浅い春に逢う
大根が冬を越したと顔みせる

松江市 津川 紫晃

靴下の穴から春が来て笑う
初恋が解凍される同期会
雪解けの庭の隅では春の唄
疲れたら帰って来いという棚田
どう言えばあなたに解る現在地

出雲市 吉岡 きみえ

鳥唄うわたしも唄う春の唄
柳の芽いよいよ伸びてめしうまい
なびく旗なびかぬ旗の機嫌とる
特価品のせたチラシをみています
大根を食べてりや病気などしない

出雲市 富田 蘭水

写経する凡夫まねても知れたもの
手洗いとうがいが余命のばすはず
八十路でも恋という語に胸さわぎ
早春に合格通知かみしめる
寒月に心を話し楽になる

出雲市 森 茂 美

ホワイトデーまだ毫碌はしてません

春雪を踏んで登った父母の墓

波静か夜を眠らす日本海

百歳の笑顔が写るテレビの間

胃カメラで私の秘密暴かれる

出雲市 小白金 房 子

政界の口論民を困らせる

結露ふく窓に小鳥の声近し

傘立てへ逢えぬ雫を折り畳む

蝶よ花よと育てて今や四児の母

菜の花の響き伝える風の唄

出雲市 岸 桂 子

焼きいもの温味は人を裏切らぬ

誕生日めでたがられて歳をとり

見解の相違で溝が深くなり

晴天の灯台白く白く映え

四月六日は緑仙居士のご命日(恩師尼縁之助)

出雲市 持 田 多輝子

国民につけを回した危機管理

都会にはなじめぬ母の出雲弁

今日もまた過去となる日の一ページ

日に三度介護に感謝の箸を持つ

金木せいシャネル五番の香が満ちる

出雲市 竹 治 ちかし

生かされて縁と絆の中に居る

良い人が良いと解るのが遅い

父母妻子ふるさとが棲むほくの胸

もうとまだ同じ一つの屋根の下

幸せも試練もいつも神がくれ

出雲市 佐 藤 治 代

失恋をして泣くなんて馬鹿な事

金婚の先はどうあれケセラセラ

老いるとは悲し優しくなる夫

腹の立つ事も衰え笑い出す

ぐらぐらの決心抱いて五十年

出雲市 石 倉 美佐子

神様もアクションを時折に

赤ランプ点滅してる人生路

おふくろの味恋しがる渡り鳥

へそくりの行方を探し小半日

ぴかぴかーっと春雷近くなってくる

出雲市 伊 藤 玲 子

鈍くなった私お粥が焦げている

あちこちと部品の軋む音がする

止ったらリズムを崩すから歩く

草木の芽吹き心の扉をあける

平凡に生きてこの世のつなぎ役

出雲市 多久和 敬子

幸せがいつまで続く青い空
三歩後夫について丸く住む
断りの電話に頭下げている
ポケットのあめ玉友にウオーキング
妥協点見つからぬまま夢の中

雲南市 毛利 幸

面白い話にしばし癒される
中抜いて知らん顔して置いておく
こっそりと隣の人の顔覗く
平凡な人ほど個性生きている
ゆっくりと歩めば坂も味がある

島根県 伊藤 寿美

落椿言いたいことはなかったか
子に残す絵はモノクロのままでいい
限界集落老人ばかり残る舟
生きてゆく独りの音を確かめる
身から出た錆を落しているところ

倉敷市 喜子

かくし持つ結婚前のツーショット
綱引きのメタボ十人ヤセに負け
リストラの妻運転の火の車
いつまでも飛べない鳥でいるニート
一たす一答は無限空駆ける

真庭市 国米 きくゑ

母さんの胸が大好きもみじの手
鳥からの情報森が病んでいる
石垣の温さに集う虫の詩
ほとばしる母乳丸まる嬰兒の寝顔
口下手な人の優しい思いやり

真庭市 福岡 智恵子

ふる里の雛かざる街雪がまう
おそい雪雛さまさぞや寒かろう
三月の雪にもめげずふきのとう
やつと来た春黄砂までつれて来る
七十路迷いつつ早喜寿になる

美作市 小林 妻子

生き恥を提げて素知らぬ顔でいる
えんま様には一部始終を申しあげ
辿り来て広目天の眼に射られ
子供でも笑う大人の下手な嘘
血の絆隠し通せぬものがある

美作市 福原 悦子

新芽伸び命の重さ軽さ知る
雨が降る気分転換鍋磨く
晩学の扉だ広く開けておく
白髪染め若い心で負けられず
濃い時間子育て嫁は満ちてくる

美作市 山本玉恵

すみっこで小さく座るこれも癖
雨だれの音を味方でねむれそう
春よ春蝶の乱舞のそこかしこ
地球自転上手に人を遊ばせて
疼くもの抱えて夜の戻り橋

美作市 大石 あすなろ

膨らんだ抱負が明日へ歩き出す
はめてやるいつか芽が出る日を信じ
道づれに杖一本を持ち歩く
石段を登り切ったらまた一段
蝶も人も無人駅から旅に出る

東広島市 福島 万年

妄想の気球を飛ばす春の風
吾子逝けり雛人形は不老不死
乙旗を掲げておりぬ給油艦
ありがとう席ゆずられて年を知る
日だまりに翁媼の花が咲く

竹原市 時 広 一路

悪戯好きの風が運んで来た黄砂
なるようになって独りの今日が暮れ
さて今日は七時に起きようかなあ独り
日本語の筆順傘寿まだ迷い
空っぽにしたい頭へ眼をつむる

竹原市 岩本笑子

少数派ちよつと気軽でハングリ―
花よりダンゴ明日からちゃんとダイエツト
花粉に黄砂洗車をしてもしなくても
着地したところで種は考える
さくらさくらせめて貴方と手をつなぐ

竹原市 石原淑子

真心のこもるお守り肌につけ
冬の陽を集め感謝の桜草
鍋磨くなかなか消えぬ蟠り
母ゆえに地獄の底もなめる肚
緑萌え明日の夢の無限大

宇部市 平田実男

入試パス孫が大きく見えてくる
限りある資源考えたと怖い
元気です医者の子守をしていす
防衛省自分を守るのに疲れ
気持だけ美人になった美人の湯

美祿市 安平次 弘道

負け犬になっていたのは共犯者
七人の敵も大風呂敷をさげ
味のある話にいつか引き込まれ
沈黙が続き闇から闇を抜け
頂点に立てば刺客が待っていた

東かがわ市 伊勢 八重子

此処だけの話は聞かぬ事にする
長かった定年までのいばら道
ことわりもなしに黄砂が飛んでくる
行き摺りの心温める遍路宿
すき間風愛の幕切れ連れてくる

東かがわ市 川崎 ひかり

どの品も思い出からみ捨てられぬ
うぬぼれの心にあつた落し穴
浮草は流れる水のままに生き
菜の花の中を赤字の電車行く
我が町の儲け頭は葬式屋

東かがわ市 清川 玲子

賑やかに祝って泣いた子の巣立ち
満願の杖に苦行を労われ
労わられすぎているのもしんどいね
ベテランの主婦でそこそこ手抜きする
些細な事なのにホームで拌まれる

東かがわ市 原 賢

ぶらぶらとこの世の春を見て歩く
ふる里の川まで変えるコンクリート
ふり向くと妻はいつもの距離に居る
大物は見事とかげの尻尾切る
無意識に出た一言に泣かされる

東かがわ市 神保 坊太郎

招かざる客西風に乗って来る
偽装してないのも胡散くさく見え
なるようになったと思う鬼瓦
長生きを企らんでいる影法師
八十を過ぎると十把一からげ

松山市 高橋 宏臣

につこりの影に本音を言いそびれ
哀愁か戦のためかラッパ吹く
下請けのシャツ一枚が干してある
触角の指示に頭脳がゆれている
合鍵へその日その日の肌触り

松山市 宮尾 みのり

山笑う季節へはずむ新スーツ
若いとはロマンだったね未完の絵
時代も変りました迫ったのは女
サイコロの目が運命を変えた岐路
人生の機微にはうとい正義感

松山市 古手川 光

満喫はさせて貰えぬ通り抜け
花粉症杉桧には罪は無い
定年の足が履きたいスニーカー
医者の一と言は毒にも薬にも
国の品格とは何だ青テント

西予市 黒田茂代

春の音まだ手探りの昨日今日
戻り寒薔薇は心を閉じたまま
一輪の花の持つてる大自然
坪庭に宿る自然の小宇宙
迫真の仏像の目に糾される

高知市 小川てるみ

見栄少し背骨がしゃんとなつて来る
ひらがなのような男が増えてくる
急き立てる割には煙草吸う時間
手作りの味を知らない子の孤食
くせない野菜ばかりで物足りぬ

高知県 小澤幸泉

怒る父嫌いと泣いた子の寝顔
新しい声も交じった電話口
スケジュール書いた時から愛こぼれ
みやげ店春の匂いを先取りし
異動発表待つてから買う定期券

唐津市 市丸晴翠

すつきりと立居のできぬ膝を責め
高齢化少子化が来る日本丸
無農薬狙うグルメの猿鴉
子沢山金の苦勞を生き甲斐に
冷凍餃子組要らぬ食を衝く

唐津市 樋口輝夫

父に矢を放った息子が継ぐと言う
追剥ぎか逃げ回る児のおむつ替え
喜びも涙もまじる春弥生
そのまんま知事が仮面で人気取り
回収日ゴミに暮らしの格差見え

唐津市 井上勝視

諦めと悟りの区別探している
処世にも応急手当ばかりなり
衰える脚腰自我を削り取る
まだ抜けぬ右へならえの癖が出る
なんでだろ土日はやはりホツとする

唐津市 坂本蜂朗

大波小波金婚が見えてきた
古来稀人ごとのよう通過する
青春の詩で四五歳押し戻す
知った顔予定が狂う田舎道
苦勞した過去比べあい飲んでいる

唐津市 山口高明

戦争はしないが戦争支援国
屋台骨齧る権利を奪い合い
探偵の真似して妻を付けてみる
野菊摘む妹なにを拗ねている
妹の化身か蝶がまといつく

熊本市 永田 俊子

お金でならすぐ解けるもろもろ
昔なら御法度だよシングルマザー
選果機のみかん見ている不合格
胸にいる夫にたずねる曲り角
辞書引いて余生に鞭打ちついてゆく

熊本市 高野 宵草

保証する入れ歯だ百歳生きてやる
夜更かしをせよと新聞テレビ欄
御隠居のプライド重い犬を抱き
僕だって好きで病院通わない
明日から八十路を歩く深呼吸

熊本市 岩切 康子

乾杯のシャンペン女によく似合う
痩せなくていいとお医者が言うまでに
リハ継続結果じわじわ現れる
後輩の情報家に感謝する
蘭の花剪つて次期へと夢つなぐ

シドニー 坂上 のり子

神はやっぱ人間なのだ戦好き
より便利へより複雑化するソフト
惚れて病み惚けて病んでる人の性
風邪は寝てるのが薬と医者言う
日本の知的財産宅急便

温故知新

岡山県 本田恵二朗

音なしの構え子猫はもうおぼえ
中古品磨けば磨くほどにはげ

高槻市 松川 杜的

初対面の江戸っ子弁にとぎまぎし
退職金十坪の家を建てました

西宮市 若本多久志

冬オーバー未だ着てるのは俺一人
なびくでもなく拒むでもない女

大阪市 不二田一三夫

つまようじ吐き出すように捨てられる
音痴だが美空ひばりに瓜ふたつ

大阪市 早川 清生

夜が明けて鴉また飛ぶほかはなし
師の門を辞せば北風吹いており

『川柳雑誌』麻生路郎主宰
三四八号（昭和三十一年五月号）から

川柳塔の

川柳讃歌

(41)

木津川 計

歳月を待たせておいて飲んでいる

安藤 寿美子

天野忠さんの詩に確か「いきなり」がありました。いきなり五十歳がやってきたときも、六十歳がやってきたときも天野さんは、いきなりきてはいかんとほやいたり、たしなめたりして待たせるのに、そいつはもうきてしまっていてまのびした顔で味噌汁をすすっている、というのです。歳月はいきなりです。そないに急くなとこの句の御仁は待たせておいて悠々盃を干している大人物です。「歳月を待たせる」、堂々たるフレーズです。年をとることがない天晴な御仁です。

鏡ふく視線合わせぬように拭く

牧 渕 富喜子

相込込み入ったわだかまりを富喜子さんは、ミスターXに持たれたのです。居たたまれず黙って鏡を拭くのですが、Xの視線がわたしの目に注がれているのが分かります。合

わせたら気まずいのでけつして見ようとせず、固いところを和らげることもあります。むろん僕の勝手な想像です。あるいは、わだかまりを持つのがXの方だとすると……。逃れようもない夫婦のつらさです。

美人薄命誰が決めたか当らない

榎本 日の出

その通りです。長生きの女性がみんな不美人なら八千草薫も倍賞千恵子も、多分日の出さんともつくに幽明境を異にしていた筈です。あまりな美人の夭折を悼み惜しんで、誰かが「美人薄命」と嘆いたのです。詩人の天稟を持った立原道造が二十四歳で逝ったとき、三好達治は詩人であるためには「君のやうにまた 早く死ななければ」と悼みました。すると九十三歳で他界した小野十三郎、九十二歳で健在の杉山平一さんはどうなりましょう。詩人にも「当らない」ですね。

生きるのはむづかしい死ぬのはもつと

古今堂 蕉子

同感です。どうにかこうにかむづかしい人の世を僕も生き継いできましたのに、まだ大事業の死を成功させねばならないのです。石川達三みたいに達観できたら凡人はただ嘆くのみです。即ち「私の死はもう眼の前に迫っているが、私は死について何も考えていない。考える事の興味が無い。多くの人が死に

ついて色々考えているが、すべて無駄だと私は思っている」(日記)。エライ人ですね。

母の汚れゴムの手袋して洗う

居谷 真理子

わたしを産んでくれた母は、おむつを替えるのにゴムの手袋をしたりはけつしてしなかつたのです。わたしも自分の赤ん坊の汚れを手袋なしで始末したのですから。わたしのちいさな分身はただだいたいとおしく美しく輝いていたものです。ですが、寝たつきりになった母の下の世話には手袋をする。そんなわたしはいつたい何なのでしょう。

真理子さんは自問しながらお母さんに謝っておいでなのです。そのころで十分です。母の分身と分身の赤ん坊との違いなのです。

ふる里は甘えるところ泣くところ

録 沢 風花

日本人の故郷観には八つの型があると、かつて拙著『可哀相なお父さんに捧げる哀歌』で分類したことがあります。即ち、凱旋型、望郷型、呪诅型、破壊型、依存型、愛着型、喪失型、無頓着型であります。

さて風花さんのふる里は何型でしょう。啄木のように依存型なのです。「ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな」、母のような存在ですから。

『上方芸能』誌代表

自選集

川上大輪

津守柳伸

真剣に落語を聞いている卵

一旦停止 私にそんな暇はない

ポストかも知れぬ 人間かも知れぬ

トンビから鷹が生まれるから揉める

よっこらしよどっこいしょと生きている

玉置重人

遠山可住

天敵のひとつに階段の段差

胃カメラが吉と答えた青い空

適当に忘れることもええくすり

私の品格自問自答する

私がこけても何も変わらない

恒松町紅

都倉求芽

肝心なところで話横滑り

世相など気にしていない窓明かり

褒めてやる事も社交と老いの知恵

ゆっくりと歩く夕日と橋の上

年甲斐もなくわくわくと柄を選ぶ

自家製のギョウザで上る主婦の株

言い訳も弁解もせぬペットの瞳

哲学の道でシヤカリキセぬことだ

久能山石垣イチゴから春に

警鐘は森羅万象限りなく

一枚の紙よ鬼にも仏にも

飽食へ飽きない母の味がある

里を出ぬ母に草引く庭がある

オートバイ十台続く春の音

米寿ですもう東京が遠くなり

春彼岸 この世の風がやさしくて

年金がお元氣ですかとおりてくる

書ききれぬ日もありカレンダー多忙

料理番組値上げの材料ばかりで

選挙後のなにが変ったしまい風呂

土橋 螢

度忘れもお互い様の四月馬鹿
太陽にもらう幸福無限大

後継ぎが生まれめでたい鯉のほり
裏門が開けてあるとは知らなんだ
花が散るように死ねたらなと思う

中原 諷人

祭り笛アンサンブルも詠えて
神様を迎えに登る笛の列

着飾って未だ青春の歩ともなる
もうちょっと人生が好き花まつり
生き方を素手に素足に教えこみ

西出 楓楽

リピングより茶の間の似合う歳となり

若葉風孫が一人欲しくなる
好奇心なくして消えた髪 of 艶
陽の当る場所で自分を見失う
自殺する勇気が欲しい時もある

仁部 四郎

裁判を子が継ぎ官の非を暴く
現ナマで無理へ道理を継ぐつもり

○之助継いで博士の新社長
人と荷を継いだ宿場の名を守る
母方を継ぐと次男が肩を張る

波多野 五楽庵

綾取りの糸がもつれる男指
冬帽子見知らぬ駅の案内板

悔しさをコップの底に積み上げる
駅から五分赤いネオンのうつる窓
いたわりの言葉に肩の力抜く

林 瑞枝

華やいだ過去が鏡のなかに住む
語り部のまぼろしでない瞳の光り
ぬかるみをひとり越える花の闇
うたかたの恋を楽譜のまま残す
神話ひとつ抱いてひなげしは満開

早川 清生

言霊の存在しかと知る加齢
わが誤解創めにあってわが家族
老いて姉妹鷹の顔山羊の顔
また癌のこと言うほかに売りがない
病病病癌癌癌生きている

前 たもつ

頑張りすぎず今丁寧に生きている
母の歳三倍生きて会いに行く
梅桃桜大阪城の朝の贅
二十五年神に近づけ牧師去る
あなたに遇えてよかったと言うつもり

宮西弥生

春の字がゆらゆら招き愚にならぬ
三月の花屋に立っている浮氣
明日の絵は明日にまかせておく夕陽
奥さんの口からお礼まだ聞かず
毎日を繋ぎ合わせて24時

森下愛論

独り居の無味乾燥の灯を灯し
独り居の押さえ切れなく窓を開け
独り居のゆとり安易にかくあぐら
独り居の茶の間にネズミ通り抜け
独り居の庭に見つけた春の色

八十田洞庵

青春の強みモラルの衣替え
砂の私語春一番に逆らえず
恋人をつくれと春の花も咲く
立話話題のひとが来ましたよ
信頼の深さを抱いて列車去る

両川洋々

都落ちしたけど波長合う街だ
乾いてるハートへ雨期よ早く来い
国会の審議温みのない夢だ
生臭い風だイラクの風だろう
マニフエスト読んで一票くれるかい

阿萬萬的

高望み駄目だと気付く老いの愚痴
傷つけぬように忠告老いの知恵
何しても後手後手損な役ばかり
勘にぶい癖にペラペラ口はさむ
年金の枠で笑いのない暮し

板尾岳人

北国で機嫌よろしゅう咲くサクラ
達磨にも勝る阿闍梨は山の中
気が付けば母はきりりと名古屋帯
廃校となりしメダカの認知症
ゆるやかな坂を転がる紙風船

奥田みつ子

可愛くてちよつと手強いのが女
洗面器嫌いな顔とにらめっこ
次々と難問されど空は青
心寒い日ペランダの花写生する
命はひとつ心弱くも強くても

河井庸佑

新緑に誘われ車椅子の供
故里の母から届く一番茶
暗黙の了解許せない律儀
ためらっている間にチャンス摺り抜ける
真っ直ぐしか見えぬ男にある不安

木村 あきら

菖蒲湯に浸り明日の夢を描く
碧い空此処に日本男児あり
樹を植えて碧い地球を取り戻す
嫁の座が不動になった鯉のぼり
霧雨に相合傘の行く長閑

小島 蘭 幸

あねいもと同じところを怪我をして
金太郎に似てくる孫の立ち姿
黄金の兜が孫によく似合う
おふくろの齢しみじみ還暦か
膝に来る猫と尻尾を振る犬と

小西 雄 々

麦の穂も伸びる皐月へ跳ねる足
ピアスしたベット出しゃばるので揉める
年金も餃子も心細くなる
のびきったゴム輪理想へ遠くなる
希望抱く胸に届いた春の熱

斉藤 嘉

背筋まだしゃきつとしてる葦である
しっかりと桜芽を抱いている老樹
まだ望みありそで神の樹をゆする
ぼろぼろの軍手馴染んで捨てられぬ
柿八年そろそろ蕾抱くだろう

塩満 敏

時は春城に百日紅植えました
九月には鶴彬句碑建つ予定
来春は鶴の映画も出来そうですよ
老人をいじめる政治止めなさい
その内に新しい日本作りたい

新家 完 司

おはようが響きエンジン動きだす
人ごみの中うつくしい盲導犬
幸運な水桃の木が吸い上げる
はくの家あの世の如く静かなり
老いというおんぶオバケを投げ飛ばす



(つづき)

砂川市 大橋 政良

偽物を齧った舌の根が渋い
介護犬いぬの心で可愛がる
平凡に老いて長寿の箸二膳
胃袋を楽しませるバイキング
大声で山に不満をぶちまける



西 出 楓 楽 選

月一度私に還る理髪店

吹田市 早 泉 早 人

真実はとても言えない場の空気

古里でまあるい風に触れている

コップ酒今日の仕事をほめてくれ

世話好きで賢い妻をもてあます

手作りを教えてくれた毒ギョウザ

東京都 井 上 つよし

スローライフまずは朝寝が事始め

ナツメロに忘れた日々が甦る

アルバム整理待ったをかける古写真

勿体ないを集めて作るお雑炊

日記帳妻が見ているとも知らず

春風が迎えてくれる無人駅

藤井寺市 津 田 シルク

五七五の在庫味付して出荷

中年のパパを娘はきたなかり

中年のママから嫉やりなおし

大阪もどげんかせんといかんがね

ゆつくりと歩きたくなる春日和

小商い思案にくれる年度末

八尾市 田 中 トシエ

正直が取り柄で青い鳥逃がし

謙遜も背伸びもしない楽な靴

陽気です作り笑顔が得意です

風向きの変らぬうちに席を立つ

肩パッドはずして路地の風とすむ

ひび割れた皿に気づかぬ有頂天

横浜市 金 森 徳 三

年金の天引き増える新年度

むかつくね後期高齢者と呼ばれ

置いといたはずだと今日も揉めている

朝昼晩血圧計を見て暮らす

三人乗りママは強いが気をつけて

海外に旅する孫に脛やせる

福岡県 林 さだき

老犬と庭のベンチで懷古談
一部屋を占めて七段飾り雛
今日までの賞味期限を届けられ
母乳やる娘はつましく障子閉め
法相に弄ばれる死刑論
新築に姑の居場所をどこにする

藤井寺市 吉田 喜代子

ふぐ刺しは皿の絵柄も食べさせる
ふぐ料理女に嬉しコラーゲン
春雷は生ある物の目を覚ます
覗き見も今日はして欲し日記帳
許せない事が出来たら深呼吸
金高騰売りたい金は家にな

和歌山市 根田 よしこ

転んだらハイお仕舞と言う呪文
墓の前で泣かずば何処で泣きましよう
まぐれでも入選すればやる気出る
絵手紙の文字は下手ほど味がある
当事者に時効などあるはずがない
あれこれと空想好きで不眠症

茨木市 島田 誠一

裏金で相も変わらず飲む役所
赤恥もかいて男の顔となり
この国に恥の文化はあったはず

妻や子に言えない恥もたんとある
あとひとつ度量のサイズ欠けた人
この辺で茹だる地球の機嫌とり

横浜市 川島 良子

器用ではないから誠実に生きる
責任は負わぬ手術へ承諾書
十年日記生きる意欲が沸いてきた
高齢化還暦などはまだヒヨコ
パンク寸前水をゴクゴク飲んで
社会貢献いいえ本音はボケ防止

大阪市 江島谷 勝弘

出世して疎遠の友が会いに来る
娘が嫁ぎやつと自分の部屋確保
セルロイドピンポン玉で生きている
女高生メーカーせんでもきれいのに
懷はストレスだけが溜つて
吾亦紅何んと寂しい歌なんだ

八尾市 前田 紀雄

我が身にも値上げでせまる温暖化
風邪の菌受けつけません万歩計
ためしすぎどれが効いたかわからない
きわめつけ白い御飯にお漬物
餃子より御婆の作る握り飯
ハッピーなニュースに飢えて日が暮れる

大阪市 尾崎 黄紅

敵もなく味方もないという暮し
醬油だつて淡口が好き善人だ
徘徊か散歩か老いのとほとほと
美術館出て現実に戻る顔
ふるさとの野菜を買つてきて夕餉

大阪市 坂 裕之

春の陽にゆるりゆるりと髭を剃る
買ひ物はばあちゃんと行く賢い子
ケイタイの明かりで鍵穴捜してる
明日からは止めると決めて今日は飲む
初夏の風歩け歩けと後を押す

大阪市 澤田 定子

エコ対策ケチも堂々胸を張り
君が代を聞いてモンゴル賞さらう
杖立ても用意されてる通路バス
ジェットコースター空の色など見ておれぬ
立てば芍薬生まれ変つて言われない

大阪市 田浦 實

寒い朝温い布団が放さない
茶柱が元気をくれる冬の朝
旅にしあれば何を食べても星つける
つん読だけで心安まる歎異抄
春の声聴かせてくれる冬芽たち

大阪市 田中 滋郎

僕の夢ニッポンの夢きぼう棟
ええひとと言われてこれは仮面です
ひと雨が春ひとつだけ置いていく
もひとりの僕と折り合いつけてます
こころには今日の服を着せますか

大阪市 寺井 弘子

梅桃桜花の便りに軽い足
あいまいな笑いで歳を明かさない
暗黙のうちに通じる友がいる
桜の枝春の踊りに欠かせない
辛酸もあつて楽しみ倍となり

大阪市 萩原 大朔

手を延べて撫でたいような里の山
頂上の寺へ歴史を遡る
屋敷町みな幸せと限らない
定年後やっぱり機嫌取り結ぶ
帰ろうか行こうか金曜午後六時

大阪市 橋村 容子

頬の風春一番は過ぎたのに
のびきつて猫は陽なたを知っている
花粉症顔を被つて街へ出る
プライドはそこそ捨てて生きる糧
歩く事決めて若さを取り戻す

大阪市 原田 すみ子

大阪人お笑い好きなDNA

大阪色何処に住んでも滲み出る

火事鎮火一緒に消えた平和な日

災難は宝くじよりよく当り

災難で見た人情世の温み

大阪市 平井 露芳

つむじ風落葉は風に酔って居り

ミサイルは写るが漁船写らない

同窓会みんな無職で気楽に出

壁よりも今はテレビと独り言

転倒に注意とバスのアナウンス

大阪市 山本 加お里

バーゲンを素通りできず無駄遣い

鏡拭きよくよく見ると皺がふえ

ビデオどり手だけアップで写ってた

一番と思っていたら先が居た

出逢いからなぜか気の合う趣味の友

大阪市 吉内 タカ子

失敗を見逃す友の温かさ

甘えてる我が身に叱咤はがゆくて

夢だけが消すに消せない好奇心

春光に木々は芽ばえて仲間入り

笑い合う友に良い句の恩返し

大阪市 吉川 弘泰

青芝に子鹿絵になる青い空

待ってたよ紫の花菖蒲園

亡き人を偲んで語る至福の輪

うっかりとお喋りさんへ言う内緒

山里の水で一服杖元氣

大阪市 吉田 富美

消えぬ間に早く渡ろう虹が出た

銃眼を入りお城につばめの巢

母さんの思い出つむ柏餅

開けてまた閉めて吐息の小引出し

風船の行方聞きたい青い空

池田市 上嶋 幸雀

不器用な音符だ春を取り逃がす

わたくしを真ん中に置く春の地図

春の序章へ耐え抜いて来た五感

ブラインド開いて春を呼び入れる

ケータイを捨てれば春の匂いする

泉大津市 助川 和美

もう歳やもの忘れした言う勝手

おつかれさま退職金に言っている

好き勝手してきた夫濡れ落葉

居心地が良くて巢立たぬ子を嘆く

温暖化孫にきびしい未来見る

泉佐野市 稲葉 洋

振り返り一步一考して遍路
老醜を好き好んではやってない
泣かすなよ儂は母もの弱いんだ
備忘録また同じ事書く老化
煩惱を断てずゆきます閻魔様

泉佐野市 備後 三代子

病窓に影をのこして夫の逝く
幼な児のおちよほ口して雛飾る
煮大根あたため直し一人の餉
他愛ない母娘のはなしさくらもち
春の空持ち上げている大あくび

河内長野市 木太久 正一

二十周年迎えて嬉し長柳会
一張羅のコート着て行く同窓会
一瞬の立合いに泣く大相撲
ブリ大根味よく出来てほとする
赤い芽の牡丹すすく庭の春

河内長野市 黒岩 靖博

ゴールまで転けて転けても走る意地
愛が冷え寒になつて溶けていく
留守の間にへそくりの位置変えている
本人がハイ留守ですと返事する
空籤を毎週こりず買ひに行く

河内長野市 針生 和代

人生は踊るアホウで生きてゆく
スーパ一の安売りに着く最後尾
古希間近まだ登らねばならぬ坂
公園の賑わい犬のパパとママ
品格のある老後をと目指してる

岸和田市 中岡 香代

正論をのみ込み消化不良です
ほがらかに遊ぶ子供がない未来
ボンボンと頭を叩くギャグは嫌
快適な暮らしも格差ある時代
眉書いてとにかく走る朝の道

岸和田市 米富 淳風

ときめきをちよつぱり抱いて春うらら
はかどらぬ想い出語る部屋掃除
言うまいと思えど相手あなただけ
迷い多々今でも亡母に会いたいな
女心じつと見下ろす冬の月

堺市 大久保 伸子

しっかりとしているつもり隙だらけ
見透かされそうなきれいな目をしてる
いやなこと忘れる修業しています
朝寝して昼寝している余生とは
退屈もストレスだとは知らなんだ

堺市 荻野 像山

拝まれて行くも切ない流し雛
見て知らぬ振りできなくて憎まれる

減反してもローンは減らぬ耕運機
カラオケで沸いて貰おか俺の通夜
あれ以来食べないことにする餃子

堺市 羽田野 洋介

飲むほどに存在感の出る上司
背伸びせず身近なことを一つずつ
恋なんて歌留多か演歌しか知らぬ
日記帳何もない日の晴れマーク
リハビリも一度休むと初めから

吹田市 藏田 光子

三寒四温春のいぶきが感じられ
心配の種をこぼして子の寝息
子の笑顔共に微笑みこぼれでる
行く道を間違えてから霧の中
急がば回れゆっくり道を模索する

吹田市 二宮 栄子

通知簿を開いて母に自慢する
里帰り小さくなった伯母見舞う
リハビリの友を励ます見舞い籠
あと五分寝かせてほしいベルが鳴る
風邪などへ無口な息子から電話

高槻市 笠原 乃りこ

どこかも脳まで萎び春が来る
ガス電気水がいつでもある暮し
もうアカン父の口癖卒寿まで
春霞自分の中の友と敵
貝寄風に乗って隣のゴミ届く

高槻市 片山 かずお

顔いてから続いているイバラ道
ちゃんと飲んだはずの薬がまた余る
顔ぶれを見て言うことと言わぬこと
お互いに惚けは笑ってすむ程度
乗らないとゴールドになる免許証

高槻市 安田 忠子

コーヒーのああい匂い今朝の雪
時は春桜満開ランドセル
仕付け糸嫁いだ時のまま眠る
バスの中立つて鍛える足と腰
花粉症春が嫌いになりました

豊中市 荒巻 夢

天からの便りしんしん雪明かり
久々の雪にだるまを作りたい
寂しい日赤い山茶花灯をともし
くしゃみして春の洗礼受けている
猫のふん匂って春がやってきた

豊中市 神野 宇乃子

スーパーの棚から春が生まれたよ

二合炊く豆は三〇〇グラム剥く

吸物の木の芽はまだで白髪ねぎ

ぬか床の用意始める春うらら

菜の花を加え一品辛子和え

豊中市 谷川 勇治

定年やシャクトリ虫の道終る

一生は各停でした僕の旅

善玉を一日一つまるめたい

退職の日も自動ドアに放り出さる

冷奴碎いています春の愁

豊中市 松尾 美智代

土割って日向まぶしい福寿草

時時は田舎に元氣もらってる

ほろ苦い土筆を玉子とじにする

散歩道土手でわらびが笑ってる

土に還るきつと私もそのうちに

寝屋川市 岡本 勲

スケジュールぎつしりつまる医者通い

今年また無病息災願う絵馬

お雛さんしまい損ねて嫁きおくれ

巣立つこと忘れた雛が一つ居る

父の日にくれた子供の感謝状

寝屋川市 森田 麗

母のくぎ煮は恙なしとのメッセージ

大雪に日記のページ足りぬほど

待合せ紅筆にある春の色

古日記シュレッダーにはない懺悔

どう見ても息子の髭は無精ひげ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

ポジティブな気持ちに変える五月晴

夫から言われてみたいありがとう

鈍感力養わずとも天然です

こいのぼり泳ぎたくても庭がない

約款書眠れぬ夜に読んでみる

羽曳野市 松本 静子

黄砂まい霧がかかったような空

桃の花飾りて雛の顔を見る

至福とは今過ごしてる今日この日

古里は柿の実を取る人もない

啓蟄の日を迎えたがまだ寒い

羽曳野市 森下 一知

太陽のエキスが染みる日向ぼこ

外面の見栄にくすぶる内輪揉め

神経の尖りを撫でる熱い酒

下取りに出した不況の招き猫

無愛想なおやじの味の渋のれん

枚方市 小川 良吉

苛立つた心癒したいぬふぐり
味噌汁の湯気立ちのぼる朝餉かな
健康は妻の献立うす味に
戦中の直立不動ない平和
防衛省不祥事つづき平和ほけ

枚方市 小林 わこ

ありつたけ人は人だと活ける花
ありつたけのプライド時に風を入れ
不覚にもさっぱりしたら燃え尽きた
架け代えた橋へさっぱり人が来ぬ
ありつたけ夢も桜も咲かせよう

藤井寺市 伊藤 アヤ子

挑戦はまだ続いてる古希の坂
親だから鬼になつても泣いている
畦道のよもぎを嫁と摘んでいる
梅の香に上着一枚脱がされる
子供から心配される歳になり

藤井寺市 増井 ヨシ枝

紅椿ばかりはたりと地を染める
足腰が痛む寒さの鬼がいる
初孫のサクラ咲いたと言うメール
意地悪な人も孫には笑顔よし
入院も退屈しない五七五

藤井寺市 俣野 登志子

温泉もいいがわが家の古い風呂
虎の子に春のコートのお伺い
夫居ない夜ほっとして寂しくて
子等育ちあれよあれよと13号
ほつぺたが痛くなるほど笑いたい

箕面市 寺井 柳童

雨模様少しは楽な花粉症
神経痛ちくちく多分明日雨
降る予感当たるやっぱり雨男
百点に鬼の首でも取つたよう
犬飼うかロボット買うか悩んでる

八尾市 赤木 妙子

亡母に汲む朝一番の立春の水
いい友がいるから私よく笑う
友の文は代筆現住所はホーム
大食いの画像に飢えた日の記憶
女性の品格読んで反省しきりです

八尾市 笹倉 ひろし

ローン背に休む日も無いリタイア後
ぜんざいの甘さやさしい母の味
走馬灯ばくの秘密を知り尽す
アングルを変えて興味をアップする
メタミドホスそのあと黄砂撒き散らす

八尾市 田邊 浩三

八尾市 脇 俊子

目標は週に二日の休肝日

アメリカの咳がなかなか止まらない

温暖化せめて大雪ブレゼント

鯉のほり黄砂花粉の中泳ぐ

人間に借りを作ったコウノトリ

八尾市 寺川 はじむ

曖昧な笑み見定めて腹くくる

器量よりでっかい椅子にあつぶつぶ

百度石願い願いで丸くなる

欲深さずしり祈願の絵馬垂れる

膨らんだ秘密が口と喧嘩する

八尾市 中島 春江

重たげに路地を横切る孕み猫

八十路にも近くの他人あたたかし

連れ立ちて立食いするも旅なれば

憂きことを忘れ梅園ひとりゆく

蠟梅の盛り過ぎててもなお香り

八尾市 松葉 君江

一言のジョーク空気を和らげる

愚痴不満口には出さず荷をかつぐ

澄む空気未来を託す子に残す

人間から対話をうばうコンピュター

不都合はDNAのせいにする

今風かハグが孤独を包み込む

童心になる歌声が脳鍛え

笑うこと忘れてないか独り言

ソロバンを弾くことなく暮らしてる

探してる足元にある幸せを

大阪府 小栢 こずえ

耳にタコ出来たと話笑われる

朝寝ではないよエコしているのです

役に立つことがしたいが用がない

疲れはて買物やめて手ぬき食べ

春だからお洒落もしたい新がいい

大阪府 神野 千恵子

雑念が一瞬消える雪景色

五センチの雪が都会を笑ってる

誘ったり誘われたりと人が好き

前頭葉メモに代行させている

おにぎりはなぜか心を和ませる

大阪府 高木 道子

気がつけば雨が音無く雪となる

お日様のエキスで大地深呼吸

埒もない話に本音覗かせる

花の宴落ちる椿の失語症

朴訥の温いジョークに血が巡る

大阪府 若月 祐作

家の嫁家事は二の次PTA

控え目にして姑さんと仲が良い
生涯を迷い続けて傘寿過ぎ

男には意地を見せたい時もある

安らかに浄土に誘う清め雪（月八日妹逝く）

神戸市 木村 忠義

あすはあす今日を大事にして生きる

その笑顔何にもまさるプレゼント

受診には忍耐力が欠かせない

心配は無駄とわかつていてもする
鬱という字を見ると鬱気味になる

神戸市 武田 恵美子

乳歯抜け笑った顔がまた可愛

座れたら乗ってる時間早くたつ

ウォーキング新しい靴苛めてる

韓流にはまりビデオを見て食事

孫の記事全新聞を買いに行く

明石市 梶谷 和郎

母の手がなでると痛さ飛ぶ不思議

妻に勝つカードはすでに切り尽くす

ヒントさえあれば灯のつく脳がある

微に細に聞いた割には大雑把

赤い糸もつれを解いて染め直す

尼崎市 加川 靖鬼

瞬間冷凍マグロは口を開けたまま

水槽のクラゲが癒やす傘踊り

カブト虫鎧の下はどんな貌

二十年暮すと猫もひとになる

真つ直ぐな背筋に悪は入り込めず

尼崎市 河津 正治

席はずす潮時探す下戸の勘

探梅に粹に飾って風邪を引き

核心を衝かれとまどうインタビュ―

別腹とメタボの腹が聞き入れず

それとなく風の噂が気に掛かり

尼崎市 小池 幸子

名医とて治らぬ病あると知る

失敗の話をすると座が和む

春陽にやつと抜け出す冬籠り

無理すると必ず付けがくる齡

適当に忘れる事も処世術

尼崎市 藤岡 りこ

雪化粧庭は常より広く見え

雪しんしん鳥の鳴き声すら消えて

庭の小枝にみかんを刺して鳥誘う

心の底二人の自分棲んでいる

ロゴ入りで宣伝塔にされた服

加東市 安達 厚

篠山市 永井 かほる

金婚に二人飲む茶の甘いこと
簡単な話はお茶でかたがつき
金かけて建て金かけて壊す家
卒業か道理で門が賑やかだ
破れ家かかたこと冬の音を聞く

加東市 岩 本 美緒子

板チョコで済ます子孫のバレンタイン

レースカーテン日伸びうれしい趣味の部屋

限界と覚えり迷路八十路坂

葉さらい鼻風邪三日着膨れる

住みなれた六十年へ手を合わせ

加東市 黒崎 美紗子

保険満期無事に過ぎした至福時

芽が出たよ何色に咲くチューリップ

金の要る不安を聞いた見舞客

長生きで恋も花咲くいい話

仏へと好きな花植え春をまつ

篠山市 谷田 多美子

味噌汁もカットされてる血圧症

啓蟄にまるまる虫に陽のひかり

梅の花ほめて桜を待っている

当たるはずないと言いつつ宝くじ

ありがとう婆あ婆に仕事追ってくる

ねんねこでおんぶ赤ちゃん幸せそう
搗いた餅機械餅とは金と銅
菌も丈夫糸も通せてほめられる
家の中気がかりあるが目をつむる
痴呆症明日は我が身が気がかりだ

三田市 上垣 キヨミ

諦めているのにメタボ責められる

ユーホーを信じる人の口の泡

嫁の愛おでん煮いてと任される

散る花に妖精が舞うファンタジー

菜の花に踊りを誘う蝶の羽

三田市 臼井 二英

母さんは留守だという息子来ず

ころも着ているから温いエビフライ

やさしげな自転車凶器といわれ出し

リタイアで自分の定め見えはじめ

羽ばたいてみようとしても羽根不足

三田市 阪本 藤朗

少しだけ春が来ました還付税

もう春と朝の蛇口の水が告げ

駝蕩に見える海にも重い舵

家計簿の妻がぼつりと灯油代

わが腹に中国産と言ひ聞かせ

三田市 辻 開子

そろそろと体も春を感じます
毒舌の亡母の声聞き目がさめる
出っ腹が亡母に似てきた六十路です
リハビリの結果を信じする努力
同窓会六十路になって友が減り

西宮市 石野 照代

さくら漬け器の中は春景色
裏切らぬカイロを貼って冬を越す
人の輪をつなぐと大きな和ができる
木食さん胸のつかえが取れました
この鏡すこし変ではないですか

西宮市 藤木 直

なんとなく集まり癒されて帰る
草いきれ油彩に夏の色が増え
初夏の氣に裸足で草を踏んでみる
五月晴れ雲押し流し風が吹く
思ひ出す名曲昭和の歌ばかり

三木市 広瀬 房江

陽春の氣配に芽ぐむ猫柳
お薬をくれない医者を感じてる
心だけ少女のままで年を取る
ピーポーは通り過ぎたよ我が隣保
死に方もむつかしいネと長電話

奈良市 乾 春雄

迷い子が風船握って泣いている
どん底で聞いた男の童歌
のんき者今日が駄目なら明日がある
裏切った日から呵責に攻められて
青い空赤い風船どこへ行く

奈良市 尾畑 なを江

祖母ひとり乙女の祈り聞いている
縁糸付けたままです入社式
年金が手の隙間からこぼれ落ち
お宝は何にも無いが子が二人
近頃は好きなこととして肩がこる

奈良市 田中 賢治

健やかを祈る氣持は母の顔
禁煙は何時でもするとタバコ吸い
道遠く趣味の数だけ回り道
同サイズ妻のジーンズ半歩先
戦友の話咲いてる露天風呂

奈良市 辻内 げんえい

頃合とうすうす感じプロポーズ
顔洗い出直しせよと亡父の声
洗いのママより上手とほめられる
毒餃子もはや政府の知恵比べ
勝つためなら何でもありの世が怖い

奈良市 矢野良一

サクスの音色が酔わすジャズ喫茶
良い人にされ無理な誘いを断れぬ
今至福夕日温泉蟹料理

来て欲しくない花粉黄砂の春便り
春はそこ光眩しい昨日今日

橿原市 藤永実千代

カーナビに後一息で見放され
本を買う変わる私を夢に見て
宝くじに我が家の期待押し付ける
何度でも巡る話に相槌す
寒桜気分は既に春模様

和歌山市 坂部かずみ

我家にも平等に來た花粉症
デパートの春物売場眩しくて
生き方もリニューアルして新ダイヤ
ジリジリと後ろに迫る老いの友
同級生に逢うと自分の歳を知る

和歌山市 田中すすず

弾む毬の行く末などは案じまい
遠く近くわたしの胸にある砂漠
日溜まりの猫と目線が合うてくる
余生という挑戦状を持て余す
如何様に生きても所詮神の掌に

和歌山市 土屋起世子

日曜日はパン食ですよ仏さま
風邪ひきの妻にはじめて玉子焼き
正月に何をしたのかもう花見
モーツァルトで育てた娘反抗期
脳トレでまだまだ頭錆びさせぬ

和歌山市 福井菜摘

無印になって人間取り戻す
待つ人がいるから弾む赤い靴
無記名にたつぷり盛ってある本音
妥協せぬところに鍵が錆びてゆく
まず努力それからこいと神の声

和歌山市 堀富美子

方向を変えるとベンが走り出す
小さな幸小出しで下さい福の神
性懲りもなく失敗を繰り返す
仮面脱ぐ故郷の訛滑り出す
馳けあがる坂道梅の香が優し

岩出市 村中悦男

孫たちのこと真っ先に聞く電話
お化粧に勝る若さの健康美
庭にだけ千両も万両もある
散歩道拾った話題妻に分け
ドライブに道路作った人思う

海南市 小谷 小雪

紀の川市 吉村 幸

大臣は来てても待つ人還らない
湯たんぽの謙虚さがいい春の朝
妥協策ねじれが少し解け出して
ジョークなら無料配信致します
便利さにすり寄り足が弱くなる

紀の川市 宇野 幹子

学ぶもの多く拾った回り道
春うららうずうずの芽が伸びてくる
片減りの靴に家族がしがみつく
すぐ尻尾まくのに吠える癖がある
人生の灰汁が浮き出てきた余白

紀の川市 北山 絹子

名水は神様からのプレゼント
志立てて始発の駅に立つ
ハンカチに嬉し涙を包み込む
歴代の総理の癖が面白い
細長く生きる私の設計図

紀の川市 木村 徑子

花束の魔法をもらう有頂天
一輪の梅と備前がいかしあう
カルチャーの梯子でさみしさを埋める
ひとり暮らしの余白へラジオ深夜便
晩学がまた火柱をあげるかも

きよみにはるみちよつと触れたくなる蜜柑
二の腕を出せる若さに嫉妬する
貧乏神が嫌う陽気な顔で生き
紙一重の勝ちから神を信じてる
日溜りの夫婦絵になる笑い皺

橋本市 石田 隆彦

お宝は心耕すボランティア
瀧壺に煩惱一つ置いてくる
合掌の両手で神と縁結ぶ
パソコンが見知らぬ同士取り結ぶ
あの世ではまた赤ん坊からです

和歌山県 森下 よりこ

さあ啓蟄私も忙しくなるぞ
神経を逆撫でてくる言葉尻
ときどきはアンテナの向き変えてみる
思いがけない出会いをくれる道の駅
やっと春の気象配置になってきた

鳥取市 近藤 秋星

春到来老いも若きも背を伸ばす
万物の生命の鼓動聞こえそう
鶯よ歌え我が世を我が春を
菜の花の天ぶら春を賞味する
桜咲く花の四月よいつまでも

鳥取市 津村 律子

赤い袍を見せびらかして春を待つ

雪垢の墓石を洗う水温む

盛衰を想いつ無縁墓掃除

ホワイトデー自分の好きな花を買う

ア行にパ行鏡に向かいリハビリ語

鳥取市 橋谷 静江

健康に感謝しながら飯を食う

耳少し遠くて家庭穏やかだ

春向いて誘いの風に乗ってきた

金貯めて今日は出しますうんと買う

振袖を選ぶ成長孫に見る

鳥取市 松岡 照美

寝不足と締切で脳萎えてくる

ほどほどのゆるみ加減が心地良い

ほどほどの雨塩梅に土潤う

折り返す二人の呼吸たまに合う

大粒の雨しばらく家を叩いてる

鳥取市 山岡 紀子

おみやげを餌にさくらへ誘われる

慰める役はいちばん難しい

楽をするママを笑ったギョウザ達

春風に五体がそつと背伸びする

重い腰しぶしぶあげて申告へ

鳥取市 山口 千代子

待った春楽しみ探し夢を追う

子は都会幸せ祈る母は過疎

字を見れば眼鏡掛けたりはずしたり

風呂の中一句浮んで出たら消え

働かぬ老いの茶碗の軽い飯

鳥取市 横田 春名

杖についてはじめて老いの痛み知る

一言に傷つきひと日持て余す

怒っても叱り上手にまだなれぬ

紙魚多い幼き日記読む日向

苦労したなんって言うまい老いの意地

倉吉市 酒井 芙美子

雲行きがあやしくなつて中座する

雲行きを見て良い方に加担する

怒らずに聞いてあげます認知症

シトシトと降る雨見つめ句をひねる

夫婦ゲンカ子供うろろ板ばさみ

倉吉市 福光 京子

子が帰る時まで家を守る役

手作り茶碗飲む度ゆがむ口触り

鼻先をゆがませ鮭の長い旅

ゆとりある温い言葉に癒される

まだ余裕あるとその気にさせる旅

倉吉市 藤井 美津恵

メモを書き買い物行つてメモ忘れ

ひなだんのひなの顔見て母思う

ひな祭り白酒少しはほ染める

小春日に一服いか桜もち

春雨に歌壇の花も立ち上がる

倉吉市 前田 喜美子

ふる里はそのまま名画四季の彩

副作用ないと信じる正露丸

ずる休み時どきしたくなる五月

時どきは振り向いてよと妻が言う

名門校出たら古里遠くなり

境港市 中井 虎尾

白き舞春は別れの北帰行

山の雪集い流れる春の川

地球にも賞味期限があるのかも

追っかけて追いつけないもの明日未来

ウハエの字合わせてごらんほら空ネ

米子市 猪森 スミエ

あれこれと私のブラン砂の山

ランプの灯草ぶき屋根の温かさ

あけぼのに霞む墨絵の伯耆富士

悪人は一人もない寺参り

境界線杭一本が見張り番

米子市 小塩 智加恵

常連の姿が見えぬ安売日

同病が集う待合い癒し合い

欲張った趣味に追われる昨日今日

テレビから生れた知事はよくしゃべる

暇あればノート広げて五七五

米子市 見山 温子

奨められた派手目な服に肩が凝る

手をつなぎメタボと老化やつて来る

ボーナス日妻は紅つけおしやれる

クラス会タイプの人老いていた

義理チョコに男の見栄が倍返し

米子市 吉田 陽子

落のとう顔を出したらすぐ摘まれ

まだ冬の悩みを抱いてコート脱ぐ

生きざまになれよと願う笑い皺

嫌なことばかりある日だ暦見る

FAXが届く重たい空気載せ

鳥取県 岩崎 和子

いつまでも三寒四温くり返す

句が出来て目を通しては迷い出る

眠気だけ降らず降らずみ襲い来る

コーヒー豆の回転音に目を覚ます

エッセイも活字になると違う顔

鳥取県 岡本 幸枝

出雲市 川島 和歌子

美しいマナーは高く評価され
絶景を誇る我が町巡る島
千羽鶴春はそろそろ退院か
熟練の保育士さすが児が慕う
人並みのつもりが私支えてる

鳥取県 加賀田 志延

スーパ一の棚へ値上げを見て回る
自給率心配しつつ今朝もパン
陽を入れた夜具で明日を引き寄せる
自分史の彩りへ恋積み重ね
お礼状心を添えて絵も添えて

鳥取県 斉尾 くにこ

お月様お客様ですかくや来る
中年の大志荒野をまだ目指す
投げられた愛は両手で受けとめる
最強は無言と知りつ堰を切る
はばたいてはばたいて風車は飛べず

鳥取県 田口 清帆

リーダーは明るく楽しく元気よく
苦しみは分け合えば楽になるかな
わあかわい思わず声が出てしまう
世帯苦をずらり並べた物干し場
懐かしい手を取る名前出ないまま

よく喋るはらはらせる孫の口
雑草も緑引き立つ春の庭
風向きの変らぬうちに話決め
ファツションシヨ目移りしてる春の彩
早春の日射しを浴びて鎌を研ぐ

雲南市 武島 ちよえ

幸願い心の窓を拭いている
お誘いを春着に替えて待っている
冬の日があるから春の有難味
若者に骨のないのが多すぎる
だと言つて知らん振りなど出来ません

松江市 相見 柳歩

出口から入った一方通行
好きだから炎を超えて君を抱く
恋の数ねずみ算でも追いつけず
火を使う人間らしくなってくる
正しさを求められても苦笑い

松江市 山根 邦代

言えそうで中言えぬありがとう
春の日が誘ってくれて遠出する
年だとは思いたくないドッコイシヨ
取り戻すプラス志向の笑い声
自分では見えない背中見られてる

府中市 馬場 利子

今治市 渡邊 伊津志

故里の空気に弾む赤い靴
切株は春の温みを抱いている
テレビからほのぼのと聞くわらべ唄
明日の絵に入道雲が顔を出す
南から届く切手は春の彩

府中市 藤岡 ヒデコ

ウグイスの発声練習始まった
草の芽を一気に伸ばす春日和
身の丈に合う幸せをしみじみと
亡母のことしきりに思うのはの歳
減らされぬ食費に止まぬ物価高

宇部市 高山 清子

赤い糸もつれて解けて共白髪
支え合う命愛しむ喜寿傘寿
ライバルへ切り札かくし持つ強み
老いたかな目が口ほどに物言わぬ
旅好きの古い春風に落ちつかず

阿波市 三浦 千津子

出る幕がまだあり弾む割烹着
欲捨ててあとは付録となる余生
好きな道何度こけても立ち直る
近頃は柔軟に生き若返る
春の音符に蝶も私もふわふわと

はしばしに本音が滲み出る怖さ
治癒力を生かした医療こそ基本
胃の皺が眉間に深い皺つくり
空気など読めない女性よく喋り
励ましも笑声ですると力つく

大洲市 花岡 順子

無一文だけどロマンは持っている
リセットへ女はときに髪を切る
刺あつてこそ頂点に生きるバラ
面子など捨てた気迫に負けちまう
かくれんぼ鬼が迫つてほつとする

香南市 桑名 孝雄

平均寿命の上でどつかとあぐら組む
県勢をおきやく文化に賭けた土佐
おきやく文化竜馬も参加するそう
煩惱もあつて人生いじやないか
カウボーイ気取り鉄のガンベルト

香南市 近森 功

ラバウルを昔話に祖父は老い
湯豆腐が酒の肴に出世する
大陸の黄砂迎える杉花粉
長い列なんの列だか後につき
貧農がメタボ知らずに老いてゆく

高知県の静草

シドニー 三谷 たん吉

すれ違い待てば会釈をまた貰う
善人のふりは得意なほとけ顔
羊羹を一人で食べて物足らず
去年まではいてなかったズボン下
新刊にもたまには会える町の図書

北九州市 岡田 幸生

仏壇に断食させて気まま旅
弔いは簡単でよし父の遺書
満期きてはっとしている保証印
賢弟に目立たぬ兄の薄い影
薄味に馴らされ無理の利かぬ老い

唐津市 岩崎 實

真珠湾野球で和む敵味方
老いてゆく姿ばかりがよく目立ち
飲んでいた酒が気になる手術室
高級の眼鏡何年あと生きる
置き場所を替えて引き立つ壺一個

唐津市 吉富 節子

主義主張ころりと変る論吉風
また一つ記憶の迷子帰らない
胸騒ぎほんとになつて姉が逝き
脱皮する機会逃して喜寿をすぎ
くぎ煮着き無沙汰の友に安堵する

マスコミの暴走国の危機招く
日本刀挿して乗りたし捕鯨船
怒ることばかりの自分持て余す
猪と人がタケノコ奪い合い
政治屋の主権者見る目ただの票

札幌市 小沢 淳

美辞麗句聞いて白ける人もいる
資源ない国のあわれを知った冬
傷口を触りたい人避ける人
微笑めば微笑み返す友がいる
風向きで評判がらり変わりそう

札幌市 三浦 強一

恙なく飲み食いそしてダイエット
自画像に皴描き足した誕生日
寝不足はテレビ名画のリバイバル
百薬の長で五感の活性化
同室は軒同士とした幹事

取手市 葛西 清

メモするを忘れて一句空に消え
崖っぷち立てば素直になれる足
縁側の四温を背な爪を切る
立ってます乗換えそうな席の前
地獄門混んでいますとエンマ様

日立市 加藤 権 悟

母さんが睨む視線が笑ってる
氣くばりが温い男の人間味

この道にふるさとがまつ母が待つ
タンポポの吹かれて風のボヘミアン
エリートのは汗は知らない机上論

草加市 飯土井 健 翁

動かねば足の方から萎えて来る
汗かいた金は家から逃げはせぬ
問題が起きてからやるのが政治
感動の本から貰うエネルギー
三十の孫に小遣いやる明治

昭島市 野 口 忠

信じて信じなくてもくる未来
シャルウィダンス美人なんです先生が
誘っても聞こえぬふりの演技賞
頼まれもしないことまで腰を上げ
福耳の子はそれだけで期待され

立川市 柏 野 遊 花

相性のいい服きょうの心地よさ
並ぶなどばかけていると並んでる
合格のことは周りに乱反射
自由と惰性折り合いながら波がしら
ぬるま湯に浸って刺も覇氣も抜く

横浜市 巖 田 かず枝

誕生日嫁に絵文字のメールする
安心の出来ない国だけられぬ
学歴は問わぬ気楽な趣味仲間
筆無精メール小まめに打っている
綱引きが好きな国会議員達

横浜市 長 島 亜希子

お宝と信じて伊達の軸掛ける
事情あるようだ電話に出てこない
こそこそしてないから二人大丈夫
記憶力僕より悪い高官だ
カード社会だけど私は現金派

藤沢市 加 藤 スズコ

食べ歩き似合っています好きな街
リハビリの歩幅うれしい折り返し
早春の富士は輝く雪衣
わらべ唄むかしを手繰る雛あられ
初曾孫米寿祝いに春が来た

佐渡市 高 野 不二

子のテスト発表までは眠れない
七回忌泣きたい思い出を捨てる
全自動やつぱり妻の手を借りる
老人免許そのけそのけ通ります
誕生日平均寿命近くなる

岐阜市 平野 あずま

春の陽に呼ばれ物の芽背を伸ばす
ささやかな幸福だから長続き
毛糸玉一針ごとに愛を編む
新札のお釣りで得をした気分
わが街で隠しカメラに監視され

北名古屋 片岡 文男

余生とは無限で先が恐ろしい
タバコ買うカードに素性洗われる
老人もゲーム機の椅子占拠する
申告に昼寝するほど待たされる
海軍もサラリーマンでミス続き

京都市 清水 英旺

雪を置く蠟梅さらに艶めいて
盆梅展そだけが春香り立つ
女房には弱みないけどイエスマン
名曲喫茶に残る青春グラフィティ
レコードの埃の音も快よし

京都市 藤井 文代

いい恰好したがばかりに仕事増え
相談事耳に欲しいは肯定語
口はさめず聞き役だけで頼られる
茶柱が今日の私の背中押す
夫もまた同じ決め手でせてくる

鳥取市 大前 安子

逝った友白菊百合に抱かれ行く
眠る友淋しき鐘の音尾を長く
眠る友僧侶の足は歩を変えず
眠る友写真で笑いどうするの

鳥取市 谷岡 清子

赤いいちご手が伸びそうでひっこめる
玉ねぎは体に良いと宣伝す
芋天に魅せられ一つ買うとする
ふところよ我慢しなさいまたがある

境港市 遠藤 那珂子

沈黙を守り通した母だった
騒がれる仲でないのに噂飛ぶ
騒ぐ子がいぬまに本を読んでおく
のこのこと昔の夢が顔を出す

米子市 田村 周子

老松は強く根を張り天をつく
弓ヶ浜松の緑も美しく
あげは蝶必ずとまる山椒の木
人生は自分のものよ流されぬ

鳥取県 飯野 菖子

まだ元氣まさかこんなに生きたとは
名門に親の期待と戦う子
孫達の寒さ知らずの笑い声
春の陽が始めなさいと急ぎ立てる

鳥取県 大塚 美代子

胃カメラに腹の裏までのぞかれる

講演を半分聞いて眠くなり

饒舌の中に混った砂の粒

残り火を集め心に暖を取る

鳥取県 岡村 孝明

ドア閉める音に心が現われる

ベット抱き固い心を和らげる

ヘソ曲げた妻を宥める褒め言葉

待っていた円高生かすパスポート

鳥取県 北村 稔

もう少しそばにお寄りよ諭吉さま

保育園なくなり託老ふえている

この薬副作用あり効くんです

熱爛に湯豆腐あればごきげんよ

鳥取県 坂本 智子

沖合に見る漁火のゆらゆらと

しつかりと素材いかして料理する

三日月が刺してきそうな凍る夜

豆腐食べつると嘘を消している

松江市 柏井 日出子

山脈もかすむ旅路のしじみ汁

新入りの人が天位になるパンチ

カーネーション咲かせて淡い思慕一つ

チャーリーと呼んで恋うてるペンの先

松江市 松浦 登志子

負荷ふやし元気な骨になれという

定年でそろばんはじく時間増え

それぞれの山をめざして定年後

十人の歌リクエスト十とおり

出雲市 荒木 英子

春一番水仙の花芽を見せる

海外旅行やつかいな事娘にまかせ

年金の貧しい中にいまの幸

肩ならべるんるん気分余生旅

雲南市 菅田 かつ子

過ぎた日のみんなやさしい人ばかり

茶封筒せめて切手は春の色

電話ベルちよつと待つてねハイハイハイ

白状をされても今更妬けもせず

雲南市 福岡 博利

子や孫の今度くるのを待つふたり

のら猫の春呼ぶ声のにぎやかな

手の甲の皺に歳月知らされる

胃カメラのシロに一本追加する

雲南市 渡部 好榮

味噌汁もインスタントになる時代

古稀すぎて自分の地図もせまくなり

耳遠くなるのもよろし老いもよし

なかなか本音が言えず日が暮れる

安来市 原 煩惱児

骨拾い納得ゆかぬ孫の顔
大婆ちゃんと死別納得ゆかぬ顔
長靴をブーツよと孫強気なり
孫成長ボンボンと横文字が出る

得票率七〇%は想定内

新ロシア黒の皮ジャン風を切る
同胞はペテルブルクの同窓生
メドヴェージェフ洞爺湖サミット試金石

唐津市 北村 松風

都路を無事タスキ継ぎ親安堵
痴漢でる噂のほとり遠回り
新聞の計報漏れなく載る故郷
知事さんで観光コースなる県庁

山鹿市 阿部 ミツ子

ほのほのと愛しき妻のかくし味
帰りまつともしび淡くいそぎ足
竹と番傘灯りが染める芝居小屋
傘と竹口マンの灯り美の世界

栃木市 岡野 すみれ

面接はひとみの奥までみすかされ
ためらいの返事ふところ不安定
この頃は作り笑いがうまくなり
負け犬となってやがては消えるのみ

静岡市 渡辺 芳子

シャンソンに酔える心の喜寿の春
ボケの花身替り頼み鉢を買い
一日の始まり先ずはクスリから
あてにせず野の花のよう生きてみる

大阪市 太田 としお

気がねしてパンが小さくなりました
氣を病むな男以外は皆女
のろのろとしても同じ時間給
強面も孫を相手に三枚目

大阪市 西藤 次男坊

そして朝昨日と違う日が昇る
そして朝時間をかけて歯を磨く
そして朝脳が溶けたか始動せず
そして朝何をしゃべればよいのやら

門真市 矢阪 英雄

健康が財だと知るも不摂生
節節が痛みはじめて医者探す
氣にしてもしかたがないとカルテ見る
抱きしめて治るものなら限りなく

河内長野市 内海 綾乃

救急車たらい回しで保障なし
医療費へ風邪も引けない七十五
バレンタインひとつでいいよチョココレート
ひとり暮らし話す相手は鏡です

堺市 近藤 治子

赤い糸その端指名手配中

赤福の再開並ぶほどの味

行く時も帰りも居ます立話

化粧してどこへ行くのと尋ねられ

堺市 佐々木 頼典

背負い水人の生きざまそのままに

大阿闍梨一日一生土の性

親が子をあきれた社会に別れたい

おやまあまああれもこれもとラベル替え

豊中市 源田 啓生

春宵の中の川柳消えている

歩調取れ何処かで号令掛けている

春なれや値上げが急ぎやって来る

善悪をじっと見つめる鬼がいる

豊中市 藤沢 長一

握りすし味より先に皿数え

拍手され肩を押されてやる気出る

てこずった子供等に今教えられ

豊かさは人を許せる心生む

寝屋川市 小嶋 みさと

待ちかねた日ざし眩しい春そこに

論戦が激しい国の行方かな

散歩道紅梅見事心打つ

年金の目減り気になる物価高

枚方市 坂本 ミヨノ

通り抜け桜吹雪に酒一句

気紛れ猫軽くひな壇占領す

ローカル線のひなびた宿の湯にほれた

春樂し土筆タンポポ草萌える

枚方市 二宮 紫鳳

リハビリの道に春待つ蕾たち

折り返し地点で夫婦の絆しめ

通院の小径に香る梅の花

へこむ日々ふるい立たせる孫電話

大阪府 安藤 なつこ

花咲けば血がさわぎ出すDNA

撒き散らし振り向きもせぬ花嵐

献血後ほんの気持とジュースクレ

殺人かいい春の夜のネコの恋

大阪府 西川 冷子

関門峡波頭で知れるその深さ

絵のような海峽橋の灯がともる

九州へ灯りの狭間汽笛鳴る

五重の塔御霊安かれ壇の浦

大阪府 畑中 節子

腰痛めあれこれ冬の長電話

梅一輪寒風に耐えにつこりと

同じことまた聞かされて日向ぼ

一日の仕事三日に分ける知恵

神戸市 山崎 武彦

親離れた娘の瞳輝いて
少年の瞳は遠い海をみる
休日は妻の指さす方へ行く
義理チョコは要らぬと先にいっておく

加東市 中村 和代

余裕ある老後だんだん遠くなる
留守願ひ腕まくりして義母元氣
失敗も笑いに誘う浪花っ子
誘われる内が花よと酒の会

三田市 福田 好文

親よりも仲間を庇う反抗期
書き添える五七五に本音入れ
生簀の鯛上目使いに人を見る
アルバムを繰れば青春こぼれ出す

宝塚市 丸山 孔一

子のメタボ親の遺伝と怨み言
退院後良い顔色と言う見舞
水郷の船頭が説くソーラー化
空耳が夜更けの扉開けさせる

奈良市 阿部 茶々

水たまり飛びそこねては笑う子等
生協に固い信頼裏切られ
勝ったとて今後実力ためされる
受験して落ちても名誉有名校

原稿募集

— ペットものがたり —

特集原稿を募ります。

人の心を和ませてくれるペット。その
ペットにまつわる話や思い出など、何
でも結構です。

同人の御応募をお待ちしています。

四百字詰め原稿用紙一枚半（二枚（六
百字）八百字）本社事務所宛

タイトルは別につけて下さい。

締切り六月十五日、発表九月号予定
但、原稿の採否、添削は編集部に一任
願います。

編集部

公園のボート知ってる娘の重さ
自動です沈みたくなさや退いとくれ
米朝に棚上げされたためぐみさん
食洗機茶碗欠かしたホシにされ

奈良市 岩本 浩二
生駒市 小西 稔

神仏を祈る心にへだて無し
祈る前おのれの心ざんげする
お互いの健康祈る同期会
いやな世も一杯飲んで上機嫌

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

人生の雑音

一生は腐った梨にさも似たり
弁護士も家賃の方は滞り
長靴がへびにも見へて灯がともる
豚の子へ続く豚の子ばかりなり
大きなものにその影さへも奪はれて
善人が滅びつつある寂しさに
只一句超生活の句を遺し
大杉を殺し思想を取り逃がし
君見たまへ蒨葎草が伸びてゐる
まだ嘘が半分まじった辞世なり

元日の卓上日記晴とだけ

時計にまでうつる神経衰弱症

天才へ親類あんなものと云ひ

遊ばしもするが意見もする女将

雑談の前にお布施がさらされる

駆落に旅の花火の淋しうて

二階のへ火種をあげて疑はれ

あの記事も私が書いたやうにいひ

もう世辞を世辞として聞く年になり

貧しさにだんだん仲がよくなって

やうもまあ豆腐ばかりとあきられ

人間のあわててたべたさもない気

これ以上には痩せられぬ痩せられぬ

出世などもう問題にしてはゐらず

同人特集 花 百 句

平成十六年～平成十九年
同人吟から 編集部

夕桜とんぼがへりがしてみたし

路 郎

黄菊白菊明治のままの色で映え

生々庵

ふるさとで結ぶ夢あり沈丁花

葉

嫁姑カーネーションは火の簇

薰 風

ふところにバラと銀河とエンピツと

天 笑

球根と話して植えるチューリップ

澤田 千春

花の苗間引き近所へおすそ分け

村上 信子

コスモスよ野菊よダムの底になる

岩本 笑子

不仲とは知らず垣根を越える花

川久保睦子

窓際で負けず嫌いなシクラメン

西村りつえ

花の名を思い出してるアイウエオ

江口 度

梅の香を運ぶ八十円切手

牧野 芳光

花束を貰い子離れ親離れ

大石あすなろ

白い画布どんな花でも咲かせます

時広 一路

君の名を知った野道のイヌフグリ

板山まみ子

寒梅が匂う日だまり下駄をはく

安永 春

花贈る嫉妬がないと言えば嘘

藤井 正雄

月下美人汝なかなか芸達者

谷口 義

春爛漫花にまさりし女連れ

加島 由一

菊人形菊も本気で咲いている

柿花 和夫

菊ばかり御免なさいね仏様

秋元 てる

咲く花は土の美味しさ知っている

光井 玲子

タンポポの綿毛伝言届けたか

伊藤 玲子

座禪草雪盛り上げて永平寺

花の首切ってご先祖さまどうぞ

花の下われも人の子団子買う

ドクダミの花の白さに洗われる

ライトアップ花は眠いと言うてます

人恋し雨に傾く花の首

満開のつつじの色にあるパワー

カーネーションの一鉢母を喜ばす

日本語はいいな花冷え花曇り

花吹雪浴びて最終走者来る

大根の花咲く里や牛の声

黒ユリが咲いて今年も逢いに行く

菖蒲園人に名前があるように

ひとひらの情けに弱いおじぎ草

父の日の花屋普通に定休日

壺に百合 祥月命日降りやまず

向日葵へ真つ直ぐ雨が降っている

花畑春の音符がころげ出る

二度聞いて二度とも花の名を忘れ

ひまわりの海 童心のおおはしやぎ

ジョギングの足にエールの茄子の花

渡部さと美

中岡 妙

山田 耕治

小川てるみ

大川 桃花

山岡富美子

吉田あずき

高田美代子

石谷美恵子

上田 俊路

小白金房子

島 ひかる

籠島 恵子

高杉 千歩

緒方美津子

居谷真理子

平尾 菜美

津川 紫晃

岸 桂子

大内 朝子

津守 柳伸

露草の薄紫に郷想う

脇役の道を選んだ吾亦紅

ブライドを持って野に咲くれんげ草

手みやげの花も疲れている暑さ

和菓子やに桔梗の花が咲きました

おいらん草夕べきれいな紅をさす

暑からにのうぜんかずら満開に

駅のポスターから雪ふりさくら咲く

本物か造花か触れてなと思案

今日だけの命に燃えて咲くむくげ

いつまでの残暑朝顔咲いている

ジャスミンのかおりほのかに髪洗う

どうしても生きよう花は咲いている

迂回して合歓の花咲く道ひとり

相手みて引つかきなさいバラの棘

幸せで花におはよう木におはよ

菊もダリアも母を癒してはくれぬ

コスモスを折らない風の思いやり

菜の花になれるつもりのブロッコリー

桜が咲いたら句碑囲んで飲まかな

花活けるしあわせ 想うひとがいて

和田つづや

安藤寿美子

内海 幸生

堀畑 靖子

山本 義子

中井 ゆき

白根 ふみ

早川 清生

江見 見清

片岡智恵子

黒田 能子

春城 年代

政岡日枝子

盛田 夢路

都倉 求芽

北野 哲男

吉川 寿美

宗 水笑

牧野 芳光

小島 蘭幸

黒田 茂代

たんぼの綿毛それぞれむこうみず

ナナカマド駆け込み寺に赤すぎる

夜桜に酔うて候 西の丸

かすみ草チームワークの勝利かも

来年もみんなで花見できるよう

花むしろみんないい顔しています

母の日に花束だけがやって来た

夾竹桃 戦の記憶褪せてくる

あじさいの吐息流してくれた雨

おしゃべりなパンジーがいる花時計

つゆほども邪心見せない月見草

花の種子袋と違う色で咲く

真実の一つバラにはバラが咲く

春ですなハートになって花いかだ

ひっそりと呼吸していたスマレたち

蠟梅が老いの快癒を待つて咲く

ポインセチアの赤はサンタのおくりもの

土手の道よけて通れと豆の花

胡蝶蘭美人姉妹のように咲く

石露の花咲いて門口灯がともる

高島 啓子

天正 千梢

前 たもつ

井丸 昌紀

新家 完司

高橋 宏臣

板東 倫子

安芸田 泰子

米澤 俣子

安土 理恵

山田 葉子

市丸 晴翠

神夏磯 典子

川端 一步

木村 春枝

清川 玲子

楠見 章子

熊代 菜月

小谷 集一

今 愁女

春の伝言梅から承る

らっきょうの花が砂丘の秋告げる

泡立草帰化した色で咲き誇り

れんげ咲く我が家に牛はもういない

花の名は知らず香りは覚えてる

やわらかく老いてゆきますさくら草

水仙が咲いた私の秘密基地

バラ展の香りにむせる倦怠期

母と観た桜はもつとさくら色

リラ咲いて見知らぬ人に名を聞かれ

沙羅の花亡夫に詫びたいことばかり

花茗荷忘れ上手になって老い

薔薇の字を書ける私は惚けてない

きき耳をたてているのは花水木

曼珠沙華枯れた姿も見ておこう

リハビリの身には眩しいクレマチス

自分史の真ん中あたり花の章

カタカナに囲まれ肩身せまい菊

何もかもご破算にする竹の花

百咲いて百の夢散るさるすべり

小寺 花峯

録沢 風花

森 茂美

土橋 睦子

鴨谷瑠美子

菊池トミエ

長浜 美籠

根岸 方子

播本 充子

牧渕富喜子

伊藤 寿美

園山多賀子

太田 昭

森 茜

酒井 一壺

堂上 泰女

岩佐ダン吉

榊本 宏子

高橋 岳水

亀岡 哲子

第32回 全日本川柳2008年福岡大会

日時 二十年六月八日(日) 午前九時半開場

会場 アクロス福岡イベントホール

〒八二〇〇〇一 福岡市中央区天神一

一 TEL〇九二(一七五) 九二二三

(地下鉄天神から徒歩5分)

宿題 第一部締め切りましした

第二部(当日投句) 十一時十分締切

「人形」 敷田 無煙選

「屋台」 三宅 保州選

「方言」 近江あきら選

各題2句当日配布の句箋に記入

第二次選者 塩見 草映・大木 俊秀・河内

天笑・新家 完司・田中寿々夢

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰 文部科学大臣賞・参議院議長賞・

川柳大賞・大会賞・ジュニア部門

は賞状とメダルを予定

お問い合わせ先

〒八二一三六二 福岡市南区長住二一五二八

大場 可公方 日川協福岡大会事務局宛

電話 〇九二(一五五) 六一三六

*

全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳福岡大会実行委員長 大場 可公

第23回 国民文化祭・いばらき2008 川柳作品募集要項(概要)

自然あふれる ふる里に ひびき輝くあたらしい文化

1、応募受付期間 平成二十年四月一日(火)～六月三十日(月)(当日消印有効)

2、応募規定

(1) 作品 一人各題一詩(未発表作品に限る)

(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方及び小・中・高校生は無料とします)

(3) 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。

(4) 応募先 第23回国民文化祭茨城県実行委員会事務局 文芸祭「川柳」係

〒311-4304 茨城県東茨城郡城里町下青山一 城里町教育委員会事務局内

3、宿題・選者へ事前投句 高校生・一般の部

「納豆」 〓 渡邊 安夫(茨城) 「水」 〓 酒井 路也(石川)

「スピード」 〓 齊藤由紀子(東京) 「核」 〓 會田規世児(愛知)

「事前投句」小・中学生の部 「納豆」 〓 丸山しげる(埼玉) 「水」 〓 早川 双鳥(山口) 「スピード」 〓 江畑 哲男(千葉)

「猪」 〓 川保 秀夫(栃木) 「ひびく」 〓 田頭 良子(大阪) 「反骨」 〓 零石 隆子(宮城)

第二次選者

竹本龍太郎(東京) 久保田半蔵門(大阪) 佐藤岳俊(岩手) 岡崎 守(北海道) 奥田みつ子(兵庫)

4、賞(予定) 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・茨城県知事賞・第23回国民文化祭茨城県実行委員会会長賞・茨城県教育委員会教育長賞・城里町長賞・第23回国民文化祭城里町実行委員会会長賞・城里町教育委員会教育長賞・全日本川柳協会会長賞・茨城県川柳協会会長賞

5、発表会場 川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成二十年十一月九日(日) 十時三十分～十六時〇〇分 コミュニティセンター 城里

6、交流会 入選作品は、作品集として刊行し、応募された方(小・中・高校生は入選者)に無料で配布。

平成二十年十一月九日(日) 十七時～ コミュニティセンター 城里・多目的ホール

7、問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒311-4304 茨城県東茨城郡城里町下青山一 城里町教育委員会事務局内

第23回国民文化祭城里町実行委員会事務局宛 TEL 029-288-3135 FAX 029-288-7006

8、主催者 文化庁・茨城県・茨城県教育委員会・城里町・城里町教育委員会・全日本川柳協会・茨城県川柳協会・第23回国民文化祭茨城県実行委員会・第23回国民文化祭城里町実行委員会

愛染帖

新家 完司 選

三田市 堀 正和
結局は値段で決める屋ごはん

(評) 刺身定食、焼肉定食、天井、ラーメン、きつねうどん、カツカレー。どれもうまくそれで迷ってしまうが、結局は財布と相談だ。

松江市 川本 畔
グリーン車に乗る人達が胸反らす

(評) 同じ時間で同じ距離を移動しているだけなのにメチャ高いグリーン車。エリート気分や優越感を持たせる「おだて代」だ。

河内長野市 坂上 淳司
正ちゃん帽被りストープ代ける

(評) 大正時代の漫画「正チャンの冒険」の正チャン愛用の帽子。いまだに廃れず、庶民のささやかな防衛策に役立っている。

堺市 西村りつえ
本物か作り笑いか見抜く猫

(評) にんげんがとつくに失ってしまった「野生」を、猫はまだ持っている。顔色や雰囲気を読み取れないと生き抜いて行けない。

尼崎市 春城武庫坊
アカサタナハマとつぶやき辞書を繰る

(評) だから、辞書を繰るのは頭の体操になる。電子辞書は探り当てる手間がいらないので便利だが、頭脳のためには良くない。

奈良県 渡辺 富子
わたしはくれないチラシ気にかかる

(評) たいがいはゴミになるようなものだが、くれないと「何の宣伝なのだろう」と気になるし、無視されたようでちよつと不愉快。

河内長野市 針生 和代
陽の入る部屋で鏡は見ないこと

(評) 太陽の光はありがたいものだが、余りにも明るく正直すぎて鏡には向いていない。好きな人との語らいの場も、また同じ。

茨木市 藤井 正雄
好きな人蛍の光以後逢えず

(評) 片想いのままで終った人。いつかどこかでバツタリ、と期待していたこともあったが……。もう逢わないほうがいいだろう。

箕面市 広島 巴子
寺の門出て凡人に直ぐ戻る

(評) 手を合わせ、読経し、住職の話聞いているときは、何やら悟ったような気がしたが、寺の門を出たとたんに元の木阿弥。

大阪市 西藤次男坊
病窓に映るこの世はオモチャ箱
あとわずかに如何に死ぬかを考える

和歌山市 木本 朱夏

どこからか人湧いてきて春ですね
ウエストの緩さ睡魔に襲われる

尼崎市 山田 耕治

里帰りした娘に早く去ねと言う
Uターン母が見守る耕運機

鳥取県 細田 裕花

楽しげにぼこぼこ御飯炊き上がる
コロッケがカラツと揚がる春うらら

札幌市 三浦 強一

アルトからソプラノとなる春の声
亡き父の書架にマルクス柳多留

寝屋川市 籠島 恵子

あさましい自分を晒すいちご狩り
お隣とまた回転寿司で出会うなり

唐津市 仁部 四郎

小袋を一つ余分にお土産屋

お土産の予算は別に寺社めぐり

恋したと言っているのに笑われる
人口三万葬儀屋さんが五軒ある

東かがわ市 川崎ひかり

立川市 柏野 遊花

立川市 森下よりこ

和歌山市 近藤 治子

エコライフ貧乏性が元気づく

堺市 近藤 治子

大阪府 小栢こずえ

森 茜

わたしよりさびしい人とさくら餅

鳥取市 武田 帆雀

平和だな駐在さんが雪を掻く

八尾市 高杉 千歩

逢えるとき逢つておきましょ春帽子

吹田市 早泉 早人

領海を侵犯してるポリ容器

豊中市 吉田あずき

もう少し包めば魅力的な足

母の爪今日は牛蒡の灰汁の色

堺市 加島 由一

出合い別れ飲む口実に事欠かぬ

医者になれ弁護士になれ親心

和歌山市 玉置 当代

確定申告嘘でないから怖くない

ベルトコンベアのように流れてゆく葬儀

堺市 村上 玄也

多国籍競技と呼ぼう大相撲

イエスマンばかり集めて傾く社

橿原市 安土 理恵

上澄みだけとり分けておく終の章

不満足ながらせめての美容液

和歌山市 たむらあきこ

たましいのどこかで喚き声がする

ちつぽけで温いおなじ店に行く

尼崎市 春城 年代

弘前市 宮崎ヒサ子

病み上がりの夫にきつい春風

唐津市 井上 勝視

お雛さま片付け春の支度する

豊中市 荒巻 夢

僕だつてやがて先祖になるのだナ

西宮市 牧瀬富喜子

ピンコロリそんなにうまくゆくものか

浜松市 岡田 史郎

富裕層相手の米を食べている

腰痛と付き合いながら服を着る

藤井寺市 高田美代子

肩も脳もほぐしてくれる一万歩

足して二で割つても後期高齢者

枚方市 海老池 洋

これからとしようわたしの第二章

体温が伝わるような友の文

米子市 政岡日枝子

妻の留守いいなと思う二三日

蜘蛛の巣に私の脳は負けている

海南市 三宅 保州

平凡に老いてでこぼこ低くなり

かといつて人間やめる気はないが

大坂市 柴本はつは

昼の月何を迷っているのです

おいしいもん少しでよろしたのみます

京都府 高島 啓子

鳥取市 土橋 螢

筋道を考えて立つ台所

八尾市 田中トシエ

上弦の月に救急車が走る

三田市 北野 哲男

人間が好きで困いを低くする

大阪府 米澤 徹子

救護所のように赤提灯が見え

大阪府 太田扶美代

今しがた聞いた名前をもう忘れ

知恵二つ合わせ何とか生きてます

藤井寺市 左右田泰雄

頑固だと言われぬうちに妥協する

すぐそこに春を待たせて寒気団

高槻市 木村 徑子

そこのけと言われる側にいる弱者

生きのびてまた逢えました内裏さま

紀の川市 高瀬 霜石

箱の中でもずつとスマイルおひな様

裏切りは駄目だが嘘は許します

弘前市 小谷 集一

理想としては辛味大根ほどの位置

裏切った罪は時効を認めない

大阪府 岸本 孝子

もう一寸待てと言いたくなる夕日

悪口を言わない人と酒を飲む

鳥取市 岸本 孝子

京都府 三宅 満子
梅桜の間で桃が地味に咲く

八尾市 吉村 一風

残高に健康という笑顔あり

東大阪市 笠井 欣子

子の家へたまに行ったが皿洗い

豚まんを下げて気兼ねな満員車

和歌山市 福本 英子

戦友を唄うと笑う認知症

鉦太鼓で貰った嫁とよく揉める

香南市 桑名 孝雄

地下足袋のお出まし万物が芽吹く

雑草は歳に遠慮はしてくれぬ

鳥取市 倉益 一瑠

みんな留守羽根がだんだんのびてくる

悪いことしてないのに前屈み

和歌山市 田中 すず

長電話へチャイムが鳴ってほっとする

助手席でストップかけるよい景色

松江市 相見 柳歩

座ったらあなたの膝と僕の膝

軽くない恋に使った紙の量

西宮市 緒方美津子

レジにきて夫の入れた雲丹を知る

ふるさと展覧会に財布ゆるみ出し

四條畷市 吉岡 修

野暮ったく分厚く生きていてもぬ
いい仲間誰も昔をほくらぬ

松原市 玉置 重人
呼んでくれるのを二時間待つている
美人だが席は譲ってくれませんか

鳥取市 山岡 紀子

外出もゆつくり出来るカレーの日

自信を持って私の野菜すすめてる

砂川市 大橋 政良

割り切れぬ石ころを蹴る現在地

この辺で逃げ場を確保しておこう

三田市 石原 歳子

はんやりとしてると病気がと問われ

食卓が文机になり五七五

唐津市 山口 高明

助手席の妻に耳朶引っぱられ

倉吉市 野口 節子

三畳一間これが私のユートピア

羽曳野市 吉村久仁雄

直球で攻めると敵もフルスイング

唐津市 坂本 峰朗

バイキング目が年甲斐もなくはしゃぐ

鳥取県 竹信 照彦

寝過ごした妻は起こさぬほうがいい

加東市 中上千代子

喪の服を出して今夜は早寝する

大阪市 萩原 大朔

籠いっぱい買って財布を忘れてた

倉吉市 福光 京子

老夫がモンロー歩きひきつれる

福岡県 林 さだき
生き方の違いそのまま共白髪

羽曳野市 吉川 寿美

計が届く昨日笑顔のおとうとよ

京都市 都倉 求芽

片付けて行方不明のものばかり

米子市 小塩智加恵

あと少し小遣いあれば厚化粧

松江市 三島 淞丘

井の中の蛙で井戸の中が好き

西宮市 片山 忠

男のロマン目脂ぐらいいは拭きなされ

東京都 岸野あやめ

アメ玉を渡し婆さん黙らせる

宇都市 平田 実男

亡父には内緒内緒の休耕地

鳥取県 加賀田志延

尖る私撫でたらすぐに丸くなる

枚方市 丹後屋 肇

よたよたのりハビリが踏む春の草

芦屋市 黒田 能子

テレビ見て本を読むのにいい狭さ

西宮市 藤本 直

桜待つ散る涙と見るために

米子市 中井 ゆき

沈黙の裏で心がわめきたす

弘前市 相馬 銀波

海南市 小谷 小雪
シンプルな名刺に気骨込めている

鳥取市 岸本 宏章
清め塩亡母に無礼なことをした

神戸市 田中 章子
鏡見るいやな私を見るために

大阪市 伏見 雅明
留守電に替えてゆつくり湯に浸かる

豊中市 神野宇乃子
スーパールのこごみ たららの芽春の味

堺市 奥 時雄
目標を述べてノルマにあてがわれ

八王子市 川名 洋子
脚力に合わせて欲も捨ててゆく

高槻市 富田 美義
集まった同期の枯れ葉散りもせず

大和高田市 鍛原 千里
ひとり居の膳は他人には見せられぬ

大阪市 奥村 五月
酒飲めぬ彼女を連れて串カツ屋

鳥取県 山下 節子
自分の歯しみじみ感謝豆ひろう

高槻市 片山かずお
どの街も昼は熟女に占拠され

大洲市 花岡 順子
古い二人雄と雌にはなり切れぬ

安来市 原 煩悩児
北帰行我が家の空は鳥の道

和歌山市 田中 みね
この肩も首も要らんとする凝り

米子市 青戸 田鶴
花さかりの君の足にはかなわぬ

奈良市 岩本 浩一
自給率下がり棚田に鉄入れる

東京都 清原 悦子
歩く事忘れかけてる街暮らし

西脇市 七反田順子
出不精の母を誘って寺参り

河内長野市 村上 直樹
足湯からお国自慢も恋の芽も

栃木市 岡野すみれ
八十の恋村中をかけめぐり

紀の川市 宇野 幹子
甘い恋塩っぱい恋もみな宝

大阪府 澤田 和重
誰だろう妻が敬語の電話口

鳥取市 吉田 弘子
フエーン現象鳥取大火思ひ出す

三田市 阪本 藤朗
靴下に注意をされて爪を切る

唐津市 市丸 晴翠
貧しさに感謝傘寿も杖要らず

泉佐野市 稲葉 洋
先輩の卒寿の宴にあやかろう

大阪市 岩崎 玲子
状差しにいつでも読める亡母の文

西宮市 坪井 孝一
美しい所ありますこの日本

堺市 志田 千代
コンニャクに情けをかけて煮込んで

大阪市 田中 滋郎
僕と大西日を背なに影ふたつ

米子市 白根 ふみ
ブランドの苺そのままだがおいしい

藤井寺市 鈴木いさお
酒一合よくまわる日も酔えぬ日も

鳥取市 土橋はるお
居酒屋の女将も客も苦勞人

豊中市 松尾美智代
バリウムの白が見つけた傷ひとつ

高槻市 乙倉 武史
瘦せる秘訣は心配する事だ

羽曳野市 徳山みつこ
大根の種もアメリカ産となる

黒石市 相馬 一花
お茶汲みは不要ボトルで会議中

大阪市 榎本日の出
好きな物好きさだけ食べ胃が重い

今治市 渡邊伊津志
生きるコツ心を空にする努力

和歌山市 松尾 和香
亡夫の愛光る天空流れ星

寝屋川市 富山ルイ子
逝く時は我が子を拝みありがと

誹風柳多留——一篇研究 33

増田 忠彦・山口 由昭
小栗 清吾・伊吹 和男
山田 昭夫
清 博 美

237 にくい事姫声あつてかたちなし

増田 この嫁は、また年もゆかない若奥さん。嫁は家では奥にひっこんでいてあまり表には顔を出さないのがたしなみ。所用で訪ねた先に評判の嫁がいる。婚礼の時にかいま見たばかり、今日はちゃんと拜んでしようと出かけてきたのに、声をかけても横ごしに返事をするばかりで出てこない。小憎らしいが止むをえない。

不快だと嫁をあはせぬにくい事 九三

——この不快は病氣。

山口 賛。「声あつてかたちなし」は文句取のようですが。

小栗 賛。「声あつて形なし」は、易・運勢

判断などで使われる言葉。もしかしたら「三世相」の決まり文句か。

伊吹 賛。「声あつて形なし」は類句多数。出典搜し得ず。

声あつてかたちのしれぬ雪の鷺 九二二八

238 女房の先手へばかあな男行ッ

増田 夫婦連れだつての外出、女房の数歩前をうしろを気遣いながら歩む亭主を「ばかあな」と冷評する。女房に惚れること自体が男として落第のようにいわれた。

にくい事四五丁行と夫婦なり 安六信一
伊吹 賛。現代なら並んで歩くのが普通なのだが。

239 御子そもはんしやうあれ切りの諷

増田 尾羽うち枯らした浪人が世過ぎに、小謡や能のさわりなどを門付けして回る。その乞食能の叙景句。決まって最後は「御子孫も繁盛し、御寿命もながく……」の文句で締めくくつたものらしい。

この詞は多くの小謡の決まり文句であつたらしい。

かんばつた諷御子孫も繁昌 二二六 初四

御子孫も繁昌おつとよし 傍三二四

小謡で来る浪人ハ元手なし 初四二

やぶれたるおんぼうを着て諷出し 八三八

山口 賛。「繁昌あれ」というのが諷の切り

ですか。

小栗 賛。「御子孫も繁昌」という文句だけ、それっきりの文句しか言わない諷、ともとれるが……。

240 花のくれ身について皆こうまいれ

増田 花見のあと夕暮、連れ立って遊所へ繰り込もうとする際に吐く芝居がかりの一言。「さあ、みんな身どもについてまいれ」の意だと思ふが、どの芝居に出る台詞かわからず、乞うご教示。

身に付いてコウ参れ、小便所 七五14

身に付いてかう参れ、松洞寺 四四22

山口 賛。大将格が先立つ時にはよく使うせりふと思うが、外題特定出来ず。この句の場合に女に囲まれているような気がします。

小栗 賛。単に芝居がかっている、というだけでよいと思うが。

241 御内儀と後家ときかれた事でなし

増田 旦那さまが近所の後家さんと通じたらしい。お内儀が後家さんと対決して、あの淑やかな口から出たかと驚く罵言でまくし立てている。

山口 賛。ドラマチックです。

242 まつ黒なやうじを捨てたゝきつけ

山口 この句、西原柳雨は初鉄漿の項に入れ、「似合うたなどとなぶられて」と注をしているが、賛成である。11丁の175句や左の句にあるように娘や嫁が初鉄漿をなぶられて恥ずかしかる句は多い。

かねの札どりや見よふぞといやがらせ

わらわれて来やしやうと出るかねの札

鉄漿の礼覚て居なと帰る也

五28 九1

「捨てて叩き付け」の表現がやや激しいので、他の解もありそうだが、若い女性が恥ずかしかると意外に激しい行動に出ることがある。この句は鉄漿を付けたばかりの顔をなぶられた若い女が、楊枝を叩き付けるようにして逃げる場面と思う。

小栗 礎稿のおっしゃるように、初鉄漿の恥らしに於ては「捨てて叩き付け」が似合わない。また、文法としては、「捨てる」+「叩き付ける」であるから、楊枝を捨てた上で、もう一度叩き付けるという動作はおかしいように思う。「叩き付ける」を「幼児の背中を軽くたたいて寝かしつける」(「日」)の意とすると、お歯黒の最中に赤ん坊が泣きだしたので……、という情景にはなるのだが……。

伊吹 小栗説賛。

口に芋をくわへて母ハたゝきつけ

安元満2

243 うなぎやに囲レの下女けふも居る

山口 かこわれは、【被囲】囲われ者の略。「かこいもの」に同じ。川柳では僧の外妾をいうが通例。(「江戸語の辞典」)

鰻は昔から精力の付く食べ物と言われ、男が鰻屋に入れば、その後のことは承諾の意といわれるほどである。主題句は囲われの下女が今日も鰻屋に鰻を買いに来ているのである。持つて帰ると食べるのはもちろん坊主とその妾。お盛んなことである。「今日も」が憎い。

うなぎ売女房をなぶり／＼売

二七27

囲女ハ鰻一串猫の腕

八四16

かこはれの前で一声うなぎ売

四一23

全員 賛。

244 ニヶ村をぬけからにして公事をする

山口 争いや事件が村に起こり、奉行所などに訴える場合は馬喰町の公事宿に代表を送って訴訟をしたものである。その村専属の公事宿があったという。

しかし、主題句の場合はニヶ村抜け般であるから村中総出の公事と見える。水争いや境界の争いなど二つの村全体にかかわる訴訟で、代官所などへ大勢が押しかけた情景ではないだろうか。

押出して負公事となる境論

と玉上55

全員 賛。

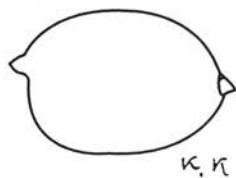
公事済てけふハ神事と觸る也

ケイ一五34

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「沖」 鈴木公弘選

この沖の先に夢見たユートピア
豪華船セレブを乗せて沖に居る
沖の波くよくよしては生きられず
ひたひたと沖から満ちてくる齡
金婚を済ませ二人は沖へ行く
イカ漁の沖に銀座の灯が燃える
迷うては沖に沈めた恋ころ
沖ばかり眺め幸せ取り逃がす
うず潮を逃れて沖へ出る決意
不況風霞む沖から吹いてくる
沖までは私の舵で乗り切ろう
沖はるか泳ぐ親父の後を追う
癒される静かな沖と向かい合い
沖に出てカメは島を振り返る
沖にいる親子に夕日辛からう
沖に出た子が気にかかる春霞

鳥取市	加藤 茶人
大阪市	古今堂蕉子
羽曳野市	三好 専平
神戸市	山崎 武彦
大阪市	松尾柳右子
唐津市	井上 勝規
吹田市	木下 敏子
犬山市	金子美千代
西宮市	亀岡 哲子
豊中市	吉田あずき
米子市	野坂 なみ
豊中市	水野 黒兎
大阪市	榎本 舞夢
鳥根県	伊藤 寿美
鳥取県	飯野 葛子
堺市	加島 由一

「沖」 西口いわゑ選

人嫌い沖へ沖へと出てしまふ
沖合いにイーリス艦だ気をつけろ
哀しみの深さを沖へ沈ませる
流人の悲話今も遠いよ沖ノ島
太陽を呑み込み沖は詩を作る
人喰い鯨が都会の沖に潜んでる
沖合をいかなご漁の船が行く
暮れのこる沖に帰らぬ兵の魂
罪を呑む沖はやさしい線になる
沖の船お伽噺のつづきかも
海鳴りの沖見つづける拉致家族
沖はるか何を眺むか龍馬像
水平線あそこきつと竜宮城
蟹気楼ドンキホーテが舟を漕ぐ
バカヤローと沖に叫んで恋終る
うず潮を逃れて沖へ出る決意

藤井寺市	高田美代子
宇部市	平田 実男
松江市	川本 畔
神戸市	山口 美穂
唐津市	仁部 四郎
堺市	柿花 和夫
東かがわ市	川崎ひかり
神戸市	山崎 武彦
大和高田市	鍛原 千里
豊中市	吉田あずき
横浜市	菊地 政勝
高知市	小川てるみ
四條畷市	吉岡 修
枚方市	伊達 郁夫
吹田市	穴吹 尚士
西宮市	亀岡 哲子

沖はるか何を脱むか龍馬像
沖を見る位置に朱墨の墓がある

沖を焦がして漁火は夏色に

いくさまだ許さぬ沖の波がしら

沖は未だボーカーフェイス崩さない

沖漕いだ人の話にある魅力

磯釣りの土産に沖の魚買う

沖に出て羽根を伸ばしているカモメ

沖へ出た舟の灯台守になる

父の歳こえて深さを知った沖

沖へ出てイヤとは言えぬゴムボート

雲一つない沖を見て油断する

幸せは沖になかった手暗がり

沖の時化眺め漁師は酔っている

手振りまで添え沖釣りのお裾分け

生臭い風が沖から吹いて来る

菜の花の沖にただよう死生観

老人は岸若者は沖を見る

軍艦は描かぬサンゴ礁の沖

秀句

沖に出て征服をした逆さ富士

凪いでいる沖の妥協が恐くなる

群青の沖に溺れてゆく大志

軸吟

転職の背広を沖に見てもらう

高知市 小川てるみ

出雲市 竹泊ちかし

鳥取市 松岡 照美

熊本市 永田 俊子

大和郡山市 坊農 柳弘

岩出市 村中 悦男

大阪市 伏見 雅明

大阪市 大川 桃花

鳥取県 平木 公子

堺市 宮本かりん

愛知県 早川 遡行

大阪市 榎本日の出

河内長野市 山岡富美子

高槻市 乙倉 武史

大阪市 升成 好

倉吉市 野口 節子

寝屋川市 籠島 恵子

京都市 高島 啓子

八王子市 播本 充子

弘前市 今 愁女

美作市 福原 悦子

東大阪市 森下 愛論

果てしない沖少年の視野にある

磯釣りの土産に沖の魚買う

沖合に出てから孤独恐くなり

ひょうたん島はつたり出合うかも知れぬ

郷愁をどっかり乗せる沖の船

沖までは私の舵で乗り切るう

やみくもに沖に向かって泳ぎたい

薬一本託して沖へ送りだす

原点が見えぬひとまず沖へ出る

食材も毒も沖からわんさかさ

人生は沖へ漕ぎ出すひとり旅

沖ばかり眺め幸せ取り逃がす

流し雛姿が消えるまで祈る

沖に浮く袋はきつと琴の爪

沖合へ花を咲かせに参ります

国境の沖を自由に飛ぶカモメ

沖に出るまでは食べてた吉備団子

父ちゃんにメール習わせ沖に出す

軍艦は描かぬサンゴ礁の沖

秀句

遠い遠い沖に向って君が好き

菜の花の沖にただよう死生観

沖に出て人も地球の泡と知る

軸吟

落日の沖へふわりと吸い込まれ

弘前市 斉藤 嘉

大阪市 伏見 雅明

鳥取市 田村 邦昭

大阪市 森田 明子

東大阪市 北村 賢子

米子市 野坂 なみ

雲南市 毛利 幸

鳥取市 夏目 一粋

鳥取市 福西 茶子

堺市 矢倉 五月

和歌山市 喜田 准一

大山市 金子美千代

八尾市 生嶋ますみ

西宮市 山本 義子

京都市 高島 啓子

和歌山市 福本 英子

大阪市 谷口 義

堺市 加島 由一

八王子市 播本 充子

西宮市 坪井 孝一

寝屋川市 籠島 恵子

箕面市 広島 巴子

織る

安藤寿美子選



機之音音栄えた鬼瓦
梅さくら菜の花も入れ春を織る
かげろうに織る恋の色花の色
いたいけな少女が織ったカーペット
織り方の構図が違う嫁姑
ロケットが織ったニットを着せられる
美しい人生模様織るふたり
織りあげて模様のちがう妻とほく
歳月をゆるり織り込む女紋
運命を織り成す明日へ嫁ぎます
トンカリ鶴は一途に愛を織る
春の絵を描こう温もり織り込んで
反対もでると織り込みずみの案
愛憎を染めて紡いで機を織る
嫁姑歳月重ね織る平和
三寒四温織りなす春の植物園
織り交ぜた話がどこか自慢めき
接ぎ合わせ土器に織り成すロマンあり
織女の哀歌野麦峠をバスでゆく
嘘ひとつ織り混ぜ話盛り上げる
火宅背に煩悩の機織りつけ
西陣に響く機音四季を織る

重人 照彦 螢 扶美代 典子 忠 敏子 黒兎 柳弘 美義 みつこ 茂代 かずお 宇乃子 雅枝 シマ子 かつ子 千代 隆盛 富子 信子 英旺

機之音町屋に響く京の辻
曼陀羅を年月かけて織りあげる
名人の機織る音に隙がない
休田のじゅうたんを織るれんげ草
五線譜に明るい春の機を織る
七夕になると織姫落着かず
そんなことと既に織りこみ済みである
櫛爪で西陣機へ挑む技師
灯は一つ父筵織る母草履
生きのびる喜怒哀楽を織る日記
春風に色を織りなす花時計
人生の綾を織りなす共白髪
延命無用ちいさな旗を織っている
小咄も織り込みスピーチ盛り上げる
縦糸に孫もつないで布を織る

佳 人 夢ひとついちず 神さまの織物 地 天 軸 経糸は知恵緯糸は想い込め

種

穴吹 尚士選



早く芽を出せと毎日声をかけ
春近しコロコロ笑う種袋
引出しの奥で芽を出す温暖化
芽の出来ない種にも水を忘れない
蒔いたこと忘れた頃に花一輪
種まいて芽の出る頃に来ると母
たんばの一气呵成に風にのる
種芋が日光浴で謀反する
揉み手して話の種のつきぬ人
口利きの種も仕掛けもある政治
ポケットで心配の種駄々こねる
癪の種りハビリの豆逃げまわり
KYと呼ばれ笑いの種にされ
心配の種がようやく身を固め
苦勞の種抱えて母は笑った
幸せの種をこっそり蒔いておく
まだ若い証拠に火種抱いている
火種かかえ夜行列車に飛び乗った
生甲斐へ恋の火種は絶やさない
古里に火種みつけた村おこし
神さまがテロの火種をまきちらす

ルイ子 茶里子 千壺 房枝 哲男 古拙 一花 ばつは 准一 雅明 倫子 正和 美十代 勇治 悦子 敏子 富子 朝子 とし子 修

種明し聞けばなるほど種がある
種明かしすればなんなんだそんなこと
すぐ種わかる手品でうけている
華やかさがないが雑種の逞しさ
血統を越える雑種が世を変える
自己主張薄められゆく交配種
温暖化やがて人間絶滅種

夫との喧嘩の種は酒の量
喧嘩の種になりそうなので伏せておく
隣からもらった火種で喧嘩する
ふたりでも喧嘩の種に事欠かず
訝いの種は境界石の位置
ボケットの笑いの種も尽きてくる
友見舞う笑いの種を二三つ
お笑いの種用意して母見舞う

雑草と呼ばれるなんて知らぬ種
おばちゃんの話の種はエンドレス
玄関をあけて騒ぎの種がくる
種明かしつつ大人になってゆく
ストレスの種まき散らす女と居る

種明かしすれば傷つく人が出る
吉本へ笑いの種を食べに行く
農政を非難しながら種をまく
どの種も早く芽を出せ入社式

種明かしすれば傷つく人が出る
吉本へ笑いの種を食べに行く
農政を非難しながら種をまく
どの種も早く芽を出せ入社式

公 誠

章 子

恭 昌

玄 也

勝 視

東 吉

秀 四

まみ子

ヒサ子

典 子

時 雄

さだき

強 一

浜 丘

(矢)五 月

充 子

みつこ

日枝子

明 子

弘 風

正 雄

ミツ子

吉田弘子

こっそり

最上 和枝選



乾杯の前にこっそり試飲する

爛冷まし飲んだ母を知っている

義母と住むこっそり爪を研いでいる

こっそりととした善意にも花が咲き

こっそりと買ったはいいが窮屈な

額の裏こっそり探してみいつけ

茶髪の子親の知らない恋してる

鍵かけてこっそり古い手紙を隠してる

寝てる間にこっそり剥がす化粧の皮

こっそりと派手なブラウス持っている

こっそりと腕を上げたバチの技

こっそりと幾つも持っている財布

糖尿病こっそり食べる甘いもの

他所の果へ托卵をする不如帰

こっそりと夫婦内緒のジム通い

こっそりと書き換えている遺言書

こっそりとやったチョイ悪やみつきに

揉め事はこっそり母が始末する

こっそりと盗んだハート持て余す

へそくりの百万円をどうしよう

こっそりの話に耳の栓を開け

小雪

千代

洋子

房枝

(若)和子

(西)和子

日の出

孝一

睦子

章久

明子

のり子

信子

周子

慕情

(若)玲子

彩子

節子

扶美代

圭一郎

弘風

典子

ひっそりと面会をする塀の中
姑の小言こっそり抽き出しへ
こっそりが内部告発されあわて
こっそりと暮しても税はくる
こっそりと笑って皺を確かめる
根回しは伏せて成功子の手柄
お茶席でこっそり正座崩したた
お使いの幼児を尾行してるババ

割箸の袋に書いてある仲間
こっそりと腕を磨いている野心
こっそりと左の耳で聞く噂
こっそりと書き替えていた製造日
機密費をこっそり貯めていたワイフ
こっそりと僕の寿命を神に聞く
こっそりと辞書引いてから子と対峙

こっそりと労ってやる齢の順
こっそりと息子の財布確める
知ったか振りあとでこっそり辞書をくる
お土産は買わぬこっそりフルムーン
こっそりと買った妻への古希祝い

お忍びで来たのにマイク向けられる
球根といっしょに嘘も埋めました
こっそりと妻のへそくり足しておく
こっそりと派手めに決めた試着室

こっそりと妻のへそくり足しておく
こっそりと派手めに決めた試着室

古 拙

英 子

ちかし

茶 子

昌 鼓

裕 之

加 お里

蜂 朗

奮 水

朝 子

瀬 丘

遡 行

恭 昌

照 彦

雅 枝

螢

千 歩

菜 摘

妻 子

章 司

充 子

霜 石

初山隆盛

初歩教室

題一化粧

三宅保州

血と心の通っている句を

麻生路郎師はその著「川柳とは何か」で「いのちある句を作れ」「句はその人の心である」と名言を遺されているのは有名です。

私は、この名言を「血と心の通った句を作ること」だと解釈しています。

花は美しい、太陽は明るい、海は広い、孫は可愛い、酒は酔うもの、政治は汚い等々、このような当たり前の概念で作った句に、血や心が通っているでしょうか。

また、手垢にまみれた川柳の流行語的な言葉や、氣をてらった取って付けたような言葉で意図的に着飾った句が、選者や読者の心を打つでしょうか。

そんなことに惑わされず、自分の心血を注いだ句を作ること心掛けて下さい。佳句はそこから自ずと生まれてくるものです。

【添削・批評句】

次の二句は差別的過ぎるので少しソフトに。

原 不美人は何を付けても効めなし 和

添 美人ではないが化粧は身だしなみ

原 厚化粧無駄な抵抗悟るべき たん吉

添 厚化粧無駄な抵抗だとしても

次の四句は定型に直したい。

原 あどけなさ残して紅さす卒業生 俊子

添 あどけなさ残して紅を差す娘

原 口紅をつければ愛大近寄らず 洋子

添 厚化粧したら愛大近寄らず

原 はみ出した口紅で笑う女の子 ちづる

添 はみ出した紅も愛嬌女の子

原 化粧する気配見せずすねている 菜摘

添 化粧する気配も見せず拗ねている

原 化粧が我を変えるか四つに組む 文代

振りかぶりすぎてリズムもぎくしやく。

添 変身へ四つに組んで化粧中

原 厚化粧遅れ咲く恋隠し事 ミヨノ

詰め込みすぎて助詞がなくリズムに欠ける。

添 遅咲きの恋じきめかす厚化粧

次の二句は視点を少し変えてみませんか。

原 塗ってゆくとびに私の顔が消え かずお

添 化粧落としゃつと私の顔になる

原 泣きたくて厚化粧するいじらしさ ヒロ

添 泣きたいのを我慢している厚化粧

次二句はネガティブ（否定的）すぎるので。

原 化粧では化かし切れない年になる 正二

添 女です歳相応に化けている

原 化粧して女でいたいみたいですこし すみ子

添 いままで女でいたい紅を引く

原 どう化ける六十代に見せる為 芳子

六十代に限定しないで詠みたい。

添 十歳は若く見せたく化けている

原 五つ目の駅でばつちり化粧終え 美智代

添 降りる駅まできつちり化粧終え

原 お化粧が降車間際に出来上がる 和代

逆に「降車まで間に合わず」的な詠み方も。

原 車内化粧四方の視線何の其の 隆彦

添 視線など気にせず車内化粧中

原 口紅に魔法の力宿ってる ポン吉

添 口紅に魔法の力借りている

原 お誘いに化粧も濃く紅を引く 靖博

添 お誘いにちよつと濃い目の紅を引く

原 お化粧がちよつと強気で自己主張 吉比古

添 お化粧もちよつと濃い目に自己主張

原 紅の色変えて一日凛と生き タカ子

紅を変えた訳を強調したい。

添 心機一転口紅の色変えてみる

原 男性も若者向けに化粧品 稔

添 男性用コーナーもある化粧品

原 ヘチマ化粧につかう母は古い きぬ子

添 老いたりといえども母の化粧水
原 汗かきで口紅だけで出勤す 綾 乃
添 汗かきを口実にして化粧せず
原 休日は何もつけずに化粧水 光 子
添 休日には肌も休まず化粧水
原 化粧して心も素顔かくしてる 治 子
添 本心も素顔も隠してる化粧
原 お化粧の厚さをくぐる紫外線 志 延
添 紫外線と日焼け止めとのせめぎ合い
原 お見合いの日は言葉にも厚化粧 幹 子
添 お見合いの席は言葉も厚化粧
原 お化粧はあなたのためよと云われても 滋 郎
添 お化粧はあなたのためと言われても
原 お化粧が上手で仮面外せない 武 彦
添 お化粧が過ぎて仮面を外せない
原 化粧した顔が人間かけ離れ 律 子
添 化粧した顔が私とかけ離れ
原 化粧した言葉耳には心地よい 孝 明
添 化粧した言葉は心地よいけれど
原 化粧した言葉はどこかどかしい 柳 歩
添 化粧した言葉の真意はかりかね
原 化粧箱に収まりメロン行き先は イ セ
添 化粧箱に納めて嫁に出すメロン 昇
原 締まり屋も白粉だけはほんぽんと
添 締まり屋も化粧費だけは惜しまない
原 化粧され介護の姑が若返る 絹 子

添 介護士の化粧で嬉しそうな姑
原 泣き・笑ひ皺は勲章かくさずに 瑛 子
添 勲章と思えば皺も苦にならず
【少し工夫すれば佳くなる句】
原 耐えた皺笑った皺も化粧パフ 起世子
添 笑った皺耐えた皺にも化粧パフ
原 鏡見てウインクしてる薄化粧 弘 泰
添 薄化粧したらウインクする鏡
原 職退いて化粧と服を控えめに (吉) 節 子
添 職退いて化粧も服も控え目に
原 化粧品いっぱい並べまだ利かぬ かずみ
添 化粧品いっぱい並べまだ効かぬ
原 あの世へは化粧したまま行きたいが みち代
添 あの世へも化粧したまま行きたいが
原 化粧塩やき鯛の尾が跳ね上がる 信 子
添 焼き鯛の尾が跳ね上がる化粧塩
【佳句】
修二云終え人も景色も春化粧 紀 雄
狸でもさちんと化けてから出ます 堅 坊
トンネルを出ると見事な雪化粧 すみれ
雪化粧して富士らしい富士になる 亜希子
男の化粧まじまじと見る好奇心 徑 子
男だから心に化粧するんです 實
どちらへと鏡微笑む薄化粧 義 章
派手かしら問うばあちゃんの薄化粧 (彌) 節 子
化粧品たんと吸い込む深い皺 像 山

化粧室一人相摸のにらめっこ
折角の化粧も空し花粉症
じつと待つ妻の化粧が終わるまで
受診日といえども化粧抜かりなく
化粧せぬ自信の姉は母代わり
酔う程に心の化粧落ちてゆく
お化粧を落として肩の荷も下ろす
化粧品売の程並べ自己主張
化粧するうぬほれ鏡見たまんま
化粧してヒロインになる女達
疑わぬ明日へたつぷり化粧水
程良い化粧心がけてはいるもの
ニキビ面アストリンゼン使いだす
泣きはくろ隠して笑い墨子つけ
お化粧も偽装のうちと知る寝顔
バックした顔見て孫が泣き止まぬ
さかさまにして使い切る化粧水
【今月の推せん句】
化粧塩施し魚にファンファアレ 高木道子
化粧塩とファンファアレの対比が効果的。
若さこそ最高級の化粧品 坂 裕之
若さに勝る化粧品無し。着眼が良い。
引き出され飛鳥美人は化粧中 広瀬房江
誰も思いつかなかったお見事な発想。
【私の句】家計簿の聖域にある化粧代
(登載洩れの方は役員が添削等して返送します)

秀句鑑賞

同人吟 牛尾 緑 良

— 4月号から

ここ数年作句に呻吟しています。辛うじて

川柳塔わかやまの自選句を提出しているものの、違う違うと思ひながら言葉を並べているだけの様な気がしています。

新聞川柳の選をしています。大会や句会に参加することも無い方は何年経っても自分の世界を抜け出すことが出来ないでいます。

一〇句ほどの選の中では添削もままなりませんが、カルチャーセンターでの勉強は言葉のキャッチボールをしながら句が完成する工程が見えて楽しいものです。自分の句が出来なくて悶々とするこの時にいただいた鑑賞を機会に、再挑戦をしたいと思っています。

押し花にして知るピーマンの六弁花

高 島 啓 子

日ごろさわたり食べたりしているピーマンの花に六弁があることまでは知りませんでした。親しい方の秘密を見つけたような思いです。知らなかった一面を知ることにより身近に感じるような句です。

一九できぬ救急車は瀕死

徳 山 みつこ

命綱のつもりで掛ける一九番。救急車は来ても病院に収容されなければ意味がありません。収容者の四〇パーセントは救急に該当しないとのデータもあります。

かびが出た餅だ安心して食べる

岸 本 宏 章

添加物の無い証拠。青カビだつてベニシリンの原料だからと思うと、親近感さえ持つ事が出来ます。賞味期限の表示は無くても自分の五感をフルに利用して自分を守りましょう。

ふられると美女じゃなくなる順位付け

高 瀬 霜 石

「美しい」とか「好ましい」の判断は多分に主観的なものです。好意があればより美しく感じるものですが、振られるという現場に直面すると思ひは急激に褪せてしまします。深層心理って言うのでしょうか。

神様がいるなと思う生かされて

澤 田 和 重

手術や入院を体験すると生きているというより生かされていることを感じるがあります。「寿命だから」と言い切れない何かを感じた時の一句です。

目刺し焼きメタボの夕餉笑顔の輪

岡 本 花 匠

四月からは健康診断の項目に腹囲の検査が加わるとか。大きなお腹は元気で楽しい家族の象徴と、屈託なく食事を楽しむ姿こそ健康的な気もするのですが。

端っこのコラム釘づけする叫び

吉 田 幸 子

コラムには編集者の言いたいことが詰まっています。ここから読みはじめる愛好家さえ居るのです。

古稀はそこバソコン居間のアクセサリー

山 田 葉 子

古稀であつても今日日バソコンぐらい操作出来なくてはとの気概はあるものの、気持ちの空回りだったかも知れない。現実がそこにほこりを被りそうな状態で置いてあります。

辛酸を舐めた芸だな笑わせる

神夏磯 典子

「芸人」には多芸な人、芸に巧みな人があります。芸能人（タレント）は才能のある人の意味だとか。苦勞をしているだろうことは認めますが、芸で勝負出来る人はどれだけ？

メガネはずして立ち食いの駅うどん

西川 更紗

発車までのわずかな時間に掻き込む立ち食いの旨さと忙しさが「メガネはずして」に集約されています。わずか十七音字の川柳で表現出来るのは長編小説のような説得力ではなく、このような一点にスポットを当てた表現だと思えます。食べたとも見たとも言わずに情景が浮かんできます。

暖かくなれば会おうと皆にテレ

古今堂 蕉子

年賀状にある「今年こそ」は実現したことのない約束ですが、電話での誘いには実現出来そうな予感があります。こたつとテレビのお守りから抜け出て、春の日差しの下に立つとお友達にも会いたくなります。喫茶店でも句会でも誰かが誰かが待つてくれて居そうですね。

限られた器で謳歌する金魚

津守 なぎさ

悟りを開いたような金魚とそこに至っていない自分を比べて、とまで行かなくても、今を一生懸命生きる姿に拍手を送ればそれで良いではありませんか。

友達もやっぱり少しヘソ曲がり

森田 明子

掛け違ひそのままにしておくボタン

井丸 昌紀

勿論自分もヘソ曲がりであると認めて、だから気持ちを通じ合うのだと納得出来るのです。ボタンの掛け違ひを許せるのも同じ。うわべだけのお付き合いでは親友とは呼べません。「お互いに」が親友の最低条件です。

おだやかな顔だったよと電話口

横山 捷也

先週同級生から電話。「弟が彼岸に旅立ちました」と。彼女の弟さんも透析30余年で私以上のベテランでした。「これで楽になったと思います」の添え書きに「おだやかな顔」とは違う身近な思いを感じました。母は96歳で家内やヘルパーさんの介護で元気にしています。生きることの本質を考えます。

賃上げを求め労組がらしくなり

山本 蛙城

春闘があります。昔は電車やバスのストが象徴のように行われていました。豊かな時代になったのか闘争の文字も見なくなりました。この時期、組合の名を染め抜いた旗など並んでいると少し当時を思い出します。

愛猫が安定剤になっている

雪本 珠子

あなたは猫派ですか。犬派の方もあるでしょうが、お花でも趣味でも安定剤は必要です。この複雑な時代ですから。若者がケータイを離せないのも同じ理由なのでしょうか。

春はあけぼのすこし女をとり戻す

山本 希久子

春は息吹の季節、生気を取り戻す季節です。歳を重ねることとは別に自分に漲るものを感じて新しいことに挑戦する勇気が生まれます。「女をとり戻す」気は何にも勝る力です。

春を待つ心は昔より強い

浅野 房子

同じ春の句にやはり元気をもらいました。川柳の本質を求めてまた旅を始めます。

水煙抄

秀句鑑賞

— 4月号から

小川 注 湖

立つてなさい むかし先生儂かつた

安藤 なつこ

なつこさんの昔はいつ頃だろう。私の昔は戦時中、廊下に立たされたことを思い出している。善いことと悪いことをしっかりと教えて貰った。今の先生も恐れず叱って欲しい。

腕時計外して主婦の手に戻り

吉村 幸

穏やかな春の日、明るい服に着飾ってルンルン気分、気の合った友と美術館に特別展を見に行った。帰りはお洒落な喫茶店で雑談高笑い。帰ったら時計を外して台所、子供たちは食卓に座っている。主婦に戻って忙しい。

カレンダーメモたしかめて動き出す

大久保 伸子

同感、寝床の中からカレンダーを眺め、今日の予定を確かめ起き出す。用意終っていたつもりがふと追加する物があつて慌ててる。

大食がもて囃される世の不思議

小池 幸子

テレビ放映のギャルたちの大食い競争に怒りを覚えた。食べ物のない戦中戦後、世界中には内戦、紛争、不作で八億の人が食に飢えている。無理食いして健康に良いはずがない。この番組に教育の文字があるのか。ディレクターの心情を疑う。私もおかしいと思う。

お手洗い夫はやさしくバッグ持つ

土屋 起世子

退職後、女房の内助の苦勞に感謝し、少し財布をゆるめ観光地巡り。あちこち歩いて手洗い所が目に入った。これ持つてよ！。バッグを持って立つ夫、微笑ましい。

義母の前大きな魚そつとおく

遠藤 那珂子

優しい良い嫁御さんだ。大きめの魚をそつとおく。それが自然に出ている感謝、おばあちゃんも婿殿も心で見ている。円満な家庭を覗いた気がする。

生き残る術を草花見せてくれ

松浦 登志子

路肩や小道の雑草や花は踏まれても踏まれても起き上がり芽を吹き返し逞しく生きる。人間もへこたれない芯の強さを持つて、草花のように再挑戦し生きる努力が必要な世情だ。

どっこいしょ立てばあれこれ用があり

菅田 かつ子

どっこいしょ立てば……いやあれこれ気になるものが眼について、どっこいしょと掛け声で立ち上がらせているのではないのでしょうか。声を出すことはバランスをとる上に大切なことです。まだまだお元気に。

白バイが後からビタリついて来る

見山 温子

バックミラーに白バイが写りびつくり。信号無視はしていないはず、何故。でも警笛は鳴らさないな。車線が変わって追い越した。安全運転の心が引き締まるよい薬になった。

忘れぬようメモした紙をまた探す

田口 清帆

忘れたら困るからメモして置いたのに、その紙をあれこれ探している。かなり真剣に探している姿が見える。同感の人多いようだ。

袋の中で雑談をするくすり達

吉川 弘泰

なかなか風を見て面白い。病院の診療科を梯子すると薬も種類多く処方して貰うから、薬袋が買ひ物袋位に膨らむことがある。なるほど薬たちは何科の処方ですか、どこを直すのですか、と話し合っているかも知れない。私もかなり薬を処方して貰っている一人。

第80回 奈良県川柳大会

日時 6月22日(日) 12時開場

会場 地域交流センター・リーベルホール

TEL 0745-33-3000

JR. 王子駅・近鉄. 新王子駅すぐ北側ビル

兼題と選者 締切 13時30分(各題2句)

「耳」(やまと番傘) 植野美津江 選

「まだ」(若貼川柳会) 今井 一竿 選

「語る」(川柳平城の会) 杉野まつ子 選

「その果てに」(やまと番傘) 菱木 誠 選

(読み込み不可)

「大きい」(奈良番傘) 杉野 睦朗 選

「包む」(生駒番傘) 松本 柁子 選

「さす」(川柳塔なら) 米田 恭昌 選

会費 1,500円 大会誌呈

懇親会 3,000円 当日受付

欠席投句先 〒636-0144

生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-24

定額小為替1,000円同封、中原比呂志宛

6月15日着 TEL・FAX 0745-75-3655

主催 奈良県 川柳連盟 川柳塔なら

後援 奈良県 奈良新聞社

20周年記念及び合同句集発刊記念

益田川柳大会

日時 6月15日(日) 締切12時

場所 益田市民学習センター

(JR益田駅歩10分)

事前投句(2句)「蛙」 渋谷久代 謝選

当日投句(2句) 席題なし

「傘」 新家 完司 選

「注ぐ」 佐々木 裕 選

「焦る」 金築 雨学 選

「歩く」 三島 淞丘 選

「青」 松本 文子 選

「人形」 長谷川博子 選

参加費 2000円(昼食代含む)

欠席投句 1000円 5月31日(土) 必着

投句先 〒益田市須子町7-10

渋谷由紀子

TEL 0856-22-8123

FAX 0856-23-0001

平成20年度 親善川柳

誌上川柳大会

締切 5月30日(当日消印有効)

応募用紙 所定の用紙または便箋

郵便番号・住所・氏名・電話

番号を明記

投句先 〒078-8341 旭川市東光1条10

丁目2-7 庄司昭志登 方

親善川柳大会事務局 宛

電話 0166-37-2582

課題(各題2句)

「真」(読み込み可) 斎藤大雄 選

野崎麗舟 選

「栄」(読み込み可) 三浦強一 選

播本充子 選

投句料 1,000円(切手不可)

発表誌呈(9月号)

賞 合点15位まで

各題1位は句入り楯贈呈

主催 旭川川柳社

第9回 生駒市民川柳大会

日時 7月20日(日) 12時30分開場

会場 生駒市芸術会館「美楽来(みらく)」

〒630-0246 生駒市西松ヶ丘2-20

(近鉄. 生駒駅から北西へ約400m)

電話 0743-74-1101

事前投句「力」 生駒番傘 吉川 卓 選

ハガキで1句 6月20締切り

宿題 締切 13時30分(各題2句)

「繁る」 川柳瓦版 辻 業 選

「揺れる」 川柳塔社 長浜美龍 選

「角度」 ふあうすと 福田秋雄 選

「ほっといて」 番傘わかくさ 藤原一志 選

「ざわざわ」 奈良番傘 松田俊彦 選

会費 1,500円 発表誌呈

懇親会 4,000円(事前申込)

事前投句先 専用ハガキの他普通ハガキで

生駒市芸術会館「美楽来」

問合せ「美楽来」又は生駒番傘川柳会事務局

電話 0743-70-0220 吉川 卓

主催 生駒市・生駒市教育委員会・生駒番傘川柳会

後援 全日本川柳協会・番傘川柳本社 他

超主観的な随想

川柳は現代詩を超えた

早 川 清 生

前から憤懣を覚えていたことがある。新聞の見出しや書店の掲示など、なぜか文芸各ジャンルの序列が、詩、短歌、俳句、川柳の順になっている。それぞれの作者どうしも、この順序の逆にコンプレックスを持っているように私には見える。作品の個々によりあしがあるのは当然にしても、ジャンルによる上下などあるう筈がないのに、だ。

本稿では戦後の混乱と再出発の時期を中心に、文芸各分野のかかわり合いについて述べたい。それぞれが今日ある基礎を築いた重要な時期であり、ひとつの原点になったからだ。

俳句第二芸術論など

私がまだ川柳を始めていなかった終戦まもなくの頃、桑原武夫の第二芸術論や小野十三郎の奴隷の韻律論が現われ、俳句や短歌の存在を否定して、わが国在来の短詩型に拠っていた作家たちを震撼させた。当時、挙げて戦

争を賛美し協力してきた作家たちとその戦中作品、いわば負の遺産である戦争体験とどう対決し、新しい戦後の文芸をどう構築するかはどのジャンルでも緊急かつ最重要の課題であった。そうした中で、敗戦の翌年早々から、小田切秀雄や臼井吉見などがなぜか俳句、短歌への追求を始めた。私はまだ薄っぺらであった新聞の文芸欄などで推移を見ていたが、国中が戦後の反省期というか、一億総懺悔が叫ばれていた時代ということもあって、これらの追求はおおむね神妙に受けとめられ、それぞれ一定の対応と改善がなされた。

否定論の中でもっとも世間的な関心を集めたのがフランス文学者である桑原武夫で、彼は俳句のいわゆる有名作家と素人の作品を十五句並べ、それだけでは必ずしも優劣が確定できない状況から、大家の価値は作品によるものでないという結論を導き出し、俳句の近代性を否定した。私はかなり乱暴な立論だと思いが、当時の社会的な風潮に乗じて異常な反響を引き起こし、掲載した「世界」十一月号は大増刷したといわれる。詩人小野十三郎は「短歌や俳句の音数律に対する、古い生活と生命のリズムに対する、嫌悪」を表明して「五七の魔」を奴隷の韻律とし、短歌的叙情を徹底的に攻撃した。

私は、彼の「抒情（リズム）は批評だ」と

いういわばきめ手の言葉が十分理解できないので、金時鐘の本（「わが生と詩」岩波書店）を読んでみた。金是小野の論を敷衍して「抒情は批評を閉ざしていることで「批評」とならねばならない心的秩序」「詩を生ましめる人間の心情、その心情をかきたてている認識の波動、それが心的秩序としての「抒情」である」としている。感性の問題だろうが、私はまだよくわからない。

ここでもちよつと余談。橘高薫風は作家藤沢恒夫と親交があったことで知られているが、小野とも交友関係があり、小野の書いた色紙を大切にしていた。色紙は

木も草も石も

みな陰彩を持つて

いる

天地のはて
で、私は二人がどんな間柄であったのか、どんな話をしたのか非常に興味をもっている。

批判に対する各ジャンルの対応

在来の短詩型に対する否定論について、もっとも鮮明な反応を示したのは歌壇だったと思う。中堅歌人たちが超結社のにグループを結成し、中心的存在であった近藤芳美が「新しき短歌の規定」を発表した。塚本邦雄は「なばなく」「水葬物語」を掲げ、前衛短歌運動を立ち上げた。彼は「短歌研究」に新人賞

を獲得した中城ふみ子、寺山修司らの登場を得て歌壇に勢力を確保し、岡井隆が結成した「青年歌人会議」とともに浸透をはかった。

革命歌作詞家に凭りかかられて

すこしづつ液化してゆくピアノ

卓上に旧約、妻のくちびるは

とほい鹹湖の暁の睡りを 塚本邦雄

俳句について桑原は、人生そのものが近代化しつつある以上、いまの現実的人生は俳句には入りえないとしたが、中村草田男、西東三鬼、石田波郷らはその指摘に対し、実作で成果を示そうとした。川柳界でも一部で話題になったとされるが、真剣な論議にはなっていない。私はこれを柳壇では早くから詩性が非詩かの論議が盛んで、柳人にはことさら驚く問題でもなかったからと思っているが、あるいは柳人の感受性に原因があったのかも知れない。もつとも驚いたのは詩壇の対応で、このように重要な課題を提起しながら、自ら は事実上何らの取り組みもなさなかった。

たまたま私はいま丸谷才一を読んでいる。

(文芸春秋刊「綾とりで天の川」の中の「舟歌考」)彼は「万葉集は呪術性を色濃くどめている。自己表現のためのものではなかった。個性没却的の共同体的なありようこそ近代以前の姿で……」という。短歌は長い歴史と伝統の中で積み重ねられた重い中味をも

つ。単なる短詩型でなく、いわば祭事であるとともに、民族的な総合芸術である。西欧の詩学が後盾にあっても、せいぜい明治の新体詩以降の歴史しか持たない論は、私には日本料理を採点しに来たフランス人たちの考え方に似ているように思える。

詩は民衆のためにある

現代詩と川柳を比較するため、ここでは反戦詩をとり上げてみた。わが国における反戦詩の初出は与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」だが、峠三吉に有名な詩がある。

にんげんをかえせ

ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ

すぐれた作品だが、鶴彬の川柳は一句で、十分この一篇に比肩し得る。

手と足をもいだ丸太にしてかえし

詩論を読んでいると、詩は民衆のためにあるという言葉とよく出会う。その通りだと思

う。現在のように混沌と多様化が進む世の中は、川柳の素材に満ちている。だからサラリーマン川柳などの盛況も見られるが、余談ながら私は、サラ川に群がる才能が単なる機智とくすぐりに終り、商業資本に利用されている現状をもつたいたいと思っている。早い機会に川柳への回帰を図るべきである。

ところで現代詩を見ると、私には難解さばかりが目につき、一部を除いて一向に民衆とともにある姿が見られない。世の中への働きかけに欠ける。戦中、勇壮な軍国詩が飾った新聞や雑誌のコラムから詩は消えた。現代詩手帖まで書店にない。私は社会的な有用性、民衆との連携において、川柳ははるかに現代詩を超えていると思う。

その他の主な参考図書

三省堂刊 現代短歌大事典

小高賢著 現代短歌作法 新書館

村上古城 俳句用語の基礎知識 角川選書

山下一海編

現代詩手帖特集

戦後六〇年〈詩と批判〉総展望 思潮社

荒地同人編 詩と詩論 1, 2, 国文社

嶋岡晨著 詩とは何か 新潮選書

本社 四月句会

四月七日(月) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大阪

二、三日続いた陽気が嘘のように、朝から本降りの雨となった。

今月からしばらく夕方句会が始まる。

お話は常任理事、米田恭昌氏。

病は氣からの「氣」を強くするためのお話で中村天風先生の教え、アンチエイジング、「加齢に挑む」が、本日のテーマ。

綿密な資料は講演会等で集めたものと、川柳を通して実感されたもので出来ている。

まずは音読のススメ。音読こそが最大、最強、大脳の活性化に役立つと力説される。

また、カラオケや川柳は音読の要素を持ちながら、心肺の老化を防ぐ効用などもあり、そこへ健康的な食生活、ときめきのある暮らしをプラスすれば、人間の体は120歳まで生きられるように出来ているのだと大変に元気をくれる内容であった。

(扶美代記)

初出席は京都市 松本甘鬼氏。

福岡県 林さだき氏。

月間賞は東大阪市の笠井欣子さんに輝く。

(司会―美籠・昭)(脇取り―久千代・月子)

(受付―朝子・義子)(清記―直樹)

席題「花見」 山本 希久子選

親孝行のつもり花見についてくる
満開の桜をよそに話しこむ
合格の絵馬を外しに来た花見
通り抜けの人込みの手中をつなぐ
お花見のおれたつぷり慈雨が降る
刑務所の出口と知らずする花見
十年より大きくなつていた桜
もう少しこうしていたいサクラ散る
桜前線いまわたくしの前にいる
夜さくらの下で旧交あたためる
急用の車窓みことな花を見る
夕茜散り初めもよし花の山
記念樹のさくら一人で見えています
通勤車窓から花見しています
なるようになって花見から帰る
花守の丹精知らず手をたたく
花見から花見へ息をついでゆく
乗り越した駅も桜の七分咲き
介護タクシー乗つて花見のハシゴする
秀吉しのご後期高齢花見宴
木枯しの頃から待っているさくら達
花愛でる人を見ているさくら達
春闘の次は花見をする労組
お花見に行く口実でよく出かけ
夜桜の神秘にぐいと吸いこまれ
満開の桜しあわせ撒いて

瑞美子 房 子 和 夫 哲 子 岳 人 恵 子 美 籠 扶美代 かりん 直 樹 哲 子 千 枝 子 義 淳 司 ますみ 久 千 代 見 清 たもつ 集 一 朝 子 尚 士 瑠 美 子 光 久 孝 一

どこからか人が湧いてる渡月橋
悩みななどない顔ばかり花の下
一泊で海見て花見して帰り
仏壇に留守を頼んで行く花見
大和心が春高樓の宴にある
我が家から見える桜を愛でている
佳
西行になり切つて佇つ花の下
お花見日和いい洗濯びよりです
桜前線日本はピンク色になる
妻だけにお声のかかる花見とき
山すべて花の化身か吉野山
人
花筏蝶は船頭さんになる
地
花を見て人見て命考える
天
勝ち組も負け組もない通り抜け
軸
来年も桜見ようね母白寿
兼題「うっかり」 山本 蛙城選
あのうモシ背中にも値札ついています
姑うっかり嫁ちゃっかりで仲が良い
いつの間に入つていたかあのマッチ
非常ベルうっかり押して逃げかくれ
うっかりとしてたと叩かれるおでこ
マル一つ見落としレジで立ち竦む
加お里 能 子 月 子 章 久 卓 恵 子 楓 楽 扶美代 靖 鬼 天 笑 好 靖 鬼 丹 吉 尚 士

置き忘れた骨董探す春うららのし袋空で渡していた迂闊

核ボタンうっかり押されるかも知れぬうかうかと後期高齢者の仲間

うっかりをやさしく包む紙おむつ移り香に気がつかぬまふと掃毛

うっかりとしてたら尻尾踏まれてた煽てられうっかり本音吐かされる

饒舌が本音を見た勇み足

うっかりと時価の鮎屋で飲む羽目に任せとけなんてうっかり見栄を張り

うっかりとひらけぬメール来て困る飯の世にうかうかと長居する

うっかりと貧乏神と手を繋ぐ別れましよう言われ気づいた深い溝

うっかりも愛嬌年のせいにするうっかりと家を忘れる時がある

うっかりと入れ歯忘れたグルメ旅角砂糖三つうっかりなどと言ひ

うっかりとノックをせずに開けました形だけですと実印押さされる

うっかりと歳を忘れておりました聞いてると知らずに裏をぶっちゃける

自販機の釣銭忘れ飲んでるうっかりの言葉引き出す妻の酌

女専車にうっかり乗ったのが出かいオフレコを信じしやべっていた迂闊

うっかりを笑いかえる浪速つ子

たもつ

寂子

楓楽

美代子

柳弘

則彦

千里

玄也

恭昌

和夫

歌子

洋

希久子

集一

蕉子

みつ子

義

日の出

千恵子

一步

保州

希久子

靖鬼

朋月

遠野

柳伸

恭昌

好

年じやないちよとつうかりしてただけ

住

猛犬に注意の札を見そこない

堂々と社会の窓を開けてはる

本当の干支をうっかり口走る

朝帰り裏を着ていたとは不覚

目覚しを三つ並べてかけ忘れ

人

上司より高いスーツできめていた

地

メスひとつ縫いこんだまま手を洗う

天

うっかりと妻にも好きと言いました

軸

ごみの日に万札出した顔見たい

兼題「著」

受かったかそうかと祖父は箸を取る

脇役の箸にそれぞれある個性

箸置いてしばし器を賞味する

割り箸を裂いたら地球儀の叫び

塗り箸で小芋つかめぬ日の焦り

スプーンからお箸にかえて自我芽生え

箸を持つ暇さえくれぬ妻の愚痴

燃える恋火箸で心掴みたい

箸紙をメモにガイドを褒めてやり

箸割って氷山墜ちる音を聞く

箸一膳洗う幸せ闊病期

滋郎

千代

卓

尚士

修

なきさ

寂子

時雄

岳人

蕉子選

美義

珠子

雅明

ダン吉

房子

希久子

昭

孝一

一步

蛙城

寿美

一巻の終り箸立つ飯茶碗

断家の扇子見事に蕎麦を食い

箸が言う甘くみないで糖尿病

マイ箸で止められるのか温暖化

おいしかったよ一言添えて箸を置く

上品な箸はいらない磯料理

ていねいに生きてきました塗り箸

あれ以来ギョーザに箸が進まない

日本通上手に豆をつまみはる

祝箸一膳増えて春うらら

取り箸がなんで私の皿に居る

二千年卑弥呼眠るか箸塚に

その先が早く聞きたいさぐり箸

グルメ旅若狭塗から吉野杉

骨揚げを多弁の箸がかき回す

草食の歴史が続く箸文化

お手伝い箸と茶碗を並べさせ

八分目で箸を置くのはむづかしい

おばあちゃん子箸を拝むもみじの手

箸置きは揃いの伊万里焼きにする

日に三度お箸の進みお蔭さま

佳

二人居て別な心で箸をとる

子育ての躰にまずは箸使い

持ち慣れた箸と心は通じ合う

託ける娘をだまつて聞いているお箸

割り箸を割るふんざりをつけてから

公誠

淳司

日の出

みつ子

幸雀

富美子

ますみ

直樹

天笑

甘鬼

ダン吉

滋郎

歌子

なきさ

蛙城

東吉

耕治

恵子

耕治

螢

朝子

和夫

能子

靖鬼

岳人

ますみ

人

綿菓子のがが残った箸舐める

地

テレビ金本が打つ箸止まる

天

菜箸の先が思案をする同居

軸

箸の先見て説教を聞いている

兼題「許す」

大内

朝子選

許すなら今だ桜が咲いている

高齢者医療制度が気に入らん

許される嘘許されぬ嘘がある

一呼吸おけば許せるほどのこと

許されて一つの屋根に住む縁

許されぬ事と知りつつ燃えだした

仲直りしても許せぬことがある

同じ絵を何度描いたら許される

こだわりを許せば心穏やかに

許してなるか忘れてなるか原爆忌

まだ許可が下りてないのに飲んでる

メガネ拭き許す言葉を探してる

許すものか許すものかと泣いている

許したらしい父は黙って座を外す

許されて許して旅はまだ続く

一途さに負けてついつい許してる

花言葉の許しを得てますか

同じこととして今日は許される

プライドが中途半端を許さない

公 誠

哲 男

寿 美

朝子選

義 正

庸 佑

能 子

良 一

里 江

和 夫

さ だ

東 吉

洋

加 お 里

甘 鬼

美 代 子

三 喜 夫

篤 子

保 州

能 久

光 久

許してもないのに数がふえてくる

なにもかも許す気にする花明り

移り気な蝶をやっぱり許す花

許されて空の青さが目にしみる

母子手帳持って許しを乞う帰省

軍手ですごんな汚れもみな許す

するずると許して泥の中にいる

許したるもんかといけず背を向ける

許さねば明日の風も見失う

ヒト科のわがまま地球は許さない

静寂の中許されてゆく絆

許すまで粘る覚悟の座りだこ

憎いなあ許したとたんしゃあしやあと

佳

春うらら小さな嘘を許し合う

母さんの許しが出れば大丈夫

青空も桜も人を許してる

あつさりど許され僕は悩み出す

許しても許さなくても血の絆

人

認知の母うけとめてから楽になり

地

許したら御飯おいしくなりました

天

何もかも許したらしいデスマスク

軸

許したいでも許せない鬼が棲む

たもつ

修

幸 雀

千 里

遠 野

日の出

恵 子

天 笑

更 紗

昌 紀

歌 子

美 龍

勝 弘

希 久 子

たもつ

千 恵 子

昌 紀

富 美 子

加 お 里

蕉 子

楓 楽

ストレスがなくなり僕は死にました

ストレスの解消池の鮒を追う

財布からストレス時にこぼれ落ち

花買った日の女には近づかぬ

欲しいもの何もないのもストレスだ

ストレスを曳きずって来た影法師

ストレスがあるから元氣影法師

阿倍野発ストレス捨てに吉野山

ストレスをジョッキに混ぜて呑んでいる

ストレスを癒すとき軽くなる財布

ストレスに負けたか泣いてばかりいる

ストレスを涙と共に流し出す

直角に生きてストレス溜めている

ストレスの捨てどころなら妻の膝

ストレスを安物買いで晴らす妻

運命の曲でストレス追い払う

自分ではのほほんとしているつもり

ストレスと顔にでかく書いてある

お泊りの客がストレス置いて行く

ストレスのない順番に風邪を引く

ストレスの溜る分だけ肥えている

ストレスに開き直りという薬

ストレスをビタミン剤にして達者

大丸へ妻はストレス捨ててに行く

床の間を背にストレスの矢を放つ

ストレスはあなたが生きている限り

ストレスは熱燗にして胃へ流す

ストレスを顔にも出さず立つ案山子

ストレスを物干し竿にかけておく

昌 紀

庸 佑

見 清

和 夫

美 代 子

扶 美 代

希 久 子

柳 伸

たもつ

たつお

ルイ子

加 お 里

哲 樹

直 樹

章 久

一 歩

義 子

ダン 吉

美 智 子

良 一

シマ子

みつ子

富 美 子

尚 士

蕉 子

房 子

遠 彦

則 彦

義

ストレスをまとめて捨てる縄のれん 集一
ストレスにならないほらを吹いている ますみ
ストレスが溜りぜんざい食べにゆく 月子

佳

B面の顔でストレス解き放つ
ストレスも愛もかくした花の闇 寿美
定年後終日妻に監視され 希久子
ストレスに負けそうなので石を蹴る 玄也
モナリザはきつとストレス溜めている 篤子
保州

人

ストレスが少々残るロゼワイン れんげ

地

ストレスが溜ると進む腕時計 千里

天

ストレスをいっぱい溜めているバセリ 楓楽

軸

ストレスが溜ると妻と行くハワイ

兼題「約束」

河内 天笑選

幸せにする約束に満期なし

言うてみるもんだ約束取り付ける 雅明

約束を忘れていないお月さま 准一

ハイハイと安請合いをしてしまう 螢

ポロポロの口約束が生きている 紀乃

約束は約束カネは取り立てる 扶美代

カマキリの雄約束を忘れない 幸雀

献体のサイン夫婦の気が揃う 志千代

その時はその気になっていた誓詞 良一

修

条件を呑む約束が多くなる

約束に遅れる奴は切り捨てる

約束へときどき打診されている

マニフェスト日本語訳は不実行

約束をしつかり聞いている砂丘

ぎっくり腰ぐらいいで旅行断れぬ

温暖化四季の約束崩れそう

約束の駅の出口がふたつあり

二回目のドタキャン輪から外される

約束は貴方送ってから私

約束は重くて軽いのは命

ばらまいた空約束が責めたてる

自分との約束破ること出来ぬ

自分との約束はすぐボツにする

飲んだあと約束ぜんぶ忘れてる

約束があるから胸も弾み出す

二枚目の舌が約束して困る

約束じゃあとおくに社長夫人の座

映画だけ観る約束でデートする

出世払い忘れて威張るユーターン

指切りを反古にはできぬつぶらな瞳

約束があるのに義母が道という

幸せにする約束の遠い道

浮草の気象と約束はしない

指切りをしたきり彼女いなくなり

約束は反古一人共忘れてた

黄泉の席愛犬の横す約束する

歌子

シマ子

恵子

直樹

岳人

光久

美智子

耕治

朋月

欣子

ルイ子

修

みつ子

楓楽

時雄

更紗

良一

直樹

一步

律子

柳伸

恵子

章久

美代子

昌紀

房子

ふりこ

攻めてくる妻に時効はないらしい

神様と約束がある大自然

約束は破られるから面白い

おむすびの中に約束詰めてある

約束は花粉前線過ぎてから

神前の誓いたいいて破られる

天

軸

笠井 欣子

第58回京都塔の会春の吟行句会

日時 5月26日(月) 10時30分

集場所 JR稲荷駅(京都駅発奈良線)

行程 稲荷大社・千本鳥居・奥社・おかる石

……ぬりこべ地蔵……石峰寺……

稲荷参集殿(昼食・句会 椅子席)

兼題 当日雑感・ゆつたり・鳴る・真角(各3句)

会費 二五〇円(当日)

申込・締切 5月15日 都倉求芽まで

TEL 075-351-4109

おかる石 上部の丸い石を持ち上げてみて

重いと感じるか、軽いと感じるか

おのれの信仰心によるとされる。

ぬりこべ地蔵 歯痛に靈験あらたかとされる。

石峰寺 五百羅漢が散在

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

尼崎尾浜川柳会(前月分) 田原 宏一報

食膳に梅は生涯食の友
工場の人一息梅こぶ茶
生きるため妻の愚痴なら猫も聞く
何時も来る野良猫まだか気にかかる
紀の国の梅は祝の引出もの
ラッシュアワー腕動かせぬ位置にあり
ちよつと待ち他人の意見も聞きなはれ
縁側におひなのように老夫婦
偽装捏造深くお詫びは聞きあきた
紅白の梅がほころぶ頃に合う
流し雛一期一会の旅の途次
梅を見に行く約束の清い仲
美女の舞い見ている方が目が回る
春眠を光の風が呼び覚ます
干されると梅の実覚悟決めている
マフラーをしっかりと巻いている梅見
覗くだけと馴染みの店に行つたまま
誉められた時は素直な耳になる
足音は聞いていないが春はそこ

亀与子 全彦 美義 江美 野薫 靖鬼 五月 昭三 美代子 紀乃 宏一 耕治 義芳 正治 孝一 朋月 里江 政江 イサミ

和歌山三幸川柳会 武本

バランスのとれた辺りで笑顔出す
それぞれに言い分がある咳ばらい
毛筆でいと鮮やかな果たし状
鉛筆に竹継ぎ足した立志伝
饒舌なペンで時々蹴踔く
嘘ひとつ飾って詫げる筆をとる
一筆で描いたネズミの可愛いこと
弘法も筆の誤り年の所為
鉛筆を転がし思案巡らせる
鉛筆からこぼれた肌が生きている
性格がよさそう筆がのびている
生い立ちをベストセラーにさせる筆
絵空事描いた絵筆が裁かれる
永字八法筆の運びに無駄がない
原形がないほど筆を加えられ
写経した筆で心を洗いたい
突き進む勇氣を風に試される
我が道を進む棘の道でさえ
日進月歩わたしの脳は手動式
一進一退もの忘れて頼るメモ
新米に秋の茄子漬食進む
双六の上がりに近い歩を進め
新しい靴に履きかえ進む古希
いざ前進サブリメントに励まれ
進む世の流れに乗れぬ笹の舟
童巻の進路わたしの影がある
進まねばあとから急かす電子音

比ろ志 美籠 碧報 みね 昇 幹子 宏夫 桂香 孝義 柳昌 かずみ 美花 町子 登美代 朱夏 武 美子 絹子 当代 イセ 一步 信子 次根 菜摘 起世子 瑛子 孝子 碧

輪投げした路地にも進む高齢化
進む過疎笛も太鼓も遠くなり
矢印は折れて曲がってお葬式
もう戻れないところまで来たヒト科
棒読みのまんま加齢へまっしぐら
ローズ川柳会 山崎 君子報
売つてない服を着せてた気張つてた
女なり着てゆく服をあれこれと
非売品自作の宝一つ持ち
笑顔売る人の小さな泣きばくろ
毎日が大事と思う日はこ
如月の雪思ひ出すことばかり
女と鬼同じ土俵に立つている
竹原川柳会 古田 太虚報
大笑いした夜ぐつすり眠れます
自画像へ少ししたい笑い顔
人笑うわたしも笑う話し好き
福の神孫が笑いを播きに来る
女房に似てきてボチのよく笑う
差し上げる物が無いので笑顔だけ
嫁と娘の組板リズムが笑い合う
雪の中にこやかにいる寒椿
長電話行つて話せる距離に居る
梅干の元氣を貰う朝の膳
食べ盛り嬉しい悲鳴釜の底
夢にでも元氣で渡ろう虹の橋
学んだね元氣だったね木の校舎

幸 准一 和子 保州 章子 みる 哲子 トミエ 義子 蘭幸 栄恵 規代 弘子 白狐 淑子 敬子 太虚 栄香 節夫 輝恵 房子 力

百歳の元氣現役だと笑う

目指すのは強くてたくましい女

寝返りで行きたいとこへコロコロ

鈍感に生きてプラスとマイナスと

感無量天に瞬く星ふたつ

感謝の字が消えると争いが生まれ

土を打つ土に感謝の一日なり

裸となつて五感の冴える冬木立

渡り鳥お前の感をくれないか

感じるままに描いたピサノの絵になつた

灯明が答をくれそう手を合わす

玉になれ玉になれよと石磨く

松露川柳会

小西 雄々報

香くわしい庭の蠟梅歩がゆるむ

梅粥をすすり鼻風邪癒したい

梅林の甘い香りが春知らせ

山門の梅の香りに吸い込まれ

記念樹に梅の苗木を贈られる

負け組に寒さひとしお身にこたえ

久方の寒中見舞友の顔

温暖化予想してたに雪積る

省エネに寒さ対策あれやこれ

返事だけでも炬燵が出られない

コーヒーマも酒も適外は雪

雪マーク並ぶ予報へ身が縮む

うぐいすを呼びたい梅が咲き誇る

語りたい星座まだまだ寒そうだ

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

恩を知る男の汗がうつくしい

義理一つ返せぬままの恩を抱く

旧姓に戻れば出来る恩返し

写経一枚一枚ごとに洗う罪

亥の垢を洗い流して子に期待

お水取り火の粉で洗う二月堂

家中に正確なのがない時計

容赦なく老いを刻んでいる時計

秒針にせかされてる救急車

冬の絵にはつこり温い思がある

一つ石積んでは思ふ母の思

婆ちゃん財布にとても思がある

思いくつ温め直している余生

恩人を見舞う施設がさむそうで

愛妻の従者となつて恩返し

岸和田川柳会

土橋 房枝報

この歳で義理でも嬉しチョコレット

政治家の口はほんとにチョコレット

義理チョコか本命チョコか悩む夫

人生に終えることない山続く

燃え尽きて終える火花に果てた夢

初春に終えるお題はチョットいや

仕事終えちよつと一杯リラックス

終える日が分らないから生きられる

マザーテレサ円い心で生きた人

イチローが儀式を終えて球を待つ

佳句地十選 (4月号から)

松本 知恵子

ガラクタも自分史語り捨てられぬ

ぼちぼちと行こう残りの当りくじ

一日のベルト外すと僕になる

介護する手も軽くなる年金日

見切り発車深いところにある覚悟

節分の豆が靴からこんには

おふくろの性に合わない無洗米

一日のどたばた脱いで仕舞風呂

背中ぞくぞくライバルと擦れ違ふ

愚痴こぼしながら元気になる女

仕事終え仲間と過ごす縄のれん

今日終える何かにひとつ感謝して

今願の夫婦で渡る終の川

当分はギョーザのおかずないらしい

俺の癖孫の仕草に生きている

五十年連れ添ったけどまだ似ない

微笑みの影響いつか和みの輪

交差点青が続いてすいすいと

どん底を抜けて見上げる青い空

行つてきます朝の空気が快適に

安アパートだけど快適四帖半

居心地のよさは刺身のつまでいる

やがて春天使の妻が横に居る

暖かく慰められる友のギャグ

信子 聖子 裕美 幸枝 美千子 浩三 重人 静枝 千代子

珠枝 房緑 仁司 笑昭 寿海 ゆい 洋守 和美 呂万 蛙城 柳風

三人で頭を下げる寒いギャグ
ギャグ連発中味なんにもない会話
仲人がギャグで和ます披露宴
じいちゃんのギャグに孫等の目が困る

川柳塔唐津

仁部 四郎報

出直しの赤福餅に長い列

アルコールはいると女議論好き

帰るなり靴下を脱げ手を洗え

父方で貯めていますと鯉のぼり

馴れるまで後十年はかかると言う

踊ってるのひら俺が操作する

午後十時私の時間動き出す

川柳塔おっぱい吟社

川崎ひかり報

一枚の紙に家族が引き裂かれ

最高の地位は諭吉になれた紙

赤髪斗で始まり終点紙オムツ

白紙には戻らぬ一言持て余し

諭吉より百円玉が好きな孫

お芽出とう手紙も添えた宅急便

朝刊の見出しや如何に治か乱か

山分けをするほど遺産ありません

吉報が雨音分けて飛んできた

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

忘れましてと閻魔大王様に言う

ジワリジワリと祖母の意見がきいてきた

祖母の貯めた遺産は孫の留学費

義泰 弘子 力子 岩夫

輝夫 高明 蜂朗 四郎

勝実 晴翠

放任 ひかり あきら 八重子 よしみ いさむ

初恵 弘 貞月

美ツ千 天人 美知江

寝てる間に煎じ薬がジワリ効く

都合よく忘れ都合よく思いだす

投入堂文化遺産に名が上る

子等のため赤字抱えて走る汽車

汽車のなかで忘れれたの骨董を

ジワリタンワリと今年も無事でした

見え透いた嘘がジワリと浮いてくる

お父さんうんと言ったの忘れたの

針灸がジワリと効いた命乞い

子を背負い一里歩いて乗った汽車

約束を忘れ正座で飛び上がる
玉垣に五円と遺す先祖の名
忘却が無ければ胸は水びたし
人間の愛を忘れた資本主義
煤煙の臭いが好きなガキでした
焼き餅がジワリふくれて角を出す
ケータイに収まっている備忘録
蟹が棲む大事な遺産日本海
遺産などないが十四代主人
死んだとき遺産がゼロになるように
生臭い風がジワリと仮面劇

川柳クラブわたの花

西川

義明報

春近し夕日を掬う掌が温い

不況風愛妻弁当人気です

花摘んで妻に供える喜寿の坂

目標がなくて回りに流される

余生とは立派な人の一ページ

お目出度い相談受けてお金舞う

和子 龍枝 かつみ 芳江 幸恵

あづま 雄人 睦子 きみ子 孔美子 玲子 和枝 重忠 玲坊 帆雀 ひろこ 完司 螢 石花菜 宣子

知民 耀一 君江 博子 愛子

お日さまに土手のつくしも起こされる

愛の仲あまい空気で満ちている

善男善女かしわ手ばかり不況風

叫び声戸開けてみるとテレビ音

相談をまとめる父の一家言

はかないね初恋に似た桜舞っている

今はいもう空気がみたいな若い二人

生かされているよろこびを知る保険

仲良しがころころじゃれる下校道

不況でもブランド買いは世界一

怒るのも気力いります笑つとこ

春が立つ故郷の白梅咲く頃か

不況でもうっかりまっかちばちで

鉢植え元気が家の空気合うらしい

大雪は頓服薬か温暖化

名大で美人にはかり尻尾ふる

友ありて酒のあてにも郷土色

母の棚家族の歴史詰まってる

伸びやかに寒さに負けじ春の芽が
ケータイの花が静かに咲く電車
目標が宙に浮いているメタボ塾
脅える氷河の国の温暖化
友達を頼り頼られ温い仲
頬なでて菜の花香る千の風

川柳塔鹿野みか月

福西

茶子報

赤紙の辞令はいらぬ子は出さぬ

湯豆腐にみかんの皮をミジン切り

まじないを信じて通う神ほとけ

ミツ子 宏至 幸枝 莊司 美はる 克美 いつみ

義明 正春 欣子 妙子 俊子 晴美 浩三 孝子 和子 八寿子 ふりこ

ますみ はじむ たえこ 美代子 一風

くに子 蟹郎 睦子

— 106 —

川柳塔なら

坊農

柳弘報

初霜の便りと共に着く地酒
霜枯れのミシユラン星が一つ消え
霜柱素直に折れる陽が温い
飲みたまえ酔いたまえ瞳潤むまで
倦怠期少うし潤い切れてきた
還付金ちよつぱりあつて屋台酒
頂上が潤い裾野が病んでいる
カラオケに喉を潤す中ジョッキ
思いきり豆ぶつきたい人がいる
母さんが今も生きてる豆ご飯
豆撒きにかりたてられる人気者
歳の数食べたら一食抜きました
寝たきりに愛の役目の口移し
てこずった役目私が鍛えられ
父役も上手になす母子手帳
霜焼けの風の子その後便りなし
母が来る予感ふくら豆を煮る
身のうちに同じ影もつ五色豆
ペンも恋も貴方任せの五色豆
朝霜を踏みベンジの兎跳び
約束を反古にしている霜の朝
湯豆腐の途中退場する昆布
コーヒ豆挽く自分ひとりの豆を挽く
歪む芽を真っ直く伸ばす親の役
人間がいて結露する四畳半
てのひらの豆が男の汗を知る
一輪の花が女の部屋にする

満作 美はる とし子 博一 千梢 恭昌 比呂志 弘風 茂雄 洋子 太一 勝久 章久 ふりこ 一風 隆盛 富子 六助 柳弘 良一 恵美子 順啓 和のり 真理子 朝子 寿美

花道を退いて男の独り酒
燭は人肌こころ潤うまで手酌
これも幸ふくら豆が煮えている

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

ふるさとをこぼさぬように解く荷札
待つて待つて待つて一本杉になる
うずうずの心ひらいた千の風
いつもちいさな鬼のことはにしてさとす
待ちきれず夫に胡椒五分かける
舌の根へ湿りを入れる五分前
待ちわびた少年夢へダツシユする
論されて言うことを聞くボクでない
噛み砕き論した母の瞳が濡れる
体験談子にはんどのりと灯をともし
これだけは論しておこう母として
満点の男は無いと娘に論す
今日という舞台に血湧き肉躍る
うずうずはしないチャンスを抑むまで
喋りたいことを他人がみな喋り
うずうずと春待ち佯びるランドセル
口ごもりうずうずしてる初な恋
おくれてもううずうずしない蝸牛
真つすぐに生きてふるさと丸い風
ふるさとはいいな私が風いでくる
ふるさとに自分の歴史生きている
ふるさとの風が奏でる生きる歌
僕という電車に乗ってふるさとへ
転動で故郷持たぬ子が増える

義久 理恵 孝子 裕美 大輪 和子 あきこ 真里子 利治 徑子 夕胡 寿子 富美子 克子 よしこ 保州 登美代 美子 紀子 良一 めぐみ 怜 輝子 和 泰 和香 三喜夫

母ひとり残しふるさとまだ元氣
イベントがあつてふる里若返る
ふるさとの山河慕情をかきたてる
ふるさとしておきな馴染みと夜を明かす
ふるさとで聞く山の音風の音
玉手箱を開けるとふるさとの煙
京都塔の会 都倉 求芽報
山茶花の垣根の赤がよく目立ち
関白も掃除洗濯うまくなり
ウオキング魚の目ひとつ連れてゆく
定年の負ぶさる夫あやしつ
清潔に包装されてゴミが増え
母だけがエコエコと叫んでる
やすやすと語進まぬ拉致家族
やすやすと毒が日本へ入り込む
大学はやすやすと終えてフリーター
やすやすと操作できない車椅子
やすやすとチャンスは来ない努力賞
やすやすと関所越したが道がない
遊びなはれやすやすのつたキリギリス
道連れが出来てやすやす山越える
親切を裏返えされて遠い春
あの人の歯形が今日も疼き出し
噛み合ふ歯車これもあれも夢
じれつたぬ対角線で爪を噛む
嫁姑他人行儀のままがいい
招かれて母が氣にする子の行儀
婿連れて他人行儀で来る娘

英子 紀久子 三男 正博 小准 一雪 高栄 朝子 ますお ふりこ 啓子 満子 萬的 篤子 石舟 綾子 典子 宏子 葉子 輝美 則彦 求芽 美義 福子 庸佑 春

生い立ちの弊が崩さない正座
さりげない行儀しつかり子が見てる 昌乃

川柳ささやま 遠山 可住報

この歳で越されぬ母のかくし味
かくすもの皆無難あるい肩となり
風邪ひいた言えはスナリ休めそう
かくし事なしと誓った神の前
外人と結婚出来る平和なる世
入社式外国人の部下になる
シミかくす苦勞を誰にばやこうか
贈り主不明の風邪を貰い受け
物売りの外国人にある不安
風邪ひけば親そつくりの咳をする
風邪ですとマスク美人が目で笑う
ボランティアがう自分が隠れてた
達者かと聞かれて軽い咳をする
ホームステイ地球の裏でアルバイト

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

再会の運を大事に待っている
ひとりことほそりこほして日が暮れる
運は天任せで傘も持たぬ旅
季節野菜が鍋の中にて踊り出す
巡る期の香りゆかしい難のすし
運否天賦これから先をどうひらく
三日坊主手垢の跡をい日記
賑やかが好きだとは言えはしやぎすぎ
こたつ番うたた寝日課春を待つ

老いてなお白梅清く凜と咲き
進む日も休む日もあり老いの道
転がした徳利が弾む同期会

八尾市民川柳会 宮西 弥生報

幸せは老いた父母まだ達者
彼岸参り僧衣ひらひらバイク行く
一度しかない人生を日日削る
私のものよ生まぬ自由に住む自由
初卵今生みましたと病む母へ
埋め立てた沼に沈んでいる神話
義理義理と男をせめる花筏
春を生む雪ゆるんでいく根雪
防衛省疑惑が疑惑生んでる
満場一致生み出すものは何だろう
顔色で確かめている子のサイン
唯一の誇りあなたを生んだこと
ホームレス体験ベストセラー生む
誤解生む美し過ぎる未亡人
老いました可愛い蕾にかえります
開けないで今書から脱皮する

高知川柳社 川竹 松風報

着飾ったママが付き添う入園日
勝つて汗笑顔に飾りインタビュ
飾るより心磨けば身は光る
成人の明日へ夢を飾り立て
部屋中を飾ってイブの夜を独り
不景気に飾る錦がままならぬ

純 幸子 寛之

一風 浩三 朝子 耀一 幸生 扶美代 秋雄 欣之 紀雄 ダン吉 賢子 あり いさお 柳伸 アキラ 弥生 功 典雄 俊子 千鳥 美々

食卓を飾る家族の笑い声

飾る事止めて心の荷が下りる

飾らない人の心は温かい

満ち足りて無言の闇を飾る月

あっぱれな造花にいつも騙される

終章を飾る舞台は花吹雪

八十路坂夢も希望も細い道

ささやかな希望を抱いて買うたくじ

元旦に希望と書いた風あける

毎年希望をかざす松の内

明日への希望をつなぐ孫と居る

ご希望に合わせましょうと言ふのみ手

川柳花の輪 妻谷 重風報

恋猫のむきだしの歯のすさまじき
一本の歯になつてから大事がる
歯車のひとつとわかり生きやすい
歯が痛い他人はそうかと言つたきり
年甲斐なくバイキング盛り合い合う
閉店開店競い合つてる商店街
ライバルが居つて続いた趣味悠々
大人やもん勝つた負けは胸の内
何くそと競う心で冬の朝
ちらちらと雪花桜の魁に
春はまだ雪の下からのぞいてる

西宮北口川柳会 黒田 能子報

代われない命一人に一つずつ
水琴炉の青色に変わる水しずく

健

和江

悦史

哲子

京子

てるみ

栄美子

房恵

進

谷忠

和恵

みどり

隆子

ルイ子

音成

泰子

ミヨノ

薫

一幸

善栄

重風

高栄

やすの

比ろ志

泥水を飲んでこそ咲く蓮の花
赴任地の水にも慣れて息子の電話
水向けて話聞き出す年の功
新郎の母と新婦がハイタツチ
お母さんの代わりはいない五目めし
寒緩む世代代わりの里を訪う
思春期に母の代わりとなれぬ父
縄とびを代わると老いがひっかかり
お守りに代わる貴女のペンダント
残り火をつなぎ合わせて夢綴る
折り込みを綴じて備忘のメモにする
山襲を桜が綴る春衣
遠い日の綴方読み大笑い
寂しさを日記に綴り気を晴す
雑念を落してくれだ散髪屋
親馬鹿でさっぱりできぬ子に期待
さっぱりとした人間模様描いてる
川柳の出来はさっぱりけど楽し
カタカナ語さっぱり解らん説明書
先ず頭冷やしてから話し合い
四六時中作句の辛さ楽しさも
生きてきたように篝の目が残る
日脚伸び女の話長くなる
花柄のマスクをしよう花粉症
真剣だなやる気満々タクト振る
三寒四温梅はおんなじ顔で咲く
可能性おおよそ見えるわが定め
表札が代わり元気が満ちる窓

折杭 宏一 耕治 富喜子 昭三 晴美 紀乃 萬的 光子 いたる 歳子 江美 朋月 五月 順子 松煙 奮水 千代 美代子 光久 キヨミ 正和 嘉代子 求芽 求英 美龍

川柳茶はしら

板山まみ子報

出てしまふ寒い寒いと一人言
人ひとり通れるだけの雪を掻き
駄目押しをされてビビったこの話
餅ついて奉納元氣もらう里
思い出のスカーフ巻いて待つホーム
待つてね私にはまだ寿命ある
一人居に時々音のする二階
終演のロビーあなたも二人連

ほたる川柳同好会

水野 黒英報

看板が気になるうちは張りもある
古希だからといってはおれず錢稼ぎ
看板の毒舌やえて父元氣
君だから出来る事だとおだてられ
卒業は花に埋もれて惜しまれて
妻だから言える事あり言えぬこと
不景気で白い看板目立つ駅
高望みするなお前は私の子
洗濯機がピンクに染めた夫のシャツ
家移りは次はあの世と定めている
表札は亭主看板は女房
右左すつかり慣れて車椅子
母だから無償の愛を子に紡ぐ
午後三時あくびが移る老夫婦
すし老舗看板娘茶髪にし
工事中看板だけが頭下げ
看板を変えるか悩む中華街

文男 廻行 秀水 幸子 かつ子 百合 美千代 まみ子 肋骨 信男 昭子 雪子 桂子 幹治 禮子 宇乃子 春代 契子 勝 柳童 美智代 勇治 いさむ 長一 黒兎

南大阪川柳会

吉川 寿美報

根気よくすべてメモする要介護
思い出すたびに感謝になるすべて
全て許し私の空が広くなる
師匠からすべて盗んで恩返し
約束のすべてを果たす茄子の花
大掃除古新聞がおもしろい
あいまいが多くて辞書をこき使う
下敷に人種差別のある戦
下敷の隙間で地獄みた命
下敷の仏の心知る写経
踏み台になり下敷になり母強し
教育勸語下敷にして生きてきた
今同居暮場は別と決めている
日の目見ぬ下敷だつて自負がある
安月給了解ずみのはずだった
了解は金のかからぬ話から
女の敵女と了解しています
粘り腰やつと了解とりつける
了解などしない老花が前を行く
了解をしたが一線引いておく
あいまいなもんか自決を強いられる
ストレスを減らすゴルフでまた溜める
ひと言の悔い底抜けに深い闇
ストレスから認知の妻をつい怒鳴る
あはなあと叫びわやむや吹っ飛んだ
ストレスを袈裟掛けにして風を詠む
下敷が教えてくれた静電気

なぎさ あきこ ダン吉 修 洋 一歩 栄己 克美 寿一 集一 楓楽 弘昭 忠昭 志華子 滋郎 とし子 弘子 直子 たもつ 太郎 憲太郎 柳夫 柳伸 章久 ばつは 柳弘 東吉

写経して分かつたような顔をする
退職後胃腸どこかへ消え失せる
下敷の裏は誰にも見せられぬ

むらくも川柳会

毛利

寝顔見てうすら笑いについ和む
ふわふわと和む心が蝶になる
雪溶けて和む心に春の風

あの人がいて毎日が和んでる
ひ孫たちばあは和ませ笑わせる
ポストまで跳んでとんで愛の文

踊るのも度胸尻込みしたら負け
偽物を見抜けるメカネ探してる
やがて行く途だきれいに掃いところ

若い子に話題を合わす辞書がない
老独り想いに残す夢枕
また来ると帰る娘へ淋しい手

子や孫に包まれ傘寿祝う春
米寿なる夫は演歌で上機嫌
おでん鍋よもやま話腹十分

ハードルが高くて一歩踏みだせず
春になりあれもこれもと気が騒ぐ
川柳塔きやらぼく

寺の庭沈黙やぶつてはとが飛び
やぶ眺み多くて話まこたらぬ
風花よ春が来るのをじっと待つ

雪の道あるく転ばぬのが勝負

大塚 恵子報

雪江

なみ

ゆき

てい子

弘泰
勝弘
昌紀

幸報

英男

幸彰

信夫

定子

蘭水

瑞枝

俊夫

秀夫

嘉寿子

愛子

義良

秀子

恵美子

ます美

喜美

美保

久子

節分の鬼にもなった時がある
窓開けて深呼吸出来るぬ花粉症
柳友の知恵をくらしの糧として
清め塩土俵の上に散る火花
闇抜けて光の春を待ちわびる
草むしる草と話せるいい時間
美酒とろり飲んで歌って若返り
匂い水仙亡き人の声つれてくる
正論を抱き沈黙の隅の椅子
都市砂漠との改札も人を呑む
満ち潮のまえのほうとした時間
我家にも振り込みサギがやってきた
初鏡後姿も念入れて
心してこの一年の事始め
振りむかず前へ前へと進みます

城北川柳会

伊達

傘寿すぎまだ目標にまっしぐら
目標はあるが只今ニート族
学校のしつけが悪いとなす親
明日の糧先だとしつけ後回し
愛犬にだけは上手にしつけする
ごめんねと素直に言える子に育て
素っぴんの時はいつでも弱気です
枯れぬよう補う水を貯めて
街中のカメラが俺も監視する
ながながと髪を洗ってまた女
寒いから駆けてこいこい春よ春
春のドア押して私の蝶を追う

郁夫報

ルイ子

萬的

正

東吉

麗

柳弘

明子

典子

弘風

和夫

勝弘

雅文

天雀
寿々子
春枝

スミエ

恵子

那珂子

瑞枝

やえ

ふみ

日枝子

千代

亜弥

章江

初枝

玲子

梅咲いた二ニュースに誘う友もなし
かみ合わせ相手の接点を探す
老老介護優しさも三日
目標を持つ人生は忙しい
脳がまだびんびんだった頃の恋
目標は不要未来はわからない
ポケットに目標入れているゆとり
目標はまだ抱えている輝く眼
目標の毒かけ違う国と国
愛のコール押しまちがえて鬼が出た
しつけ糸ままの形見に母を恋う
耳掃除話の滓がたんと出る
痛蓋を押すと心が痛みます
押ビンのメニユーに賭ける小商
叱るときちゃんと叱っているしつけ
びんびんとアンテナを張る地獄耳
目標はいつもしつかり立てている
びんびんと心も裂ける津軽三味

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

マイカーもあくびしてます原油高
運転層はベテランですよ車椅子
車には人を魔性にする怖さ
マイカーを自転車にしてメタボ策
春の野へ連れて行きたい車椅子
待たされて待つ身のつらさ思い知る
夕飯を待てず一口つまみ食い
幸せは気長に待とうきつとくる
惚れたかないつも私が待つ役で

久仁子

ヨシ枝

章司

光男

扶美代

恵子

正子

アヤ子

敏

高栄
ひさ乃
たよし

弘泰

一歩

倫子

郁夫

賢子

章久

修

美智子

順三

昭子

とし子

集一

朝子

たもつ

志華子

あと五分あと五分待つ未練です

晩成へいつか咲く日待っている

ちよろちよろと節水してる手洗い場

退院後ビールちよろちよろ猪口で飲む

戯れる小犬ちよろちよろ陽が温い

男ならちよろちよろせんと腹くくれ

僕だけがちよろちよろしてる震度六

雪とけて春の音符が流れ出す

ウインクで総てが通じ合うふたり

はずむ日は一寸ウインクしてみよう

その話乗るなど友が目で合図

ボクだけにウインクをして流れ星

ウインクの好きなピエロでさみしがり

誘惑のウインク一度はしたかった

ウインクをしすぎて目ばかりこができた

ウインクと見たのが僕のアホやつた

私を値踏みしているレストラン

食べることばかり話して老夫婦

川柳ねやがわ

籠島

恵子報

誕生日葬儀の話弾みだし

やさしさでふんわり包むにぎり飯

あの人と会うと緊張愛だろ

赤ペンを握るとしやべりだす正義

張りつめた気分をほぐすレモンティー

何処に捨ててる気後期末期の高齢者

こはれぬよう作り笑いでついでゆ

冬枯れの私を癒やす春の風

がちがちで踏み出す足が決まらない

喜久子

泰子

りつゑ

かつみ

猿杓

いさお

耕策

みつこ

庸佑

静子

一壺

六点

一知

ちづる

美代子

ダン吉

重人

美人

美喜

とし子

麗

薫

祥昭

柳弘

鈍甲

修

仁清

喜八郎

時時はリバーシブルなわたしの心

不思議だな宇宙で作業するなんて

持ち上げた梯子をなすマスメディア

マスコミの餌食になつても顔は売り

老老介護無理もないわと思う罪

おはあちゃんただ折つてるお産前

大好きなひとが来るから参加する

緊張の糸がほくれる中休み

春風が花粉誘つて飛びまわり

参加者が年々歯抜けクラス会

参加するたびに最後と母の旅

大空ニダイナミックな飛行雲

ワンマンの社長も清掃ボランティア

ゴシップに尾鰭をつける週刊誌

迷いさめ人を許した青い空

泣くもんかうちかてきつと春がくる

近道をすると踏絵が置いてある

したたかに生きるに少し毒を飲む

長柳会

村上

直樹報

先駆者は奇抜うつけというデビユー

ロボットも音楽聴いて思い出す

磨いてもダイヤになれぬ瓦です

夏の浜まるで奇抜な水着ショー

雅やか日本の原点京おどり

園児の絵巻がピカソ驚かせ

背伸びして節穴のぞく好奇心

派手な服着てもだあれも目にくれず

浴衣着て粋な男の盆踊り

弘一

さち子

じゅんこ

博泉

賢子

日出子

朝子

壽男

寅幸

あさ子

栄二

茜

かすみ

弘風

一風

洋

集一

恵子

直樹報

直樹

マサ

たかし

敬二

たけし

武男

明信

靖司

靖子

菅笠の踊りに隠す恋慕情

妻に恋ワルツならつてプロポーズ

思い出のラストダンスは今の夫

過ぎ去れば走るがごとく人生よ

人生の試験奇抜な線を織る

ゴールまで倒れて倒れても走る意地

踊る輪にテンポのずれた母がいる

白鳥を夢見るシェイズ血がにじむ

河内つ子太鼓が鳴ればエンヤコラー

札束が踊るカジノの生き地獄

淡い恋扇に秘めて京の舞

人生は踊る阿呆で生きていく

空想は自由奇抜な夢描く

大阪は奇抜な知事を生む所

目標は八十歳で踊るフラ

母の背でおぼえた阿波の盆踊り

仏様ラストダンスは御一緒に

少女羽化親の笛では踊らない

阿呆でよし踊れるうちが華なのよ

川柳さんだ

北野

哲男報

おいでやす覚悟してますスギ花粉

チリメンジャコ山盛りがよいはかり売り

嫁さ行く娘はすでに他人顔

泥棒もくやしいだらう車庫の金

梅香る春の気配を肌で知る

憚らず恋する猫に嫉妬する

円高の気配ハワイが近くなる

揉めそうな気配に猫が席を立つ

明子

正子

もこ

光弘

三和子

靖博

史

けい子

よしお

和子

英美

和代

芳野

正美

輝子

正博

一恵

富美子

幸雄

見

美紗子

茂山

和代

雅司

好文

正和

哲男

照彦報

風の前風車並べてエコ発電
風前に火種を置いて待ち惚け
威風堂々風前に立つ崖の松
風前の予感的中計の電話
日本の農政につく赤ランプ

川柳塔打吹

野口 節子報

くたびれたころ包帯巻いてやる
浅瀬の渦のたりのたりと巻いてくる
巻きついて美男葛の色褪せず
がむしやらに生きて男を煙に巻く
冗談をとばして皆を煙に巻く
巻き戻す火種がつきぬ痴話喧嘩
ネジを巻く玩具を知らぬ現代っ子
食い意地も渦巻く中のバイキング
愚かでも真つ正直に生きている
愚かでしょうが虹も見たいし恋もすき
愚かさが菩薩の顔に見えてきた
地位名誉愚かな意地で丸裸
何を守るつもり最新鋭という愚か
愚かさを知った一本橋の上
核戦争くじら戦争愚か者
地球上に愚かな人の群れ
偽りも負けも知らない愚か者
人の輪が好きで集まる花見酒
風雪に何度遭ったか糸さくら
開花まで巡る地道な校守
生き字引きしだけ桜が一世紀
桜見る人それぞれに口を開け

鬼一 螢 龍枝 陸子 照彦 完司 玲子 よしえ 睦子 美姜子 重忠 孝恵 善江 和子 きみ子 滋 たけ代 やえ 芳光 石花葉 三津子 螢 龍枝 ひろこ 京子 楨元 美代子

散らないとすれば桜はただの花
散るまいと枝を抱えている桜
病院の窓の形に桜咲く
右脳に桜前線急接近
桜もち葉っぱ食おうかどうか
春になり夜桜の下チユチユ
背の高い人の後で桜見る
浮き浮きと風にぐどかれ散る桜
あかつき川柳会 山本 柳昌報
アメリカに付いて没落する予感
鶴彬川柳の価値高くする
衆参のねじれ政治を縛り付け
ちりとてちん時々出来る独り者
美しい日本はどこに行つたやら
石ころがよもや化石であつたとは
失恋の破片あつめて万華鏡
こなごなのグラスとドラマ始まつた
六十余年のお痛恨のあの光り
ライバルが光りはじめて目を覚す
懸命に磨けば光り出す石よ
イージスも明りを点けても走らなきや
よろめかず媚びず光りを手のひらに
彬の碑光り輝く日もまぢか
電球の下で昭和を振り返る
光るものないが過ぎたる妻がいる
群立のビルが夕陽に墓標めく
温かい話に発芽する私
こんな芽もあつたと自分見直す日

玲坊 和枝 みち子 公恵 照彦 紀美子 美ツ千 節子 鈍甲 明水 和雄 哲男 桂子 東吉 シマ子 紀乃 賢子 さだき 朝子 勝弘 柳弘 美智子 喜八郎 たもつ 克己 郁夫 蕉子

芽の出来ない男で埋まる競馬場
ごめんねと育たぬ前に芽をつまむ
スイートビー一束わつと春の部屋
もういらぬ名刺の束にある景色
束ねたらとても綺麗になつた今日
登り詰めた椅子で束縛されている
束ねたらバラは鳥合の衆になる
あたたかい心束ねて植樹祭
九条を愛するところ束になる
川柳大坂 長井 善純報
期待した割には釣れぬ太公望
暖冬が期待外れの今日の雪
新知事の改革トライ期待する
お守りをそつと渡して期待込め
期待されそれが重荷の一人っ子
給料のベスアップも夢と散り
宝くじ期待はずれて夢しほむ
年金はだんだん期待うすくなる
人間はついつい人に期待する
ガキ大将逆さに吊られた日が恋し
逆玉を願う男の薄い胸
ギャクになり父母より先に星になる
逆走をさせてはならない第九条
おとなしい妻が差し出す離縁状
何につけ逆説を言う友が居る
ハイハイと妻の言うこと逆らわず
逆光で写せば僕は男前
逆らつたツケが晩酌までひびく

尚士 文恵 理恵 泰行 芳男 正明 集一 富美 正 照月 花笑 功 功 珠生 和 司 一風 信醉 重人 笑歩 川童 五月 勝弘 一歩 修 まつお

逆境にめげず膨らむ雪の下

逆行の蟻一匹にある勇氣

うっかりと生きて白髪になっていた

うっかりと二度続けば老い感じ

うっかりと下宿代溜め婦入りし

うっかりと本音を吐いた酒の席

披露宴うっかり歌うすきま風

うっかりとうまさに乗った時価寿司

うっかりと春の息吹きに寝てしまふ

句会日に句帳を忘れ大あわて

うっかりが周りの空氣和らげる

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

受けてやる青いリンゴの変化球

受け答えハキハキするが実がない

止まり木で氣分転換するグラス

隣席からあくびを貰いかみしめる

ドッコイショ掛声だけは氣力あり

鮎玉とアイラブユーの映画好き

エンデバー宇宙とどんくすする

お誘いがあって頬張るさくら餅

エコバッグの中の過剰包装品

飲むまでに儀式いろいろワイン好き

湯のお宿ゆでた卵の氣分なの

日本の春は梅佳し桃良し桜好し

春の風弾む準備はできている

受けた恩返せないのも世の慣い

黄泉の国宇宙旅行のつもりです

好調な宇宙に今の地球問う

美花 朝子 笑風 喜楽 彦太 鉄心 孝一 洛醉 芳香 東吉 善純 重人 啓生 庸佑 慶子 タミ 勇治 幸雀 宇乃子 見清 黒兎 美義 比ろ志 早人 佳恵 玲子 巴子

朝刊を開くと氣分湿りだす

早春のくどき上手な流れ雲

もう風は春です私孤独です

食煙霧西藏事情五輪危機

退院も近いな医者もすぐに去り

三億をまだ受け取りに行つてない

言いわけのできぬ誤解に波がたつ

夕日背に受けて明日へ弾む毬

好奇心ポチャンとはまる落し穴

古里に想いを馳せる童歌

真に受けたお世辞が自信つけさせる

近いうちに来そうな貧乏神である

流れない水も傘の中にいる

米子住吉川柳会 渡辺多美子報

あけぼのに星ひとつ消えふたつ消え

近寄れば目覚める空氣清浄機

山茶花の散った花びら花咲かす

アテニセズアキラメズいる護身術

雪解けの兆しあけぼのからせわし

姪の子が手作りチョコを仏だんに

あけぼのに樹木の葉っぱが春の色

有頂天孫から届くチョコレート

温暖化道路の雪がすぐ消える

富柳会 池 森子報

古傷を重いコートが喋り出す

隠し切れない罪を暴いた雪なだれ

終章は澄んだ心と青い月

寅次郎 十八娘 (久) 千代 肋骨 都代子 尚士 満寿巳 美智代 萬隆 則彦 寿美子 求芽 日枝子 公一 多美子 正二 ふみ 欣子 雪江 すみえ 登美枝 和子 一恵 登子

和むまで命を焚いてくれた母

中国産煮ても焼いても食えぬ奴

親不孝私もでした吾亦紅

横顔に決意をみせた影法師

日光浴させてやりたい足の裏

初夢を見ずして一月が終る

一滴の香水匂う始発駅

何もかも包んで許す雪の白

借りみんな返して白い白い齡

いい匂い我家へ向かう道標

雪しんしん僕の怒りは赤いまま

幸せが逃げないように紅をさす

切り株に座すのは春の妖精か

脇役のポーズ崩さぬ紅生姿

外の雪會話をとめたノクターン

月よりも妙に氣になる紅い星

夕暮れと和む独りの法善寺

薬害か治療か削られるいのち

懷に溶けない雪を抱いたまま

ただ五文字心の和むありがとう

沸点にすつきり解けた蟬り

独り身の心を決めた紅を引く

音もなく雪の便りは三回忌

紅さしてプラス指向に変えてゆく

逆転があるまで女磨こうか

立ち直るためには足らぬ雪の高

仲直りしても奥歯がかみ合わず

六甲川柳会 伊勢田 毅報

ガツポーズして退場をするつもり

森子 高鷺 寿之 恵子 未知 千恵子 千華 鐘造 欣人 武人 深雪 アキ よしみ 浩子 奏子 七朗 晴美 紅紫朗 紅紫朗 丹吉 佳子 伸雄 彦次 よりこ 澄子 信子 扶美代 楓楽

ひと言のジョークその場をなごませる
普段着ですぐかけつける友がいる
ファミコンを魔法のごとく叩く孫
青空は笑顔生み出す魔法です

魔法ではとれないかしら顔のしみ

ひと匙が魔法に変わる祖母の味

魔力などないが努力がものを言い

魔法のようにヒロシマ消した夏の朝

カルチャーに通い親しい友が出来

親しくも無いのになぜかあいそする

親友のふりして不幸聞きたがる

親しさもほどよい距離がいるのです

親しげなキヤッチセールス距離をおく

呼び覚ます親しき友の面影を

親しみを君の笑顔で感じ取る

親しげに近づく人に身構える

親しさもつかず離れず丸くゆき

欠点と長く親しいおつき合い

しっかりとしよう二月は生まれ月

マシユマロのように優しくいたわれ

残り雪ボタリと落ちて春の音

共白髪揃いのリュック照れている

夫婦とはとろ火で煮込む粥の味

どっこいしょしても妙案浮ばない

春や春羽化できぬまま年重ね

すみよし柳柳会

岩崎

公誠報

光つてたわたし見つけた古日記
飾らない友の言葉が光りだす

半 銭
篤 子

春光にざわめき出した路の臺

太陽の光まぶしい朝寝坊

原石も磨かなければ光らない

確かな目光る目向ける毒餃子

目的を持つ少年の目の光

ペンも恋も貴方任せで光ってる

テッペンが光りはじめたうちの人

糠袋で磨いていると頭なで

汗ぬぐう球児の腕の黒光り

人呑んだ山でさらさら雪光る

スポーツ界光り出してる王子たち

ファイバーの光に地球覆われる

財布には縁起の五円光ってる

光りものは似合わぬ指をいとおしむ

子らは皆それぞれ光持ち生まれ

二日酔い朝の光に苛められ

光るのは頭か顔か心かな

億光年宇宙のことは星光る

川柳塔のぞみ

播本

充子報

銀メダル同志と思う古い二人

ブロードに憧れている銀狐

銀色が少し足りない冬景色

百年を生きた証しの深い皺

被害者の悲しみ深くするマイク

まだ恋をします銀バレー元気で

生きて生きて寂聴 銀色の景

銀シャリを横目に今日も五穀米

意味深な言葉に宙を舞う心

りつえ

かりん

明 江

正太郎

伸 子

柳 弘

ヒロ

桃花

日の出

五月

遠 野

東 吉

舞 夢

蕉 子

昌 紀

幸 子

公 誠

翠 洋 会

谷口

丸洗いたい私も国会も

帰ったらうがい手洗ひ花粉症

洗濯機回して朝が動き出す

洗濯のまつれぐらいはすぐ解ける

過去洗い流して春の風にのる

ロケットに肩叩かれて首洗う

けしごむを刻み聞いているふりしてる

故郷には心に刻む山がある

コンビニは田舎に活気連れてきた

コンビニで別れた少年の誘蛾灯

人生のカナビ欲しい迷い道

笑わないで何時かあなたも通る道

桃 葉

あやめ

遊 花

賀世子

孝 子

権 悟

洋 子

哲 代

那珂子

宏 章

千恵子

清

溪 舟

充 子

義 報

みつ子

舞 夢

春

理 恵

捷 也

恭 昌

蕉 子

れんげ

げんえい

志華子

富 子

水 昇

日の出

没後70年 鶴 彬

顕彰碑建立川柳大会

日 時 9月14日(日)1時開場 2時半締切
場 大阪市立 中央青年センター
〒540-006 大阪市中央区法田坂1-1-35

JR・地下鉄 森之宮下車歩25分

TEL 06・6943・5021

お 話 「鶴彬と今」

木津川 計「上方芸能」誌代表

兼題と選者(各題2句)

「伸びる」 木本 朱夏 選(和歌山三幸川柳会)

「にやが」 赤松ますみ 選(川柳文学コロキウム)

「夢」 佐藤 岳俊 選(川柳人社・岩手県)

「自由」 田中 新一 選(番傘川柳本社)

「鶴」 西出 楓楽 選(川 柳 塔 社)

特別投句 「生む」川端 一步 謝選 8月20日迄

専用葉書

欠席投句 B5判用紙、各題2句、特別投句の

葉書と1000円同封

8月20日(日)までに郵送

参加費 2000円(大会誌、記念品、鶴彬大賞)

懇親会費 6000円(希望者は特別投句の葉

書に記入、定員60人)

主 催 鶴彬顕彰碑建立実行委員会

共 催 あかつき川柳会

番傘川柳本社創立100年記念全国川柳大会

— 番傘川柳百年史発刊 —

日 時 10月12日(日) 10時開場

場 所 なら100年会館(「JR奈良駅西側」)

祝 辞 今川 乱魚氏(全日本川柳協会会長)

上野 道善師・華嚴宗管長・東大寺別当

田辺 聖子氏(作家)

事前投句 時代(番傘川柳本社) 森中恵美子 謝選

宿 題 祝 う(あうすと川柳社) 赤井 花城 選

あれから(柳都川柳社) 大野 風柳 選

仏 (川 柳 塔 社) 河内 天笑 選

ページ(下野川柳会) 川俣 秀夫 選

未来(札幌川柳社) 斎藤 大雄 選

眺める(川柳きりり社) 竹本瓢太郎 選

進む(川柳研究社) 西来 みわ 選

◎ 出句締切 12時 席題なし

◎ 事前投句、宿題共各題1句。欠席投句拝辞

◎ 事前投句は所定の用紙に記入、8月31日必着

会 費 5千円(軽食・番傘川柳百年史・記念品)

懇親宴 1万円(ホテル日航奈良(要予約) 17時~19時

問合わせ・申込み

番傘川柳本社 TEL 06・6361・2455

主 催 番傘川柳本社 後援 (社)全日本川柳協会

'08すみさか大賞誌上大会

兼題と選者(各題新作2句ずつ4句1組)

「星」 斎藤大雄・近藤季男・濱野奇童・小林

映帆・平尾忠文。「自由吟」 佐藤純一・小島

蘭幸・安藤富久雄・中島幸女・中澤恵生。

用紙・便箋、投句料1組2千円(複数可)

締切5月25日。発表8月初旬。

投句先382 須坂郵便局私書箱第18号

すみさか川柳社宛

津山市芸術祭

第30回 津山川柳大会

と き 6月1日(日) 開会午後1時

ところ 津山市総合福祉会館

題と選者 各題2句(締切11時30分)

「午後」小澤誌津子・「鳥」田中 博造

「茨」西出 楓楽・「景」石部 明

「歩く」赤井 花城・「覚悟」前田美巳代

「石」墨 作一郎・「動く」森中恵美子

会 費 千円 欠席投句拝辞

問合わせ 津山市経済文化振興課

TEL 0868・322・2121

主 催 津 山 市

柳界展望

(同人・砂川市)が受賞。

○第8回春はくろぼこ川柳大会は新日本海新聞社中部本社ホールにて4月6日開催、96名、同人特選句。

散り際のさくらは少しだけ絡む 太田扶美代

○第48回伍健まつり川柳大会が2月17日、愛媛県民文化会館で開催された。参加者は320名。合点方式で15名が表彰された。

同人の受賞者は、高橋宏臣 宮尾みのり。

○東京番傘川柳社創立70周年記念句会は3月30日曳舟文化センターにて開催、158名の参加。同人の特選。

静観を決めて花芽を太らせる

鏡台だけでいい母さんの形見

輪になって踊ろう後期高齢者 以上3句播本充子

○川柳オホーツク平成19年度凍原賞を大橋政良さん

▽同人動向△

○3月20日、西出楓楽(理事長・大阪市)、奥田みつ子(相談役・西宮市)は日川協常任理事会出席の為、福岡県大宰府市行。

○4月6日、河内天笑(主幹・堺市)他4名、第8回くろぼこ川柳大会出席の為鳥取県倉吉市行。

○木本朱夏さん(常任理事和歌山市)は「触光」の触光集を一年間担当する。

▽訂正とお詫び△
4月号122頁ひとこと欄下段10行目、公礼↓高礼

岸和田市

お知らせ(総務部)

例年六月に開催していましたが特別常任理事会は今後原則として代表者会議と交互に隔年開催と致します。

従いまして本年は特別常任理事会は開催されませんのでお知らせ致します。

新同人紹介

な た ん
七反田 順子

推薦者―哲男・美籠

▽新誌友紹介△

静岡市 渡辺 芳子

紹介者 三谷たん吉

尼崎市 児玉 歌子

紹介者 西出 楓楽

三田市 福田 好文

紹介者 北野 哲男

高知市 松尾 憲子

紹介者 桑名 孝雄

藤原 昭

紹介者 土橋 房枝

阪南市 井上 正己

紹介者 黒田 能子

大阪市 粕谷都代子

紹介者 江見 見清

大阪市 西藤次男坊

坂出市 綾井 嘉彦

三木市 山口 久子

大阪狭山市 佐々木一頼

▽常任理事会△

4月7日(月)出席13名。①第

14回川柳塔まつりの選者推せん②特別常任理事会について③継続審議事項(常任理事登用資格について)討

議④定例確認事項⑤各部報告事項、その他

次回5月7日(水)1時30分、

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時半締切 計算・無数・運ぶ	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
岸和田 川柳会	17日(土)午後2時締切 演歌・起きる・賢い・キャンプ	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 藤井寺	18日(日)午後2時締切 顔・中古・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳 ねやがわ	18日(日)午後1時半締切 態度・財布・不意・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半締切 人柄・占い・どちら	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時50分締切 考える・臨時・きつい・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	20日(火)午後1時より 子供・仕事・どんどん・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前9時30分から 普通・空き缶・外国・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和歌山 三川柳会	24日(土)午後1時から スープ・策・味	勤労者総合センター 4F会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川柳同好会	24日(土)午後7時締切 開く・田舎・うっかり・男	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳会	25日(日)午後2時締切 伸びる・ぴったり・ペア・畑	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん社	25日(日)午後1時より タジタジ・うとましい・援軍	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
南大阪 川柳会	26日(月)午後6時から 配分・垢・気紛れ・雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	26日(月) 吟 行 ゆったり・鳴る・直角	JR稲荷駅 10:30 集合 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳塔 松露川柳会	26日(月)午後7時半から 評判・許す・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な	1日(木)午後1時から 脱ぐ・線・純粹	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
尼 崎 いくしま	2日(金)午後2時締切 遊ぶ・団体・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富 柳 会	3日(土)午後2時締切 登・恵む・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	3日(土)午後2時締切 乗り物・とる・暴(あば)く	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	5日(月)午後1時半から とんぼ・ポスト・噂	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川柳大阪	10日(土)午後1時から 錯覚・情・まだまだ	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
堺川柳会	10日(土)午後1時から 旗・責める・「かずさ(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 みちのく	10日(土)午後5時半締切 雑草・呼吸・義理	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
城 北 川 柳 会	10日(土)午後1時開場 手・走る・メダル・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後2時締切 活気・愚か・緑・デザイン	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川 柳 塔 打 吹	10日(土)午後2時締切 点・喧嘩・揺れる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	11日(日)午後2時締切 熱気・救う・ゆらゆら・雑詠	山本コミュニティーセンター3F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	11日(日)午後2時締切 鋭い・創作・そろそろ・「球技」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から 許す・白黒・びちびち・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	13日(火)午後2時締切 緑・吹く・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治

編集後記

☆東北の桜も散りはじめている頃でしょうか。大阪城の桜木はすっかり緑に被われてしまいました。

今月号には特集「花百句」を掲載しています。桜をはじめとどりの花をお楽しみ下さい。

☆私事ながら、今年も99歳の母とお花見を楽しむことができました。ここ数年は車椅子を押しながら、翌年の花見を目標に、また一年、一年と過ごしてきました。来年は100歳の花見が出来ますように念じています。

☆川柳塔編集部に、同人の方から時々お便りをいただきます。昨年唐津市の同人(80歳)からはこんなお便りをいただきました。

「家内が難聴に加えて認知症、介護施設に入所中ですが、食が細いので、毎日

夕食の介添えに通っています。車で10分という近い所で助かります。まだ、お父さんと言ってくれるのが励みです。川柳、短歌の結社に入って満10年、老化防止が目的ですが、特に川柳は認知症予防に一番じゃないでしょうか」

☆また鳥取県の同人からは塔誌の送り仮名について、誤りではと書いてこられました。「置手紙」は「置き手紙」「暮す」は「暮らす」等、ある辞書を根拠にしてのご指摘です。

☆広辞苑第六版(岩波書房)では「置手紙」「暮す」とあり、新明解国語辞典(三省堂)によれば、「置(き)手紙」「暮(す)」となっています。括弧はいずれも可ということです。新聞社はどちらかに統一しているとのことです。綿密に塔誌を読

んでいただいていることに感謝しています。

(希)

ひとこと

ますます女性

現役の頃、女性がいきいきとした職場は仕事成果もいいと見ていた。どうやら女性が楽しくしているとも男も嬉しく元気を出すということのようだった。嫁はんの機嫌がいいと楽しいのと同じだ。

俳句の総人口の70%は女性だそうだが、俳句界の盛況はこんなところにもうかがえると思う。

我が川柳はどうだろう。調べようもないので思いつくまま同人名

○常々思うに理想的な暮らしを考えると、探し物をしなくてはならない暮らしと近頃特に思

うのである。毎日自分の腹を立てながらである。人生探し物をする時間がなくなると、かなりゆとりが生まれそうなのがする。

○多少心がけて「持たない暮らし」をしているが、私より心がけている人がいる。一度引き出しの奥の奥まで見せてもらいたいもの

簿をみると、女性は54%だった。まだまだ増えていいという思いがある。

全国65歳以上の人口中女性が約60%、100歳以上になると85%を占める。川柳のこれからは是非、女性の活躍に期待したいしまたそんな工夫も必要と思ふ。

このほど、城北川柳会で107名の参加を得て合同句集第八集が完成したが、その65%が女性だった。期待どおりの健闘に乾杯したい。

(吉岡 修)

いるのではないかと、ふと思った。懲りもせず無駄な買い物を増やして物に囲まれ探し物をするのだ。

○五回に四回くらいはスツと出てきて欲しい。因みに二週間ばかり探しているのが車の鍵だ。運転は出来ないが買物のとき持っておくと何かと便利、と持っていたのだがでて来ない。主人には内緒で毎日こっそり探

している。

(恵)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)」

地名

都府
道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「ふらふら」 (5月15日締切)

7月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	— —	

○ ○

年 年

月から半年
月から一年

50000円
98000円

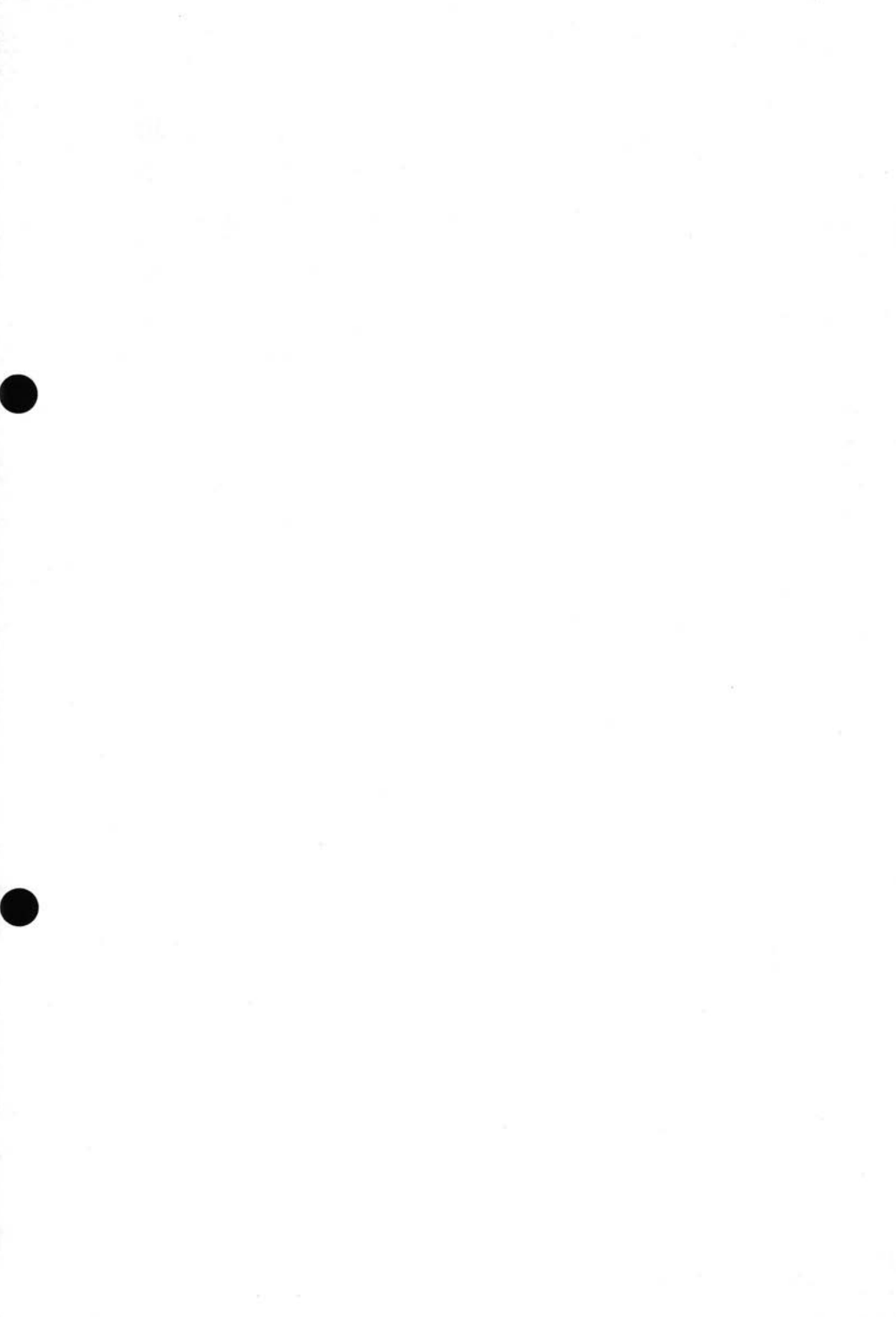
該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (2句)
一路集 (3句)
初歩教室

河内天笑選
西出楓選
新家完司選
鈴木公弘共選
鈴木公弘共選
山口いゑる選
西口いゑる選

時路選
清川玲子選
喜田准一選
三宅保州担当

「安い」(3句)
「ポスト」
「とんぼ」
「噂」

8月号

檸檬抄「粒」
一路集「折る」「場所」
「カラフル」
初歩教室「眼鏡」

本社5月句会

とき 5月7日(水) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切時間に注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

おはなし「二期一会」
席題「」
兼題「さすが」
「食」
「大安」
「スーパ」
「紫外線」

会費 1000円
投句料 500円(切手可)

河内天笑選
木本朱夏選
米田恭昌選
米澤俣子選
太田扶美代選
前田たもつ選
出口セツ子選

本社6月句会

3日(火) 午後5時半から

兼題「悔しい」「腕」「尽くす」
「マジック」「無我」

第26年度 夜市川柳募集

最終回「いつも」 小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

(二〇〇八年平成二十年)五月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

大阪市天王寺区大道一丁目一四一七

〒543-0052

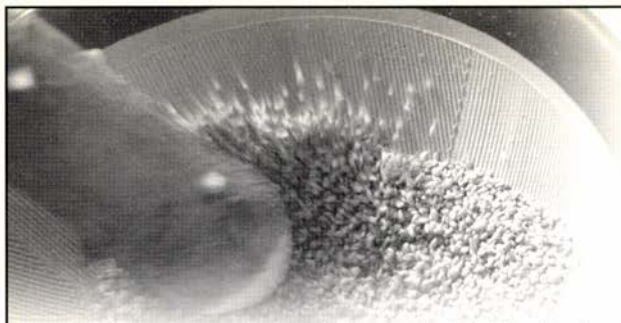
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六六七九三三四九〇番)
振替(〇九八〇一四二九八四七九番)

オニザキの

すりごま



自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。

株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)